ISSN 2187-1833

京都市学校歴史博物館研究紀要

第 10 号

目　次

はじめに　研究紀要第 10 号の発刊に当たって　池本　良之 (1)

講演録　教育文化と学校文化 ――学校の未来を考えるために――
稲垣　恭子 (3)

展覧会報告　学制 150 年に学校を記念すること
――企画展「郡中小学校―京都市におけるもう一つの小学校 150 年―」調査・展示報告――
林　潤平 (19)

資料紹介　家庭と学校との聯絡機関誌『糺の泉』
――「主体性」及び学校をめぐる「つながり」とを可視化する学校発行雑誌というメディア――
林　潤平 (27)

資料紹介　「如雲社月並書画展観録」　森田　淑乃 (41)

令和 5 (2023) 年 6 月

京都市学校歴史博物館

研究紀要第十号の発刊に当たって

京都市学校歴史博物館は、平成十年の開館以来、本年令和五年で、開館二十五周年の節目の年を迎えた。この四半世紀の間、地元開智学区の皆様の多大なご理解とご協力のもと、市内外の多くの方々のご利用、史資料の調査研究、各種講座の展開等を通じ、本市生涯学習の一翼を担ってきたところである。時あたかも、文化庁の京都移転が実現し、さらにはコロナ禍からの脱却や、当館の耐震工事も今年度で終了予定といった諸状況を好機ととらえ、更なる施設の充実を図っていきたいと考えている。

さて、第十号となる本研究紀要では、企画展講演会における講演録、教育史分野の企画展報告、さらに教育史美術史の両分野から資料紹介を掲載した。

まず、本年二月二十五日、京都大学理事・副学長の稲垣恭子氏にご講演いただいた、「教育文化と学校文化―学校の未来を考えるために―」を掲載させていただいた。学制一五〇年を迎え、各校で自校史編纂が想定される中で、長く蓄積されてきた学校資料の持つ意味を考えるとともに、学校建築や空間も含めた学校のあり方を問い直す取組が活発になる状況のもとで、教育文化・学校文化を未来に向かって考えていくための、たいへん示唆に富んだ内容となった。

次に、教育史担当学芸員、林潤平による展覧会報告「学制一五〇年に学校を記念すること―企画展「郡中小学校―京都市におけるもう一つの小学校一五〇年―」調査・展示報告―」では、これまであまり調査対象となることがなかった「郡中小学校」について、今回、各校の創設過程や、個性・多様性が新たに判明したことは大きな成果であり、また、この機に学校を記念することは、地域との密接な結びつきにより支えられてきた学校が、少子高齢化の中で変容を迎えていることを感じ取られるという意味で、意義深い内容となっている。

次に、同じく林学芸員による資料紹介「家庭と学校との聯絡機関紙『糺の泉』―「主体性」及び学校をめぐる「つながり」とを可視化する学校発行雑誌というメディア」を掲載した。本件は、企画展「郡中小学校」の調査過程において発見された、かつて下鴨校（現京都市立下鴨小学校）で発行されていた冊子「糺の泉」について、その内容を紹介するとともに、学校関連メディアとしての資料的価値や可能性について述べるものである。

最後は、美術史担当学芸員、森田淑乃による、「如雲社月並書画展観録」の紹介である。これは、当館に寄託された、幕末から明治にかけて京都で毎月書画を持寄り展観していた「如雲社」の活動記録を、当館学芸補助の田部美紗及び島田千晴とともに活字化したものである。同展観録には、開催日・場所・出品書画・社員や幹部の名簿等、詳細な記録が残されており、今後の同社の活動の研究の一助となることが期待される。

さて、冒頭にも述べたように、節目の年である今年、当館がより魅力ある施設として、数多くの方にご来場いただけるよう、展示内容や調査研究はもちろんのこと、広報活動の充実や、誰にとってもわかりやすい、居心地のよい博物館に向けた取組など、様々な観点から工夫をこらしてまいりたい。

今号が、今後の当博物館の活動や、本市の生涯学習に少しでも寄与出来るとすれば、この上ないよろこびである。

京都市学校歴史博物館事務局長　池本　良之

【講演録】

教育文化と学校文化――学校の未来を考えるために――

稲垣　恭子

一・はじめに

どうも皆さんこんにちは。京都大学の稲垣と申します。今日はどうぞ宜しくお願いいたします。少し距離があるので、一応こんな顔ということで、マスクを外して話をさせていただきたいと思います。

冒頭でご紹介をいただきましたように、今は京都大学にいますが、元々は教育社会学の教育分野を専門にしており、とくに広い意味での教育の営みというなかで身についていく教育文化、つまり文化という視点から色々なテーマについて研究をしてきました。具体的には、今日少しお話したいと思うのですが、戦前からの女学生の文化や、教師・生徒関係、とくに古い伝統的なスタイルですが師弟関係の歴史、いわばそういった現在ではなくなりつつある文化や教育関係についても射程に入れて考えてまいりました。最近関心を持っているのは、この頃あまり聞かなくなったかもしれませんが、ビルドゥングスロマン、つまり成長物語です。人がだんだんと成長し、旅立ちをして、艱難辛苦や失敗を経て、それらを乗り越えて大人になるというのが、ビルドゥングスロマンと呼ばれている物語の図式です。かつてヨーロッパで一八世紀、一九世紀から登場したものです。こうした観点から子どもの成長における挫折や乗り越えということの意味をもう一度考えてみたいということで、とくに私は女学生の研究をしていたこともあり、女性の成長を改めて見直す観点から、朝ドラを素材にして研究もしております。

こうしたテーマを研究していく上で、教育社会学という分野は、統計的なエビデンスデータを使うことがとくに多いのですが、むしろ私は日記や手紙、自伝といったような個人資料や、それからビルドゥングスロマンのような小説、物語など、そういったものも資料として扱ってまいりました。私は、文化を考える上では、こういった資料もとても重要な鍵になるものだと思っており、また後で林先生ともディスカッションしますが、こういった資料をどういう風に扱っていくかという点では、非常に難しいところがあり、現在でも試行錯誤しながら取り組んでいるところです。

二・本日の講演内容――学校の思い出と学校空間から考える教育文化・学校文化

今日は、この博物館で郡中小学校の創設一五〇周年記念の企画展示をされているということもあり、学校文化の歴史を踏まえてこれからの学校文化を考えていくということで、とくに二つの視点から話題の提供をしてみたいと思っています。

一つは、学校時代の思い出を扱った会誌や、当時を振り返って語る回顧インタビューというような、制度や客観的な事実からは十分には見えてこないような、個々人の経験や生活を見ていくことの意味について考えたいと思っています。師弟関係の歴史をテーマに研究をいたしました時に、日経新聞に今も連載されていますが、一九五六(昭和三一)年から始まった「私の履歴書」というコーナーがあり、そちらに掲載された記事を調べてみたことがあります。八〇〇人位の方々のそれぞれの半生について、およそ一ヶ月をスパンとして記述されているのですが、それらの記事において、それぞれの人が学校の先生や人生の師など、自分にとっての師という存在について、半生の思い出の中でどの程度の量を語っているのかという点につきまして、行数を計るという、面倒な作業をいたしました。それを調べてみたところ、全体の八四％の人が、学校時代の先生の事について何らかの形で

語っていることが分かりました。もちろん先生以外のこと、例えば友達や、クラブ活動のことなど、学校生活全般のことも含めて調べれば、もっと割合は増えるわけですが、先生の思い出だけでも八四％の人が語っている。それから人生の師も入れると、九〇％以上の人が先生なるものについて語っているということで、人生にとって学校がとても大きな位置を占めているということは、これだけでも窺い知れるのではないかと思います。

しかし、思い出と言いましても、人それぞれ思い出すことは違いますし、その当時と思い出した時期とではだいぶニュアンスが違うことはもちろんあるわけです。嫌な思い出だったけれど、年月が経ってみると、「ああ、良い思い出だったなあ」という風に変わるということはよくあります。そういう意味では扱いが難しいところはあると思いますが、だからといってそれが意味がないということではありません。むしろ、人はなぜ学校や先生のことを節目節目で思い出すのか、そういうときに何を思い出すのか、どういうときに思い出すのか。それ自体が学校の意味というものを考える上で、「その当時何を習ったか」という知識の量だけではなく、「私の人生にとって学校とは何だったのか」ということを考える意味で、やはりそういう思い出や事柄が大きな資料になると考えています。そこで、まず学校の思い出についての語りや記録というものが、学校文化を考える上でどういう意味があるのかについて、お話をしてみたいと思っています。

もう一つは、学校空間という、学校の空間の意味についてです。学校文化というと、運動会やスポーツ大会といったようなイベントの事を思い出すことが多いかもしれませんが、実は毎日生活をしている学校の建物や、教室の設え、トイレはどこの位置にあったか等、そういうことが学校文化としても非常に大きな意味を持っています。最近そのこともかなり注目されるようになってきていると思うのです。学校建築や、学校の空間配置というのは、近代学校が成立する時期に、あるモットーや目的をもって整備されたわけですが、学校や社会、さらには生徒達が、生活環境も含めてどんどん変化していくなかで、現在の学校空間の持つ意味はどういうものなのか、これからどういう風な空間としてつくられていく必要があるのか、というようなことを、今もう少ししっかりと考えていく意味があるのではないかと思っています。

この二つの視点を軸にして、学校文化・教育文化の意味を考える素材にしてみたいというのが、この講演の趣旨でございます。まず私の方からこの二つについてお話をしました上で、それを受けて林先生と一緒に、郡中小学校の企画展に関する学校の資料や、校舎の活用などを含めて、その延長の形でお話ができればという風に考えています。

三・学校の記憶――ポジティブなノスタルジア・集合的記憶

それではまず学校の記憶についてです。先ほど少し申しましたが、私は女学校研究の一環といたしまして、二〇〇三(平成一五)年から二〇〇四(平成一六)年にかけて、もうだいぶ時間が経ってしまいましたが、関西の高等女学校卒業生約三〇〇〇名の方達に、回顧アンケートと回顧インタビューを行なったことがございます。昭和九(一九三四)年から一九(一九四四)年の卒業生までを含む方達で、当時でも七〇歳から八〇代後半の方までいらしたので、今ご存命の方であれば、一〇〇歳前後ということになる方々です。当時の思い出についてうかがいますと、本当に細部までよく覚えておられ、すごく饒舌に話してくださいました。インタビューをする側としては、話したくないことをうかがうのではなく、話したいことを聴くわけですので、楽しいインタビューでもあるのですが、そのなかで私が、本日思い出のテーマについて話す上で印象に残っているエピソードを、一つ二つ、少しご紹介したいと思います。

一つは、御所のすぐ側にある府立第一高等女学校、現在の鴨沂高校の卒業生の方のお話です。こちらの女学校に通っていたのは、どちらかというと官吏やサラリーマン等、そのようなお勤めのおうちの方が多かったのですが、そこに通われていた昭和一七(一九四二)年の卒業生の方に色々なお話を聞きました。その方自身は、自分が不良女学生だったと仰っているのですが、話はあまり不良のことではなく、女学校で「春は茫々としてかなし」という一節を国語の時間に習ったが、意味があまり分からなかったこと、そしてそれを習った後に、友達と数人で奈良

に行き、帰りの電車の中から、ちょうど夕日が差し込む法隆寺を眺めたときに、急に初めてその意味が分かったと言うのです。「誰かが亡くなって悲しいとか、そういう意味の悲しいではなく、茫々としてかなしい。夕日が落ちるその風景のなかに、何というか季節がもっているような、かなしいという意味が分かった。それで自分は、「あ、これなんだ」と思って、それを言おうと友達の方をぱっと見たら、皆が「かなしいなあ」と言って、電車のなかで泣き出した」と言うのですね。「そこで「春は茫々としてかなし」という所の「かなしい」の意味が、皆に共有されたということをすごくよく憶えているんです。そういうところも含めて、実は今の自分を支えているのは、絶対にあの若い女学生の時代に身についた感性だ」という風に、その方は話してくれました。非常に印象的に私も憶えています。つまり、現在も大切にしている自分の感受性や感性を、女学生の頃の記憶としてずっと今も持ち続けている。そういうものだということを、強く感じた瞬間だったんです。

それからもう一つ堀川女学校、現在の堀川高等学校ですが、こちらはどちらかというと、商家のおうちの方が多い女学校です。昭和一二(一九三七)年から一七(一九四二)年の卒業生一〇名ほどの方に集まっていただき、堀川高校の教室を借りてインタビューをしました。これも面白かったのです。最初はみなさん、非常に緊張されていましたが、授業や部活等、色々な思い出を話しているうちに、どんどん饒舌になり、ほとんどの方がもう八〇歳前後でしたが、「キャー」等言って話されて、まるで少女のように見えてくるという、私としても違和感を覚えたことがあります。まるで現在のことのように非常に詳細な記憶が出てくるのですが、三時間ぐらいの間、なにか部屋ごと女学校に移動してしまったかのような、そんな不思議な感覚がありました。

このインタビューの時に私が感じたことは、一つは女学校時代を過ごした教室や校庭が、過去の記憶を呼び起こす上でも、それから懐かしさを惹き出す空間としても、非常に重要なものであることです。だから私たちは同窓会をする時に、その学校や教室に行って、そこで語り合いたいという気持ちがとてもあるのですが、そういう場所が持つ意味が非常に大きいということを感じました。それから二つ目が、女学校時代が懐かしい思い出だということは勿論ですが、それが既に終わってしまった過去のノスタルジーであるというだけではなく、その感覚や感性などが、今現在のその方々のなかに生きている、つまり文化の一部になっているのだということを、非常に感じました。そして三つ目に、一緒に思い出を語り合う機会、例えばこうした集まりであったり、同窓会であったり、そういう場を持つことによって、その当時の意味を補完したり、改めて共有したりする場ができる、そしてそれを非常に大切にされているということを感じたわけです。実際私達の調査でも、女学校時代の友達と、今でも会ったり、連絡を取ったりしているという人が非常に多く、頻繁に会っているという人が、三〇〇〇人のアンケート調査の中でも、三〇％以上いらっしゃいます。それから一ヶ月に一回程度という頻度でも、二〇％を超えています。女学校は、もうなくなってしまっていますが、人生のハイライトだと思っている方が多いので、とくにそういうことが多いということです。後に申しますが、こういう記憶は自分ひとりだけの思い出というよりも、「集合的な記憶」なんだということが大切な点だと思っています。

このように思い出として語られるというのが一方であり、他方ではこうした思い出として残される資料や色々な品々というものもございます。当時の学校日誌の類や同窓会誌など、学校に残された資料もありますが、個人の日記や手紙類、それから当時大切にしていた物なども、資料としてかなり大切なものだという風に私は思っています。とくに京都は戦争で焼けていないということもあり、元女学生の方々も、非常に大切にそういうものを取ってらっしゃる方が多くいます。それから養子、つまり、商家の人は養子をとって自分の実家にずっと住んでらっしゃるということで、女学校時代のものをたくさん持ってらっしゃる方がいます。私はそういった物がとても貴重な資料だと思っていて、雑誌も国会図書館に行くと古い雑誌、漫画とかそういうのが残っていますけれど、附録は残っていないのですね。そういう附録類とかも個人で大切に残してらっしゃる方が多くいて、なかなか面白いものです。

それでは一体どういうものを持っていたかというと、今回は堀川女学校の卒業生の方で、当時八五歳だった方が大切にされていたものの一部を紹介します。例えばノートブックです。「少女の友」という雑誌の附録のノートブックで、B5くら

いのサイズのものです。今も大切に取ってらっしゃることが伝わってきます。また、5センチ角の小さな手帳もあって、手書きで色々なことをたくさん書き込まれている日記です。さらには、少女雑誌のやはり附録の「花詩集」などもあり、中を開けると短い詩が少し書いてあります。そこに花の枝折のような形で、クローバーなどが綺麗に残って挟まれているというものです。雑誌の附録の枝折などもあり、当時大変人気のあった中原淳一などが絵を書いています。同じくやはりイラストの付いた封筒とお手紙もあります。そのお手紙の内容ですが、当時上級生と下級生がとても仲良く手紙のやり取りをすることが流行っていて、その関係をエスという風に呼んでいたのですが、このお手紙は下級生からもらったもの、つまり下級生とエスの関係にあったことを示すものです。最初に「お姉様」という感じの文章があるのですが、内容も非常に面白く、こういったものを全部取っておられます。さらにこの方は、授業中に皆で回したメモのようなものも、リボンにくるんで大切に取っていらっしゃり、非常に大切なものだったということが分かります。

こういうものを何でそんなに大切に取っているのだろうか、ということですが、自分にとってはとても小さなものであっても、大切な記憶として残しているのです。ただしまっておくだけではなく、とても綺麗に残していらっしゃるわけで、家庭や仕事で自分が苦しいことがあったり、辛いことがあったりした時に、それを取り出して見ると、何か励まされるようで元気が出る、という風におっしゃったのです。つまり、過去の思い出とか、ノスタルジアというものは、過去を美化して退行するという、後ろ向きなものと捉えられがちですが、こういう女学生の方々にとっては、むしろその頃の思い出を鏡にして、現在の自分を別の角度から読みかえて生き直すという、そういう意味でポジティブなノスタルジアだという風に私は考えています。もちろんポジティブでないノスタルジア、例えばクレヨンしんちゃんの『嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲』という、ちょうど私くらいの年代になるのかもしれませんが、七〇年代の世界に逃げ込み、そこに籠り切って、しんちゃん達が助けに行くという映画もございます。そのようなものもあるかもしれませんが、生き直す上で大切にしているもの、人生にとって大切な記憶という意味も含まれているということなのです。

次に、「じゃあどんなことを学校の思い出としてよく皆が語るのだろうか」、ということですが、友人や先生、課外活動や遊びなどは、よく思い出して語られます。つまり人との関係です。また、制服や鞄、文房具など、こういうものを使っていたということも、よく語られます。物との関係と言えるでしょう。それから、教室の机や椅子、黒板、校庭にあった木やベンチ、砂場やブランコといったような、場所との関係。また入学式や卒業式や運動会といった、まさに集団との関係。こういうものを色々と思い出すわけです。

それでは、こういう思い出がどういう意味を持っているのかということについて、続けて考えてみますと、まず思い出というものは非常に多様であることに注目できると思います。同じ経験をしていても、同じ場を共有していても、一人一人思い出すことはかなり多様です。人によっては覚えていたり、忘れて全く覚えてなかったりすることもあり、同じことを覚えていたとしても、記憶がそれぞれ違っているということもあります。同じ思い出でも時間が経つと、自身の環境や立場が変わり、思い出し方やその語り方が変わってくることもあります。その意味では、思い出というのは、歴史的な事実とは違って、多様な人達がそれぞれに思い描く世界なのだなと、いうことができると思います。

そして、その「思い描く世界」というと、個々人の主観だというイメージがあるかもしれませんが、実はほとんどの記憶は、他者や集団との繋がりのなかで思い出すものだということを指摘したのが、モーリス・アルヴァックスという人です。アルヴァックスは、思い出を得るためには、過ぎ去った出来事のイメージをばらばらに再構成する事だけではないと言っています。自分の心の中だけではなく、他の人達の心にも存在する共通の観念、共通の枠組み、つまり「学校とはこういうところなのだ」という当時の共通した感覚をベースにして、個人であっても思い出を想起し、自分なりにそれを解釈していく。そういう意味では、同じ社会に属しているから、同じ場をある種の前提をもって思い出す。記憶というのは、集団と共に思い起こされるものであり、集団という枠組みを前提として思い出される、つまりそういう意味で集合的記憶なのだ、と。学校なるものの共通のイメージや前提というものがあって、それを基に思い出すから、いかなる記憶も、徹底的に

真空の個人から生まれるものではなく、集合的な記憶なのだと、アルヴァックスは言っています。

そのようなわけで、私は同窓会を、「思い出共同体」と呼んでいるのですが、それは、思い出は他者と共にあるということと、もう一つは現在まで続く共同体であるということです。「思い出共同体」とは、学校という場を枠組みとして、そこでの経験を他者と共有しながら、その物語、つまり過去と現在を繋ぐ物語を形成する営みであると考えています。そういう意味でアルヴァックスは集合的記憶という概念を提唱したわけですが、それは学校という存在の意味や、それを継承していくということとも繋がっているという意味で、まさに文化、想起する文化であると言えます。「思い描く世界」というのは想起する文化、文化そのものであるという風に考えているわけです。そのように考えますと、学校の意味や、学校が私たちに持っている影響は、学校に通っている間だけではなく、卒業してからもずっと、その思い出を振り返ったり、意味付けをし直したりすることで、人生を生き直すことにも繋がる。そういう意味で学校の思い出が、人生にとって大きな意味を持つということになるのだと思います。

デイビスという人は、「ノスタルジアとは、大部分現在から借用した所与の力を借りて過去を再生することだ」と語っています。つまり、固定した過去のイメージを再生するだけではなく、現在の私から語り直すという、そういうものが基本的にノスタルジアを作り出しているということです。ですから、ノスタルジアという感情は、過去を契機としていますが、そこに回帰していくというよりも、それを現在の中に再生することによって、現在の自分や社会を見つめ直して新たな意味を見出していく、そういう機会を与えてくれるものでもあると言えると思います。こういうノスタルジアをウェンディ・ミラーは、「ポストモダン・ノスタルジア」と呼んでおります。つまりノスタルジアというのは、後ろ向きなものではなく、むしろ現在の自分や社会に足りないものを改めて見出して、それを現在のなかに呼び込む。そういう意味でポジティブなノスタルジアであり、これをポストモダン・ノスタルジアという風に呼んだということです。

さらに言うと、実はこうしたノスタルジアは必ずしも過去の経験を共有する人達の間だけで生じるわけではなく、実は経験していない人とも共有される場合があります。自分と同じ経験をしていない人なのに、何か同じように懐かしい感じがするということを、若い世代の人が言うこともあります。それは現代のなかに無いものを新しいものとして引き入れる契機にもなる。そういう意味で、経験していない懐かしさというのは、今の自分たちの生活に無いもの、それを見出して現在のなかに呼び込む、そういうポジティブな性質も持っているということです。学校の思い出のなかに現代の学校や教育を見直す手がかりが見つかる。ノスタルジアや過去を思い出すことは、そういう意味も持っている。現代の学校というものを見直す契機にもなる。そういう意味でも大切であると私は思っています。このように学校の思い出というのは、過去の学校の記録ではなく、また個々人がとりとめなく思い出す現象ということでもなく、学校という場を枠組みとして、その意味を社会的に共有し、さらに作り直していく文化の営みだということができます。そういう意味で学校文化を考える時にも、このような視点を持つことが、実はとても大切だと思っております。

四、近代学校の建築と空間の特徴

さて、思い出や過去の記憶については、以上のようなことが話題提供の一つですが、もう一つ、学校文化を支える重要な視点として、今度は学校建築と学校空間という点に目を向けて話をしてみたいと思います。学校の思い出を語るときも、場所というのが非常に大きな意味を持っているというのは先ほども申しました通りですが、かつて学生時代に過ごした教室や校庭に来ますと、その当時のことが非常にリアルによみがえってくるということがあります。ただ、自分の頭の中で覚えていたことと実際はとても違っているということも多々あります。私が小学生の時に毎日のように遊びに行っていた友達の家が、大きな階段の坂道の一番上にあり、そこに通っていたことがずっとリフレインするものですから、二〇年くらい前に行った際、思ったより狭い道で、「えぇ、こんなところだったのか」と思い、イメージが少し崩れてしまいました。それでも懐かしくてたまらないという場所

があると思うのです。

イーフー・トゥアンという人は、そういう感情を「トポフィリア」という言葉で呼んでいます。場所を表す言葉として「トポス」というのがあり、執着するような愛情を「フィリア」と言います。これを合わせて、人と場所または環境との間の情緒的な結びつき、つまりトポスとフィリアを合わせた言葉としてトポフィリアという言葉を使っています。学校空間や学校建築は、日常生活を過ごしていく上で自然に身体化される文化として非常に重要なもので、それが後々トポフィリアとしてリフレインされるというものでもあるわけです。だから卒業してもずっと覚えていたり身に付いていたりする。そういう意味で環境としても大切なものです。こういう観点からこの学校建築・学校空間をどう見たらよいのかについて、少しお話しができたらと思っています。

まず歴史を遡り、私よりご存知の方も多いと思いますが、近代学校の成立とともにつくられた学校建築の特徴を、振り返ってみたいと思います。ご存知のように明治に近代学校がつくられる以前は、子どもを集めて学習する場として、寺子屋というものがありました。これは、私たちが知っている学校とはかなり違ったものです。畳の部屋に長机が置かれていて、生徒達はそこに横並びで座ります。先生にあたる師匠に背を向けた位置に子どもがいることもあります。生徒の年齢も実は様々で、それぞれが自分の進路に合わせて学習するスタイルが、寺子屋だったわけです。

これが明治になって近代学校が各地につくられていくようになりますと、いわゆる教室になるわけです。黒板や教卓、椅子、つまり家では畳にちゃぶ台がある当時としては、いまだ見慣れないような西洋風の家具が置かれていて、こういう椅子と机に生徒達は全員が先生の方を向いて座るという空間配置になったわけです。生徒の方はまだ和服を着ていますが、先生は洋服を、ダブルのスーツを着ています。他の絵では、壁に時計が掛かっていたり、それから世界地図とか単語図が吊り下げられていたりということも多くありました。こういう教室は、一八八〇年代から九〇年代にかけて広がりましたが、明治二四(一八九一)年に文部省が小学校設備準則を公布して以降、全国一律の建築スタイルとしてつくられていきました。この設備準則で具体的にどのように規定されたかというと、例えば校舎は平屋建てであることや、生徒四人につき一坪を確保することといった面積の基準から、講堂や特別教室、体操場、便所は必ず設置するということが決められていたわけです。さらに明治二八(一八九五)年になりますと、教室の形は長方形で、壁はグレーで、天井高はこれくらい、さらに廊下の幅はこれくらい、という細かい規定も定められて、同じスタイルの学校が全国につくられていきました。

こうした教室や机・椅子といった西洋風の家具、及びその配置というのは、子どものいる家庭ではまだ見慣れない、非常に近代的なものであり、それ自体学校というものが意味を伝える新しい文化でした。それに伴い、教育の意味合いも寺子屋での学習スタイルとは違ったものになっていくことになったと思います。例えば、明治初期の学校や教室の場面が描かれた小説を見ますと、時計が出てくることがとても多いのです。『世路日記』という、明治によく読まれた政治小説がありますが、この冒頭というのは、小学校の場面から始まります。まず明け方、朝日が昇る前の暗い教室に、時計が時を刻む音だけが響いているという、描写から始まるのですが、それ以外にも小説の中には、「先生がちらっと時計を見た」や、「鐘が鳴って五時を知らせた」等、時計の描写がとても多いのです。つまり、時計で時間を刻んで生活するという習慣が新しかったことが、そういう小説からも窺えるわけです。学校に時計を設置することの意味についても、文部省から出された通論にわざわざ記述されており、そこには生徒や教師に時間を知らせることと同時に、時間を気にすることでぼんやり無駄な時間を過ごさないようにするためだ、ということも書かれています。時間を無駄にせず有効に使うという「効率」や、その間にしっかりと勉強するという「勤勉」の精神等、そのような価値が促進されるという意味も、そこには込められていたことが窺えます。

合わせて教卓や机、椅子の配置が、寺子屋とはずいぶん違うということも、先ほど申しました通りです。寺子屋では皆が先生の方を見て座るのではなく、横並びに座っていて、それぞれの進度に合わせて自学自習するという学習スタイルでした。それが近代学校になって、教卓の前に立っている先生に向かって生徒が座るという配置になることで、決まった時間割に沿い、同じ時間に、同じ内容の授業

を受けるスタイルに変わる。そういう形で色々なことが規格化することによって、衛生や安全も考慮に入れた、機能的な空間となると同時に、同じ時間内に同じ知識を皆に教え、きちんと理解できたかどうかを試験で評価するという、効率性も担保されるという仕組みになったという風に考えられます。そして、そうした仕組みを通して、学校の権威と言いますか、「正しい知識は学校で教えられる」というメッセージも、付随して伝わっていったと考えています。

五、画一的な学校空間からインクルーシブな教育空間へ――コパルなどを例に

近代学校や建築というのは、そういう目的・意図を以てつくられていたわけですが、太平洋戦争で多くの学校が焼失したり、老朽化してしまったりというなかで、戦後になると建て替えや修復が必要になってきます。そのときに、戦前の画一的な学校建築から、戦後の新しい教育理念に合った学校建築を、という意識や議論が出てきて、生徒達の学習意欲が湧くような、便利で快適で能率の上がる空間にしようという、教育環境、及び教育を支える環境としての学校建築という考え方が前に出てくるようになってきます。図書室やプレイルームといった、ホームライクなスペースもつくられるようになります。コンクリート造の画一的な機能空間はずっと変わらないという批判も、一方ではあったようですが、そういうなかでこれまでのような固定した教室ではなく、フレキシブルに空間を活用できるような、オープンスペースを備えた学校(オープン・スクール)も現れます。それまでの一斉・画一型の授業や、それに合わせた学校建築から、もっと子ども一人一人の進度や個性、興味に応じられるような教育方法と、それに合った空間づくりを提唱する。そういうコンセプトでオープン・スクールのような空間がつくられていきます。こういう考え方が徐々に浸透し、一九九〇年代の後半あたりからは、さらに子どもの積極的な活動を誘発させるような仕掛けが色々取り込まれた建築デザインや空間設計が、意識されるようになってきたと思います。「教えることから学ぶことへ」という考え方が一般にも浸透するようになることと連動して、学校建築でもそういう環境づくりに意識がいくようになってきたということですね。

ただ私は、学校建築や学校空間のデザインをめぐって、子どもの学びを誘発するという教育観や教育方法に直結して考えることが、必ずしも良いというわけではないということを、保留しておきたいと思っています。自発性であれ創造性であれ、教育意図と直接的に結びつけると、やはり特定の方向へと水路づけていくことになります。要するに教育意図がわかる空間であるか、それともわかりにくい空間であるかというのは別として、一定の方向に水路づけるということであれば、まさにミシェル・フーコー流の規律・訓練としては、むしろ徹底するという批判も、そういう批判は社会学者がよくするのですが、そういう考え方も一方ではあることを保留しておく必要があると思います。むしろ私は、建築や空間というのは文化であって、快適で楽しい空間そのものがやはり意味を持つのだ、身体化されるのだという風に、まずは考えた方が良いのではないかと思っています。

最近いくつかの子どもの遊び空間などを見る機会があり、私がとても触発されたものを事例として、少しご紹介してみたいと思います。そのひとつが「コパル」という、山形市の蔵王駅の近くなのですが、南部児童遊戯施設、「インクルーシブ・プレイス・コパル」という名前の所です(図1)。付近にある山の稜線とコパルの白い屋根をわざとシンクロさせて、自然と一体化するような設計で造ったと聞いています。この施設、とても大きな土地を使って、二〇二二(令和四)年、昨年の四月にオープンした子どもの遊戯施設です。山形は雪や雨が多いわけですが、そういう天候の悪い日でも、のびのびと子どもが遊べる場をつくるプロジェクトとしてスタートしたものです。そのコンセプトとして、わざわざ「インクルーシブ・プレイス」と言っ

図1

ていますように、障がいがあったり、それから国籍や家庭環境が違っていたりする子どもたちも、皆一緒に過ごせるような、開かれたインクルーシブ空間にしようということが、強く意識された施設になっています。設計者は大西麻貴さんという建築デザイナーで、東京でｏ＋ｈ建築事務所を開き、色々なコンセプトをもって設計をされている方ですが、実は京都大学に二〇二三(令和五)年一一月から学童保育所を開設しようと思い、私も一生懸命頑張ってやっていますが、その設計もこの大西さんがしてくださっているので、我々も楽しみにしています。開所前にプレ・オープンでイベントしますので、ぜひ見に来ていただきたいと思います。その参考になった場所がコパルです。

それで、まず入り口付近ですが、巨大な建物であるにもかかわらず威圧感がありません。玄関の入口も段差がなく、すっと入っていけるようなつくりになっています。上から見た全景からは、ランドスケープと建物と遊具が全部一体化となるような感じでつくられた、非常に曲線を活用したデザインで、手が込んだものであることがわかります(図2)。メインは体育館と遊技場で、広いのでドッチボールなどもできるのですが、一方のスロープの所には、ボルダリングができるような所も設けられていて、小さな子どもが色々チャレンジしているということになっています。

図2

面白いのはスロープの通路で、障がいのある子どもが使うスロープなのですが、ここのスロープに波型の手すりがついていて、そこにさらに輪が付けられ、この輪を動かして遊べるようになっています。わざわざ何でこんなことをしているのかというと、障がい児用のスロープだと、そのスロープは障がいのある子どもしか使わない、ほかの子どもは別の廊下を使うということになり、分断されてしまいます。それを避けるために、わざわざこういう面白い手すりを付け遊べるようにし、障がいのある子どもも普通の子どもも同じスペースを使って遊べる空間の工夫をしているわけです。

図3

それから本を読んだり、椅子に座って話したりするスペースも、オープンに設えています(図3)。ここにある椅子にも、細かい工夫がなされています。ひっくり返すと座る所の段差のサイズが違っており、置き方によって大人が座る深い面と、子どもが座る浅い面がいくつにも現われてきます。大人と子どもが一緒に同じテーブルを囲めるような、椅子の工夫がされています。またベンチですが、このベンチの横に撥が付いており、撥でベンチを叩くと木琴のような形で音が出るようになっています。遊具とベンチが両用になっているような、遊び的なものも置かれているのです。また別のスペースではネットを張って、上でトランポリンのように遊ぶことができる空間があるのですが、このネットの下のトンネルをくぐると、そのスペースで別の遊びができ、上でトランポリンで跳びはねているのが見えるという、そんな設えになっています。

このように、多様なバックグラウンドを持つ子どもが、一緒にいて楽しめる。それでいてまた少し意外性もあるような、こういう遊び空間を工夫してつくっている。そういう意味では、インクルーシブな空間づくりというのがキーコンセプトになった場所ですが、いわゆるそれがバリアフリーとか、ユニバーサルデザインとは違うものとして設計されているところが、非常に工夫された点だと思います。一般に言うバリアフリーや、ユニバーサルデザインは、色々な人がそのうちに含まれ、入って来られるような、包括的なデザインになっているから、逆に標準化する、してしまう場合があります。そういうことではなく、特別な子に必要なものをつくろうというところから始まり、それが別の個人にとっても別の使い方で共有できる。こういう視点を持つことが大切です。だから例えば右腕が使えず、左

腕だけ動かせるという障がいがある人。この人たちにとって使い勝手の良いものとは、実は赤ちゃんを抱っこするお母さんも同じじゃないかと。だからその両者が同じように使えるような、そういうものを考えましょうというような考え方です。インクルーシブな空間というのを、そういう形で考えて作っているのです。だから、ほかにも踊り場をルームにしたり、階段の途中にベンチを置き、駆け上がる子どもとそこで休んでいる高齢者が、同じ場所を共有できたりするという風な、そういう色々な意味でのインクルーシブな工夫を凝らした空間を作り、遊び空間だとしたところが、非常に面白いと思います。

続けて次は、ご存知の方も多いと思いますが、大阪中之島にできた「こども本の森」です。安藤忠雄氏の設計による図書館で、神戸市や遠野にも同じスタイルの図書館がつくられています。この図書館は、曲線を用いながら壁全体を本棚にして、天井まですべて本がある、とても素敵な空間です。本は背表紙でなく表紙をこちらに向ける、つまりスペースは取りますが、表紙を見て手に取りたいと思うことができるようになっています。そういう独自スタイルの展示の仕方をされています。真ん中に大階段があって、そこで本を読んでもいいし、誰かの講演を皆がそこに座って聴く等、そういうイベントスペースとしても使われているのです。その一方で、本棚の一部を小さなアルコーブのような形にして、一人で本を読んだり、二人でちょっと一緒にいたりという風な、小スペースのつくりになっている所もあります。それから本を借りるだけではなく、そこで楽しめるというコンセプトで図書館をつくっており、そこで何か借りるという目的はなくても、あそこに行ってみたいという風な図書館にされています。

それからもう一つ面白いのは、図書館の外についても配慮がされている点です。図書館は駅のすぐそばにありますが、図書館ができる前は、駅の地上に上がった所と図書館の間は、車が通る道路でした。それが危ないということで、安藤忠雄さんが大阪市に道路は止めて遊歩道にして欲しいと交渉されまさに遊歩道になり、そこに温度計をオブジェの形で設置するという形で、図書館から駅も安全に行けるという環境づくりをされました。ですから、図書館という建物だけでなく、その周囲も含めた空間設計が、子どもの文化環境という意味から見ても重要な視点だということが、意図されたような造りになったわけです。

また、空間設計ということではないのですが、子どもの好奇心や、探究心を育てるという点で、学校の中だけではなく、外での体験が大きな影響をもたらすということは言うまでもありません。それもただ経験、例えば見学に皆を連れて行くなど、いかにも授業の延長的なものではなく、なかなかできないような思い切った体験をすることも、考えてみると良いのではないかと。そういうときに私がすごいなと思ったのが、ロンドンのブリティッシュミュージアム（大英博物館）で実施されているスリープ・オーバーという企画です。これは、夕方以降に子ども達が博物館にやってきて、例えばエジプシャンのエリアとシリアのギャラリーという、とても大きな空間などで、一晩を過ごすことができる、だからスリープ・オーバーと名付けられた企画なのですね。寝袋を持って行って、博物館で寝るわけです。そして、開館して観客が入ってくる前に、中を見て回ることができるのです。こういった、一晩博物館で過ごすことができる、非常に珍しい、なかなかできない体験をさせているということなのです。古代の王様や神様がいるところで、一晩寝袋で寝るという感じは、すごく特別感のある体験だと思いますし、こういう体験をした子どもの中から、歴史学者や考古学者が出てくるかもしれません。こういう風な思い切った企画があってもいいのではないかと思い、少し紹介をさせていただきました。

こうした学校空間や学校建築が教育文化としても非常に重要だということで、いくつかの例を紹介させていただきました。コンセプトの違いはそれぞれありますが、共通していることとして、まず一つには機能性と居心地の良さの両方が実現できるような設えになっていたり、考えられたりしている点です。とくに戦後の学校建築では、こういう意識が広がっていますが、まだ標準的なものが多く、多様な子どもや多様な居心地の良さへの感覚に対応できる、そういうところまでは行っていないという気がしますので、そういう点でもここに紹介をした例は、大変参考になると思いました。それから、例えばコパルもこども本の森も、開放性と閉鎖性の両方が上手く組み合わされた空間づくりを意識されていると思いました。色々な子どもや、子どもと大人が一緒にいられるようなオープンなスペ

ースと、それから一人になって静かに本を読んだり考えたりできるような空間の、両方があるとやっぱり良いなと思います。それから、コパルのように、障がいのある子どもや子どもを抱えたお母さん、足が弱い高齢者などが、世代が違っても一緒に居られる場づくりをすることによって、色々な垣根を越えたインクルーシブな空間として、それが自然で当たり前の環境になっていくということ、そしてこれが教育文化として根付いていく仕掛けの一つだと考えると、大変良い空間づくりをされているなと思ったということです。こういう点が、今後の学校の空間づくりを考えていく上でも、大切な視点になっていくのかなと思っています。

六、近年の学校空間・学校校舎の諸相――元校舎にも焦点を当てて

近年は、こういう考え方の教育空間・学校建築づくりを、というコンセプトで、学校の建物や廃校校舎を使った試みがだんだんとされるようになってきていると思います。ごく一部ですが、最後に少しご紹介をしておきたいと思っています。ご存知の方ももちろんいらっしゃると思いますが、例えば京都市の洛央小学校の取り組みです。洛央小学校というのは一九九二(平成四)年に五つの小学校が統合されて開校した学校で、一九九四(平成六)年に新校舎が竣工しました。そこで、一階部分にあった図書コーナーをリノベーションして、図書コーナーの機能は残しながらも、児童や地域の方々が集まれる、コミュニティとしてのブックワールドという場をつくる取り組みがなされました。これは、当時京都大学の建築学の先生と、子どもの学びの場づくりにいろんな形で支援をされている、民間企業の内田洋行さんが協力してつくられたとうかがっています。

改装前の旧図書コーナーは、一階であるにもかかわらず、利用頻度も少なく、かなり閑散としたスペースでした。これをどういう風に変えていくか。ブックワールドにしていくというプロセスで、子ども達が自分達で「どういう風な空間になったらいいな」というアイデアを出し合って、それを模型にしてつくっていくという、そんなワークショップのようなプロセスを実施したそうです。そして、その意見を取り入れて、明るくて広々としたスペースに生まれ変わっていったということです。テーブルは、バラバラにしたり繋いだりすることで、色々な形につくり替えられる六角形のものを採用しています。それから、ステップを付けたロフトのコーナーもあり、読書も色々な姿勢でできます。ここに座ってもいいし、椅子に座ってもいいという風な形で、子どもも先生も地域の人達も利用できる、楽しい快適な空間としてリニューアルされたという形です。

次に、これも山形ですが、廃校になった校舎を利用してリノベーションした、旧高畠町立第四中学校の例です。廃校になった中学校の教室をリノベーションして、子どもと一緒に働けるサテライトオフィス、コワーキングスペースとして生まれ変わっており、ここでは国産木材をたっぷり使った温かみのあるスペースがつくられています。また、同中学校の体育館もリノベーションされ、多目的スペースに生まれ変わっており、ここも木材がふんだんに使われた、とても素敵な空間になっております。それから、新宿区の小学校の廃校に伴い、「東京おもちゃ美術館」という施設が、NPO法人を中心として創設された事例があり、こちらも木材が使われた空間として生まれ変わったというような事例ですので、ここにご紹介をいたしました。

七、これからの教育文化・学校文化を考える視点

ここまで思い出という視点と、学校建築・空間という視点から、学校文化を考えてみるということで、簡単な話題提供をさせていただきました。まとめということではないですが、学校文化を考えるということで、少し総括をしてみます。私たちは「文化」と言うと、どこか学ぶべきものというようなイメージがあることと思います。少し硬いイメージだったり、少し上の方にある文化というものを畏まって身に付けるという風なイメージだったりがあるかもしれません。ただ、「文化」を英語で言うときの〝culture〟という言葉は、「耕す」というのが元々の意味です。〝agri-culture〟というのは、まさに「耕す」。農業は耕すわけですが、つまり何かすでにそこにあるものを鑑賞したり、それを受容したりすることが、文化の営みではなく、そこから芽が出て育っていく土壌をつくること。ま

さに〝agriculture〟ではないですが〝culture〟というのはそういうものだということです。だから、考えたり体験したりすることで、新しい世界に入っていくきっかけをつくるということ、それが生活の中で身に付いていくこと、それが教育を支える文化になるのだという、生活に根付いたものを文化として考えるべきだなと改めて考えました。だから、〝culture〟と〝activity〟が結びつくような空間づくりというのが、文化の土壌だと考えています。

ただ、教育の文脈で「参加」や「体験」と言いますと、「何々を学ぶために」ということで、つくりすぎる傾向が少しあると思います。同じ体験をした子どもが同じように学ぶわけではありません。大正期から中産階級の家庭や学校では、伝達型の教育ではなく、子どもが自ら探究して学ぶということで、子ども中心主義の理念が出てきました。それは教育意図が子どもにとって見えにくくはなりましたが、見えにくくなっただけで、一定のゴールへ向かわせるという意味では、根本的には変わるものではないという批判が、その後で出てきていることもあると思います。ですから、まずは意図を隠して何となく探究しているかのように見せ誘導するのではなく、面白いと思ったり、好奇心を持ったりする機会があることそのものが文化であるということ、そしてそういう意味で遊び心もあり意外性を持った空間であるということが、まず必要なんだろうなという風に思っているわけです。

それからインクルーシブなもの、空間であるということは、誰でも収容できる標準的なスペースをつくることではなく、その場で生活している人が自分たちに合った空間に変えていくということです。ですから、文化というのは、「化ける」という言葉がついていますように、つくり変えるということも含んでいます。これが重要な側面で、学ぶべきことを設定して、つくりすぎないということがむしろ重要だと考えています。まとめにはならないかもしれませんが、こういう方向で考える方がいいのではないかな、と思っています。そういうことで、今日は学校の思い出と学校空間・建築という角度から、学校文化や教育文化を考える視点をご紹介させていただきました。

これから、最初に言っておりましたように、本博物館学芸員の林先生と、学校文化のこれからということで、郡中小学校の資料の活用や、空間づくりのこれからというようなことなども含めて、ディスカッションができればと思っています。どうもありがとうございました。

八．ディスカッション

（林潤平（京都市学校歴史博物館学芸員。以後「林」と略））

稲垣先生、どうもありがとうございました。先生にたびたびご紹介をいただいておりました、京都市学校歴史博物館学芸員の林です。本日は稲垣先生にお尋ねしたいことを、大きく分けて三点、用意してみました。そこでまずはこの三点について、私の方で簡単に概要を説明させていただき、その上で様々自由に、このテーマについて時間までお話ができればと考えております。

さて、すでにご覧いただいた方もいらっしゃるかもしれませんが、今回は郡中小学校展ということで、小学校創設一五〇年の展示を実施しておりますし、そもそも当館が開設された一つの背景として、いわゆる番組小学校の存在があることを考えると、当館の様々な事業や調査研究というものを考えていく際、「小学校の文化」を考えるのが、非常に重要な意味をもっているところがございます。そこで第一に先生にお尋ねしたいのが、教育文化・学校文化研究のなかで、とくに「小学校文化」を研究する意義というのは、どこにあるとお考えでしょうか、という点です。学校文化を知ることによって、私たちが当たり前に考えている学校の文化の背景、要因などを認識することができ、その意味では教育文化・学校文化を知ることが、教育・学校をめぐる様々な事象を批判的に思考する一つの機会を与えてくれると考えられます。そういった観点から、さきほど稲垣先生もご発表のなか紹介されておられました、「私の履歴書」の分析、そしてそのご研究が収められたこの本、『学校文化の史的探究』などでは、中等教育段階における学友会誌などを主要な分析材料にして、学校文化のなかで生徒たちが、自らの自己形成の手段として様々な学校文化を生み出していったこと、そしてそれは言ってみると、学校

文化をめぐる大きな物語とは少し違う、ある種の逸脱を含むような存在として、学校文化がつくりあげられた側面が描かれています。

かたや小学校というのは、ある種いまだ自己というものを今後形成する段階にある子どもたちが主体であるという意味で、その形成される文化という面が、私としてはあまり掘り下げられていないのではないかなという風に感じています。実は郡中小学校展の調査をしていくなかで、個々の小学校史及び小学校文化を見てみると、国が目指したような意図をそのまま児童が受容したわけではないのだろうなという事実が、多数視界に飛び込んでくるところがありました。例えば、京北の弓削小学校百周年誌、弓削小学校は山間部の学校なので、通学にかなりの負担、時間がかかるのですが、その記念誌には一限目が毎日算術だったので、苦手な児童はわざと遅刻するというようなことが、回想として出てきます。これは言ってみると、学校が求めた行動とは違うことを、当時の児童たちがしていた一つの証左と言えるのではないか。小学校ごとに、実はこうした例が数多く見出せる可能性があり、小学校文化の個性を掘り下げていくこともまた、実は非常に面白いものがあるのではないかと思います。

そして、このような史料があるのですが(図4)、京都市立醍醐小学校にはかつて「醍醐学生会」という組織があったようで、学生会が昭和八(一九三三)年に発行した雑誌の創刊号が、この写真の史料です。この学生会、いわゆる「青年会」とは少し違うということは、自分たちでも自負していたようなんですけど、そういった組織が存在し、詳細は紹介しきれませんが、小学校と様々な形で協力をして、醍醐校の学校文化の形成に影響してきたところがあると考えられます。このような興味深い史料があり、発見も続くなかで、これまであまり考えられたことがなさそうな「小学校文化研究」について、その意義の所在を一度お尋ねしてみたいと考えています。

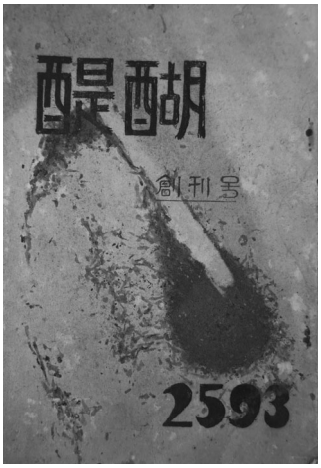


図4

この流れでお聞きしたい二点目、先生のご講演にもあり、かつ先ほどの弓削小学校の例にあらわれていたように、「記憶」というのがやはり資料として重要な問題になるという点です。この記憶を、やはり史料が十分にない学校もあるなかで、資料として扱わないといけないところがあるのですが、歴史研究にとって記憶は、扱うにはどうしたらいいかという点があるトピックスでもあります。スライドにも書きましたように、「誤りである可能性も高い」など、注意すべきところがあるのではないか、と考えます。

学校の記念誌を見ていると、非常に興味深い様々な記憶・証言が掲載されています。例えば、京都市立山階小学校の百周年記念誌には、当時の小学生の着崩しに関する記述、つまりかっこいい着物の着かたというのはこういうものだったというようなことが載っていて、とても面白いなと思います。しかし、これはあくまで記憶なので、どこまで信じたらいいのかという点を、歴史学は常に色々と考えてしまいます。こういったところをどう考えたらいいのかなというのが、お尋ねしたい二点目です。

そしてお聞きしたい最後の点、先生にもご講演のなかですでにお話をしていただいた部分もあるのですが、今後の学校空間・学校建築、なかでも学校歴史博物館のように、今後も増えていくであろう閉校した学校校舎を、公共空間として再構成する際に、その空間がどのように構築されていくべきなのか、当館の活用の可能性をさらに模索していく意味でも、ざっくばらんにお話ができればと思っている次第です。

そのために少し事例を紹介しておくと、京都市の閉校施設は、宿泊施設になることなどが多いのですが、福知山市などでは、地域の農業と密接に関係した元中六人部小学校の苺農園、610ベースという場所があったりします。実際に訪れたのですが、ここに苺を買いに来る地域の方らしき人々がいて、一種のコミュニティのようになっている印象を受けました。ほかにも、元佐賀小学校がお菓子の工場に生まれ変わった、足立音衛門里山ファクトリーなど、様々な使い方がなされており、「インクルーシブ」という視点も含み、多様な活用を考えていくようなお

話ができればなと考えています。

まず先生、質問の一つ目なのですが、小学校文化の研究に関しまして、何かお考えなどありますでしょうか。

（稲垣恭子氏（以下「稲垣」と略））

私は、あまり小学校は研究の対象としていませんので、女学校の研究のなかで、あるいは学校文化を考えることの延長上で述べるくらいのことにはなると思いますが、やはり一つは、小学校の時に経験したことは、非常に深く身体に刻まれているという点で、とても大きいと思います。形成される一番コアな部分。そういう意味ではまさに文化の、我々の身体化される文化の基礎部分。そうした意味で小学校のことをとても大事な部分として捉えていくという視点はなかったのではないかな、というのが一つあります。

それから、「インクルーシブ」と無理やり引っつけるわけではありませんが、標準化された学校経験は、それなりに抽象化された経験ではあると思います。一方で先ほどおっしゃったような各地域で、まさにつくられていく個別の小学校の文化、それは地域の文化というだけではなく、先ほど申し上げました個別の私たちという存在のレベルで、それぞれが上手くやっていく知恵というものを、改めてインクルーシブというようなことで考えなければなくなっていると思います。こういう歴史資料とかを見ていくと、まさに地域に根差したインクルーシブな文化を、子どもたち達自身がつくっているという側面があると思います。それを掘り出していくことがむしろ、今のインクルーシブ教育に示唆を与えるという、そういう側面があると考えると、研究としても大変面白いのではないかと思われます。

（林）

はっといたしました。ありがとうございます。今日の先生のご講演のなかでポジティブなノスタルジアという議論が出てきましたが、小学校文化をこうした形で研究しておりますと、どうしてもその自己形成とか、「生き直す」という側面は、ちょっと発達段階的に小学校の思い出のなかでは難しいのかな、と考えているところがありました。ただ、先生にご指摘をいただいた面、この点自体は私自身全然考えたことがなく、もう一度小学校の文化を見直してみたいと感じました。ちなみに、現在開催中の郡中小学校展では、前期・中期・後期で各校の歴史を一校ごとに紹介して、紹介できる分はそれぞれの学校の史料を展示しております。そして、そのなかで展示した記念誌の中からは、小学校の文化の一端のようなものを感じ取ることができると思いますので、ぜひ展示のなかでそういったところもお考えいただければうれしく思います。

そして先生、急ぎ二つ目の質問ですが、記憶の問題、そもそも記憶を実証性の観点から考え過ぎてしまう私もいけないのかもしれませんが、歴史研究の立場からすると記憶を研究の材料にするのは、どうしても危険性を感じてしまうところがあります。ただ、その一方で備わる記憶を考察対象とする意義、またその時にもし実証性を考えるとするならば、何か注意すべきことはあるのかという点について、先生のお考えを教えていただけたらと思います。

（稲垣）

実証性と言うか、事実と記憶というのはやはり食い違いが出てくるというのは当然あり得ることで、まさに「何年のときにこういうことがありました」ということは、間違っている場合が多々あるわけです。こういうものはやはりそう言ったからといってそのままメモしたものを取り上げると、それはもう全く間違ってしまうわけですから、その歴史的な事実を示す資料と、制度史等も含めて、照合・整合させる。そういう意味での事実性の担保というのは必要だと思います。ただ、記憶で語られていることは、すべて事実ではないのですが、だからこそ、記憶として語られることが、リアリティーなわけです。つまり私たちは事実のなかを生きているだけではなく、生きるということは記憶も含めて、他者と共有するリアルの世界というもののなかで生きているわけですから、記憶された世界というのは、その当時、他の人と共有された自分たち、まさに集合的な記憶です。それが我々の文化であり、文化の経験であり、現在の私たちをつくっているものですから、そ

ういう観点で、記憶、学校の記憶が、教育にとって、われわれにとって、重要だと思います。いわば括弧つきでその意味を問う、そういうところで記憶を取り扱う枠組みをどこに置くか、事実としてストレートに使うのではなく、記憶というフィルターを通すことの意味を一旦括弧に入れるというところが、難しいところです。少し話が抽象的なのですが。

（林）

私個人としては、過去の歴史を掘り起こしていく時に、とくに一五〇周年記念誌の編纂を計画されている学校が多い現状があるなかで、十分な歴史に関する史資料がない学校も当然あって、その時に「どうやって過去の歴史を振り返るか」というと、やはり当時を生活した方の記憶が、取っ掛かりとしては非常に重要な意味をもつことが多いことを実感しています。一五〇周年記念誌に少し協力させていただくときに、このことを私自身がどう考えたらいいのかなという点につきましては、常に自問自答しているところがありました。さらに言うと、実は私は記憶の積極的意味について、さらに市民の方と共有していけたらなぁと、個人的に考えておりましたので、この機会に先生のお考えを聞けて、大変勉強になりました。ありがとうございました。

そして、最後の点、各地域にある閉校した学校施設は、ある種文化資源になり得る力を備えていると思うんです。学校歴史博物館も含め、当館も所属する京都歴史文化施設クラスター実行委員会では、「まちにあるそうした文化資源をどう活用していくのか」という問題を、実際に活用を試みたり、検討したりしています。先生のお話のなかでも挙げていただきました、閉校した学校校舎を公共空間として再活用する事例は、今後増えてくると思いますが、先ほどのお話に加え、何か先生のなかで、「こんな風に活用されたらいいんじゃないかな」とか、そういった点につきまして、何かありましたらぜひお尋ねしたいなと思っております。

（稲垣）

はい。ありがとうございます。私もこういう学校校舎を使ったり、公共空間をつくっていったりすることにとても関心があり、これから非常に大事だと思っています。一つは、一つ一つの校舎を単体で考えるということではなく、例えば閉校・廃校になった校舎があり、それをどうしていくかというときに、「これはこういう使い勝手があるから喫茶店のスペースにしよう」、「これは図書館にしましょう」等、別々のものと考えるのではなく、これらをいくつかつないで、ストリートとして考えていくというような視点が、私は重要だと思います。近い所であれば、今日は図書スペースとしてここを使い、少し歩いたところに、休み空間がある、というように、それらをつないでいくストリートとして楽しめる空間として、トータルに考えていく方が良いのではないかという風に思います。「駅から歩いていけるところにはどういうものを？」、「駅から遠くても行けるものは何だろう？」という、トータルな空間づくりとして、やはりしっかりと考えていくことが、一つ一つを生かしていくと思いますし、そこに行く人も増え、行くだけで楽しくなります。「そこに行ってあまり楽しくなくても、少し歩いたら別のものがある」、こういう形でつないでいくのが面白いと思います。校舎を図書館の形で利用するのであれば、少しストリートを歩いて一〇メートルほどするとブックポストがあり、そこに本をお返しすることもでき、少し歩いたら本が読めるカフェがある、という風な使い方が楽しいと思います。

そうした考え方の前提として、私は文化というのはお金が掛かるものではなく、お金を生み出すものだという風にこれからは考えた方がいいと思っています。だから、そこに行ったら楽しい。そこに行ったら色々な活用ができる。そのことがただ単に消費するということではなく、そのことが活力になって人が集まり、そしてそこでお金も使う。さらにそれが色々な形で展開する。文化産業とは批判的に言われることもありますが、むしろ私はそういう活力をつくっていくベースとして、つまり生活ベースであり、いただくもの、享受するだけのものではなく、つくっていくものであり、そして産業にもなり得るものだという風な、そういう形で作っていく方が楽しいし、新しい文化の土壌にもなるのではないか。夢を語れば、そういうことがあります。

（林）

今の先生のお話を聞いて、例えばストリートとして学校校舎のことを考えると、ここに元開智小学校があって、また別の場所には元何々校がある。それらの校舎をストリートとしてつながるものとして考えると、やはり「ストリートとなるための物語」が必要になり、そこにまた歴史というものが社会貢献していける。そういったことが、さらにそしてそれが人々をつなぐ文化の力になっていけば、良いのではないか。そんな一つの大きい方向性を考えることができたのかな、ということを考えた次第です。

先生、すみません。もう時間もだいぶオーバーしておりますので、この講演会はこちらでお開きにさせていただいと思います。改めてみなさん、先生に盛大な拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

【主な参考文献】

・『弓削小学校百年誌』弓削小学校創立一〇〇周年記念事業実行委員会、一九七三年。
・山階校創立百周年記念事業委員会編『山階校創立百周年記念誌　山階』京都市立山階小学校、一九七二年。
・稲垣恭子『女学校と女学生』中公新書、二〇〇七年。
・稲垣恭子『教育文化の社会学』放送大学教育振興会、二〇一七年。
・牧野智和『創造性をデザインする』勁草書房、二〇二二年。

【展覧会報告】

学制一五〇年に学校を記念すること

―企画展「郡中小学校―京都市におけるもう一つの小学校一五〇年―」調査・展示報告―

林　潤平

はじめに

当館では、令和五(二〇二三)年一月二六日(木)から四月二三日(日)の会期で、企画展「郡中小学校―京都市におけるもう一つの小学校一五〇年―」を開催した。明治はじめ、京都では番組小学校が創設された地域(及び現在の京都市伏見区の一部)が「市中」と呼ばれ、府内それ以外の地域を「郡中」と呼んでいた。ほかならぬこの「郡中」の地域に、明治五(一八七二)年初頭から創設され始めていった「小学校」が、「郡中小学校」であった。実はこの郡中小学校、主に明治五(一八七二)年八月公布の学制に先立って創設された観点から、教育史研究のなかでもその存在が紹介され、注目された経緯をもつ、全国でも珍しい学校である。例えば『日本近代教育百年史』には、次の全文から成る「郡中小学校の設立」[一]の一節が設けられていた。

京都市中の番組小学校の創設とともに、市中にはおくれたが郡部においても小学校の設立が進められていった。府は七一(明治四)年十二月「郡中小学建営規模」を各郡に達した。「郡中小学校之儀ハ出張所近傍便利之地へ建営可致」、また各村申談じて分派小学校をおくものとし、分派小学校が一郡中に幾所建営しても差障りないものとした。／かくして郡部においても小学校の開設は急速に進み、学制による小学校への切替えが実施される七四(明治七)年十二月までには一〇八校に及んだといわれる[二]。

しかし、こうした事実があるにも関わらず、郡中小学校は、同じく学制より早く設立された「番組小学校」と比較したときに、知名度の面で後者に圧倒的に負けてしまうのが、偽りのない現状であった。郡中小学校の流れを汲む学校が、学制と同じく令和四(二〇二二)年に一五〇周年を迎え始めるという、またとないこの機会に、郡中小学校の歴史を詳しく紹介し、より多くの人たちに、これらの学校の存在と足跡を知ってもらおうと企図したのが、企画展「郡中小学校」であった。そして、この企画展の内容について報告しつつ、この報告に関して、調査の結果明らかとなった新事実との関係などから、若干の考察を試みた一つの結果が、本論考である。

一、「郡中小学校」展の内容とその構成の背景

筆者が主担当となったこの「郡中小学校」展は、「第1章　郡中小学校の誕生」、「第2章　郡中小学校の展開」、「第3章　郡中小学校の本質」という、三つのチャプターから構成される企画展である。具体的な展示品の名称など、展示に関する詳細な情報については、本誌『年報』の箇所を参照いただくとして、この箇所では展示全体の流れとその構成の意図について、若干説明を加えておきたい。

一　名倉英三郎「第一章第二節　府藩県における学校改革」(国立教育研究所編『日本近代教育百年史　第三巻　学校教育　1』(同所、一九七四年)所収)、四〇五頁。

二　名倉、前論文、四〇五頁。

第一章では、郡中小学校が誕生するまでのプロセスと、その誕生した学校がどのようなものであったのかという点、さらには創設や運営の具体的様相やその特徴など、郡中小学校創設期における歴史について、紹介を試みた。本章のストーリーについては、昨年度発行の当館紀要第九号に掲載した拙稿「京都郡中小学校の創設過程――行政文書の検討を中心として」に依拠する点が多いので、参照されたい。ここに論じたように、第一章で比較的詳細に郡中小学校の創設過程を紹介したのは、郡中小学校の存在や特徴が、あまり一般に知られていないからにほかならない。第一章で紹介を試みたのは、郡中小学校に関する基本的事項や史実、つまり郡中小学校の特徴を示す事実であった。

図１　郡中小学校展　第１章の展示の様子

続く第二章では、創設した郡中小学校が、その後どのような歴史的展開をみせたのか、紹介を試みた。その「郡」中小学校という名が示す通り、郡中小学校として創設した学校の足跡は、かつて存在した「郡」という地方行政の単位との関係を無視しては、捉えることが不可能となる。また、京都市の場合、度重なる市域拡大の施策が、郡中小学校として開校した各校の歴史に、大きな影響を及ぼさざるを得ない動向も存在した。ただこの章の展示内容のなかで、これらの事柄以上に注視せざるを得なかったのは、郡中小学校として開校した各校に、個性豊かな特徴が歴史的に備わっていった展開が確認された点と、その展開の要因についてであった。この点については、かつて「郡中」と呼ばれた範囲が含み込む多様性に注意することで、それが結果として各校の個性を創出していく流れと論理を明示する、という点を意識した。そして、これと合わせてここで強調しておきたいのは、こうした展開の内実は、ほかならぬ展示のための史料調査及び関連学校調査を経るなかで、少しずつ明らかとなっていった点である。

図２　郡中小学校展　第２章の展示の様子

第三章の内容の構成は、まさにこの観点、つまり郡中小学校一五〇年の歴史の本質は、個性の豊かさと多様性の部分にあるという考えから決定したものである。この章では、郡中小学校として開校した学校たちの戦後史を紹介するのに加えて、各校の個性的な歴史を伝える紹介パネル全六三校分を、三回の会期に分けて、つまりそれぞれ前期（令和五（二〇二三）年一月二六日（木）から同年二月二一日（火）まで）に二五校分、中期（同年二月二三日（木）から三月二一日（火・祝）まで）に一九校分、後期（三月二三日（木）から四月二三日（日）まで）にも一九校分を、各校の史料とともに紹介する展示を行った（図3・4・5）。

図３　郡中小学校展　第３章前期展示の様子

図４
郡中小学校展
第３章中期展示の様子

図５
郡中小学校展
第３章後期展示の様子

このような展示を構成することができたことによって、番組小学校と同じように、京都市の初等教育を長年支えてきたにもかかわらず、これまでその軌跡が判然としていなかった郡中小学校の歴史の基本的な事柄について、「各校」という詳細なレベルまでの知識を、社会に広く還元できたのではないかと考えている。とくに郡中小学校として開校した各校の個性豊かな史実は、人々の様々な関心に呼応しうる、奥深い潜在性を備えていると考えられる。個性豊かな史実の蓄積のなかには、その豊かさの分だけ、様々な課題に取組んできた多様な事実が含まれている。そしてこの多様な事実の数々は、同じくその豊かさの分だけ、人々がもつ多様な教育課題及びその課題解決のための関心に対して、より豊富な応答可能性をもつ、つまり回答のための多様なストックとなり得ると考えられるからである。こうした潜在性の存在は、できるだけ多くの学校を対象に、可能な限りその対象校の歴史の発掘・把握に努める調査を抜きにしては、決して明らかにならないだろう。「郡中小学校」展開催に際しては、幸運にも様々な方々の御協力を賜り、ほかならぬこの調査の機会を得ることができた。こうした協力がなければ、先の新事実の存在はもとより、郡中小学校の歴史に関する基本的事項の整理、及び発表に関しても、多大な困難が伴ったことだろう。お力添えをいただいたすべての人々に、この場を借りて感謝申し上げたい。

二　郡中小学校創立百周年の頃――辻ミチ子の証言

さて、郡中小学校に関する一連の調査のなかで明らかとなったのは、実は「一」で指摘した事実だけにとどまらなかった。続けて注目したい「別の事実」とは、言うならば学校と地域を取り巻く社会的状況の変化、及びその変化に伴う学校と地域の関係性の変容、である。

その変化を浮き彫りにするために、郡中小学校として開校した学校たちが創立百周年を迎えたおよそ五〇年前の状況について、とある証言を紹介しておきたい。この証言を残したのは、番組小学校研究の文脈で多大な功績を残した、辻ミチ子である[三]。今ではあまり参照されることのない貴重な文献であるので、ここでは

三　番組小学校の研究の歴史における辻ミチ子の研究の位置づけについては、林潤平「番組小学校研究の現状と辻ミチ子氏の研究が残したもの―番組小学校創立一五〇周年特別展を終えて―」『京都市学校歴史博物館研究紀要』第八号、二〇二一年六月、を参照のこと。

その辻の議論を少し詳しく紹介してみよう。

辻は、京都市に隣接する宇治市の記念式典の状況について、次のように述べていた。

隣接の宇治市の小学校では、百周年記念実行委員会により二月上旬に記念式典が行われ、府警音楽隊による祝賀音楽会も催され、さらに百周年記念協力会の記念式典も開かれた。そして記念行事募金は五百万円の目標額をはるかに突破し、最終総額は八百万円以上になると予想している。この募金で記念像が建設され、記念誌の発行、記念文庫の開設教育施設の充実などが計画されているという盛大さなのである[四]。

郡中小学校として開校した現在の京都市内に存在する学校のなかに、当時は「宇治郡」に属していたものがあった点を踏まえると、この証言は京都市にも関係するものと捉えられてくる。辻は次のようにも述べていた。

明治五年中に設立をみた学校は、伏見、宇治郡、紀伊郡、葛野郡に多く、愛宕郡は明治六年とそれ以後に建設されている。その明治五～八年の小学校は、ほとんどが旧藩邸や寺社の一画、もしくは神社境内に寺院の建物を移転して設けられたものであった。その例をあげると次のようである（）内は現在の小学校名

伏見第二校(板橋)尾張藩邸　伏見第三校(南浜)土佐藩邸
堀内校(桃山)御香宮境内　東九条校(陶化)九条家陶化殿
八条校(大内)東寺境内　西院校(西院)春日神社境内
太秦校(太秦)広隆寺塔頭十輪院　上嵯峨校(嵯峨)招慶院
下嵯峨校(嵯峨)川端柳鶯寺　平野校(衣笠)平野神社境内
東野校(山階)西本願寺対面所　勧修校(勧修)勧修寺境内
醍醐校(醍醐)三宝院内　吉田校(錦林)吉田家旧殿
下鴨校(下鴨)下鴨神社公文所　松ヶ崎校(松ヶ崎)妙泉寺の一坊
白川校(北白川)毘沙門堂　岩倉校(明徳)実相院門跡庫裡
静原校(静原)普済寺の一室　別所校(別所)福田寺の一部[五]

そして、これら京都市全体にまたがる郡中小学校の創立百周年について、辻はこの文章の冒頭で、次のように述べていたのであった。

明治五年の七月、明治政府は学制を創定し学事の奨励を公布した。それに従って京都府下では明治五年から八年にかけて、つぎつぎに小学校を建営したのである。その小学校の大半が昨年から今年にかけて、創立百周年を迎えることになった。記念行事を昨年すませた学校も、現在記念行事を計画中の学校もあるが、校区ではなみなみならぬ熱意を傾けてそれに取り組んでいるのである[六]。

四　辻ミチ子「再び小学校創立百周年を迎えて」『京都市史編さん通信』NO.45、一九七三年二月二〇日、ページ記載なし。なお、辻は郡中小学校創設に先立つ番組小学校創立百周年に際しても、「小学校創立百周年と市史編さん所」という文章を『京都市史編さん通信』NO.6に掲載し、当時の様子を伝えている。興味深いのは、辻がこの論考において、この段階における番組小学校関連史料の保存状況、及び収集の方法に関して、市史編さん所に希望を述べていることである。辻は明治一〇年代以降の史料や、「教育内容と町の人々のかかわりあいをあきらかにする資料」、近世を含んだ教科書の収集の三点を求めている（辻ミチ子「小学校創立百周年と市史編さん所」『京都市史編さん通信』NO.6、一九六九年一一月、ページ記載なし）。このうち第一と第三の点については、当館の活動のなかでも、少しずつ充実してきた印象をもつことができるが、第二の点については、現在でもあまり収集と保存、さらには調査への活用が実現していないのが、現状ではないかと感じている。

五　辻ミチ子、前掲論考、「再び小学校創立百周年を迎えて」、ページ記載なし。

六　辻、前論考、ページ記載なし。

「校区ではなみなみならぬ熱意を傾けてそれに取り組んでいる」。辻が各校の執り行う郡中小学校創立百周年事業に対して抱いたのは、こうした印象だった。

三　学制一五〇年に学校を記念すること

これに対し、創立一五〇周年の際はどうであろうか。この一五〇周年に際し、幸運にも筆者は、数多くの学校関係者や、記念事業に関わる各学区の方々と、調査の過程でお話をする機会を得たが、この一連の経験のなかで痛感したのは、学区、つまり地域によって、その「熱意」に差が存在していたこと、そしてその差は、ここ数年でより顕著となった、少子高齢化に伴う地域社会そのものの変動によって生じているのではないか、という点である。

確かに創立百周年に際しても、地域ごとの熱意の差は存在したと想定されるし、むしろ差がある方が自然であると考えなければならないだろう。しかし、地域自治活動の中心を担う人たちの高齢化、及び長期間特定の学区内に住み続ける人の減少、さらに言えば人口が増加する場所でもニューカマーの転入・転出が恒常化するという、関係者の方々との対話のなかで浮上した一連の状況は、まさに少子高齢化が進行するのに伴って、これらもまた発生、顕在化、そして何より進行する事態であるとも、考えなければならない。その意味で、まさにこの相違を生み出す要因である少子高齢化が進行する今日に、差がより顕著なものとなっていると体感されるのは、ある種必然の帰結と言える。そして、学校・保護者・地域の協力のなかで行われる一五〇周年の記念事業は、ある意味ではこうした変貌する地域に学校が出会うこと、つまり学制一五〇年に学校を記念することは、「学校が協同のなかでこの状況に触れ、実感することである」と、捉えることができるのではないだろうか。

ここで再度確認しておきたいのは、こうした学校と地域の関係性が、先ほど見た百周年の際のそれとは異なるということ、その上でなおかつ強調しておきたいのが、この関係性は学制の公布時における小学校と地域の関係とも、全く異なるものであるということである。学制一五〇年を記念して編集された『学制百五十年史』には、学制期の小学校の様子について、次のように紹介されている。

小学校は基本的に地方民衆の民費や寄附金などにより設立維持された。児童数が少ない上に就学率が三〇％程度の当時にあっては、小学校の規模は一校あたり教員一～二人、児童四〇～五〇人程度、校舎の四〇％は寺院、三〇％は民家を転用したものであり、概して寺子屋と大差ない形態であったが、一部の地域では文部省や府県当局の奨励策にこたえて洋風校舎を新築し、教育への熱意を示した場合もあった。／小学校の全国一斉実施は、民衆に大きな経済的負担を課した。また、欧米風の新しい教育内容は当時の民衆の生活に即応したものではなかった。これらへの不満が原因で、徴兵や地租改正など新政府の他の政策への批判と結び付いて、農民一揆の際にしばしば学校が焼き打ちされるという事態が見るようにさえなった[七]。

このように学制によって創設された小学校、つまり現在まで一五〇年の歴史を紡いできた新しい近代施設小「学校」とは、「地方民衆」が創設・維持に深くかかわる、言い換えれば「地域」と密接不可分な関係性のなかでつくられていった機関にほかならなかった。そして、学制一五〇年の事業のなかで見えてきたのは、この「学校」を支えてきた「地域」の存在、及びその「地域」との関係性が、今まさに変容しつつあるという事態であった。当然、「地域」と密接な関係にあった「学校」の存在や、その内容・社会的意味もまた、この関係性の変化に伴って、変容を被らざるを得なくなる。つまり「学校」そのものも、地域との関係を再編した、新しい意味での〈学校〉という存在へと、変化していくことになる、さらに言えば、「地域」の変貌に伴って、これまでにも少しずつ変化してきていたと考えられるだろう。このよ

七　文部科学省『学制百五十年史』同省、二〇二二年、二八頁。

うに学制一五〇年に学校を記念することとは、学校が変貌する「地域」に出会うことでもあるとともに、まさにそれに伴い変容する〈学校〉の現況と将来に、学校自身や関係者が改めて直面し、その現況を体感・認識する機会であるとも言えるだろう。

四．おわりに――学制一五〇年に学校を記念する意義

さて、ここまでの議論を踏まえた上で、今一度「地域」の方に目を向けてみると、「三」でみたように、少子高齢化によって、かつて存在した「地域」は大きな変貌をとげている現状がある。つまり限界集落の存在が示唆するように、物理的な衰退へ向かうこともあれば、土着の人々が長年担ってきた社会的・精神的つながりが、内部構成員の変動によって変容、ときには消滅に至るなど、いわば「地域」もまた、新しい意味での〈地域〉へと変化しているのである。

この〈地域〉をめぐる状況のなかで、もしかつてのような形でのつながりを存続、もしくは創出していこうとする立場からすると、学制一五〇年、つまり多くの小学校が迎える創立一五〇周年は、その際に歴史を調査し、振り返りの機会を設けることによって、ともすると喪失しかねない地域性のエッセンス、地域のアイデンティティを改めて見つけ出し、関係者と広く共有していくことが可能となる、数少ない貴重な機会と考えられるかもしれない。とくに学校という空間では、土着の人も、はたまた新しく近隣にやってきたニューカマーも、子どもを介して必然的に交り合うことになる。このように学校は、様々な人々を包摂し、そのなかに対話・交流の経路が自ずと生成する、社会でも珍しい空間であり、その交わりは新たな〈地域〉性創出に帰結する可能性をもつ、つまり新しい〈地域〉アイデンティティ構築の舞台になり得るポテンシャルを、学校は備えると捉えられるのである。こうした学校の備える社会的役割に関する潜在性、加えてその潜在性を発揮、さらには追究し得る記念事業という出来事の意義を認識しておくのは、変貌する〈地域〉とそれに対する対応を多角的に検討する際に、重要な意味をもつかもしれない。

また、こうした〈地域〉の状況は、記念事業の代表的実践の一つ、「記念誌編纂」の取組に対しても、この現状が帰結するある種の限界のみならず、そこから実は同時に生まれてくる、新しい可能性をもたらす点に注目しておきたい。ここで言う「ある種の限界」とは、言うまでもなく「三」で示唆した、記念事業、さらには記念誌編纂に関する、地域の協力のウェイトの減少、及びその減少に付随して生ずる様々な精神的・物理的制約である。

また、このウェイトの減少は、例えば地域が保管していた資料に簡単にアクセスできなくなることによって、記念誌のなかで地域に関する記述が十分にできなくなるなど、記念誌の内容・コンテンツについても、数多くの変化をもたらすことだろう。ここで注意したいのが、「この空白となったスペースに、何を記述するのか」という問題である。そこでその第一候補となってくるのは、子どもの作文など、学校における現在の活動に関する内容や記述、さらには学校の過去の活動、つまり「学校そのものの歴史」となるのではないだろうか。そして、今「そのもの」という点を強調したのは、先ほど指摘したように、地域に関する十分な記述ができない状況が、社会的に到来しつつあるからであり、そのスペースには地域との関係からではない、「学校そのもの」の歴史に関する記述が充当されると考えられるからである。「学校そのものの歴史」というときの具体的な内容としては、学校を構成する様々な要素（校舎など）や、関係した人物（教員など）たちのあゆみ、さらに地域のことを取り上げるにしても、地域の名所などというよりも、学校の視点からみた地域の歴史などが、主要なコンテンツとなることだろう。

加えて、ここで指摘しておきたいのが、少なくとも京都市の場合、これまでに作成されてきた記念誌においては、たった今言及した地域の名所などに関する記述に、非常に大きなウェイトが割かれてきたことである。言い換えれば、この学制一五〇年をめぐる状況には、これまで分量的に許されなかったこともあっただろう、教員や学校の構成要素といったトピックに対して、より多くのスポットライトを当て、かつそうした視点から見えてくる地域の足跡まで描き出すことができるという、一つの新たな可能性が、実は同居しているとも捉えられるのではないだろうか。学制一五〇年に学校を記念することは、こうした歴史像の再編成につな

がる、一つの契機にもなり得るのである。

佐藤秀夫は、学制一〇〇年に際して取組まれた「諸地域の自治体・団体・学校などで地域教育史の研究や編集が進められつつあり、すでに数多くの地域教育史や学校沿革史が公刊され始めている」[八]動き、より具体的には、「都道府県規模の地域を対象とし、かつその編さんに都道府県教育委員会が何等かのかたちで関与している、その意味での「公」的な教育史書」[九]編纂の活動に対して、次の問題点があると指摘していた。

第二は、教育における地域性をどのようにとらえるのかという問題である。お国自慢的な〈郷土史〉からの脱却が目ざされねばならないとすれば、その裏返しとしての後進県コンプレックスも克服されねばならないだろう。教育における先進性・後進性とは何かが根源的に問い直される必要がある。就学率の高さがそのままでは教育の先進性を示す指標となりえないことはいうまでもない。中央政府の打ち出す方策への近接度をもって先進・後進の唯一の判断基準にしてしまっては、地域における自主性・主体性への視点が全く欠落してしまうことになる。地域における教育の自主性がどうであったかを知るうえで、重要なのは民衆の教育への対応の実状であり、教員の主体的な動向である。こんにちの府県が、戦前とは異なって自治体であるからには、〈官〉的制約を脱した〈公〉的観点をもって、民衆の学校づくりや教育運動の歴史を積極的に掘り起こすことが期待される[一〇]。

学校のそのものに焦点を当てた歴史の追究の試みは、まさにここでいう「教員の主体的な動向」を探る実践である点で、この課題の克服への寄与につながる方途となり得るだろう[一一]。

ただ、これまで学制一五〇年に学校を記念する意義について、様々に考察をしてきたものの、一度学校の内部に目を向けてみれば、GIGAスクールなど、地域との関係以外でも大きな変革が巻き起こっている現況、つまりそれらへの対応に学校が忙殺されざるを得ない状況があることは、火を見るよりも明らかであり、学校自身が独力で学校そのものの歴史を調査し、編み直していくことは、困難と言わざるを得ないのが偽りのない現状と言えるだろう。そしてこの点が、教育史研究者や郷土史家、さらには当館を含めた主として歴史系の博物館が、学校との連携を模索できる、一つの結節点と成りうることに注目をしなければならないだろう。なかでも博物館は、周知のように令和五(二〇二三)年四月に施行された改正博物館法によって、次の内容が新たに事業として付け加わることとなった。

博物館は、第一項各号に掲げる事業の成果を活用するとともに、地方公共団体、学校、社会教育施設その他の関係機関及び民間団体と相互に連携を図りながら協力し、当該博物館が所在する地域における教育、学術及び文化の振興、文化観光(有形又は無形の文化的所産その他の文化に関する資源(以下この項において「文化資源」という。)の観覧、文化資源に関する体験活動その他の活動を通じて文化についての理解を深めることを目的とする観光をいう。)その他の活動の推進を図り、もって地域の活力の向上に寄与するよう努めるもの

会において子どもたちの主体的な学びが失われていることに対する強い危機感がある。そして、その回復のためには、教師たちが自らの実践を改革することが不可欠だとする基本姿勢が示されたのである」(橋本美保「新教育の受容史とは」(橋本美保編著『大正新教育の受容史』(東信堂、二〇一八年)所収)、三頁。)などという形で、「教員の主体性」に対して、指導要領などの制度面も含む様々な観点から、注目が集まっている状況もある。

八　佐藤秀夫「学制百年記念の府県教育史の刊行状況」『教育学研究』第四〇巻第一号、一九七三年三月、五五頁。

九　佐藤、前論文、五五頁。

一〇　佐藤、前論文、五六頁。

一一　ちなみに現状においては、現行の学習指導要領の「アクティブ・ラーニング」、及び「主体的・対話的で深い学び」との関係で、「こうした改訂の背景には、現代社

とする[一二]。

自戒を込めて述べれば、地域の歴史博物館などが自覚的にこうした記念事業のサポートとなる学校資料の発掘と保管、さらには歴史編纂に関する協力を実践できれば、学制一五〇年に学校を記念する意義は、たった今述べた博物館法の改正のなかにも登場した、地域をめぐる諸課題への対応も含めて、十二分に追究していくことができるのではないだろうか[一三]。こうした意図も視野に入れて開催した郡中小学校展が、〈学校〉や〈地域〉の取組や将来のための実践に、何がしかの寄与ができていたとすれば幸いである。

一二　e-GOV法令検索「博物館法」https://elaws.e-gov.go.jp/documents?law-id=326AC1000000285、二〇二三年四月二三日最終閲覧。

一三　ただ、博物館の事業と観光の関係をめぐっては、例えば安易な活用が文化財の毀損を招くなど、注意を向けなければならない様々な議論がこれまでに展開されてきた。これらの議論も踏まえた形で、博物館は学校や地域との連携を模索していかなければならないだろう。これらの議論の一端については、岩城卓二・高木博志編『博物館と文化財の危機』人文書院、二〇二〇年、などを参照のこと。また、学校資料と観光の関係については、拙稿「地域再開発と未指定文化財の保全・活用――学校資料をめぐる議論と活動の足跡から考える――」『日本史研究』第七一七号、二〇二二年五月、を参照されたい。

【資料紹介】

家庭と学校との聯絡機関誌『糺の泉』

――「主体性」及び学校をめぐる「つながり」とを可視化する学校発行雑誌というメディア――

林　潤平

はじめに

令和五(二〇二三)年一月より開催した企画展「郡中小学校―京都市におけるもう一つの小学校一五〇年―」の調査の一環として、当館所蔵資料の研究、整理を進めている過程において、かつて下鴨校(現京都市立下鴨小学校)が発行していた冊子、『糺の泉』を発見する機会を得た。後に本論考も考察するように、学校が発行するメディアには様々な種類のものがあるが、この『糺の泉』が採用する形式、及び冊子としての特徴は、あまり見ないと言えるもの、少なくとも当館がカバーする主として京都市の小学校に残されてきた資料のなかでは、大変珍しい形のものであると考えられる。そこで本論考では、この資料に関する基本情報や内容、特徴の紹介、さらには分析を試みたい。そしてそれを踏まえた上で本論考では、この『糺の泉』もその一種に分類できる、学校に関する各種メディア、とくに逐次刊行物の形態を採る資料の価値と可能性について、若干考察を深めてみたい。

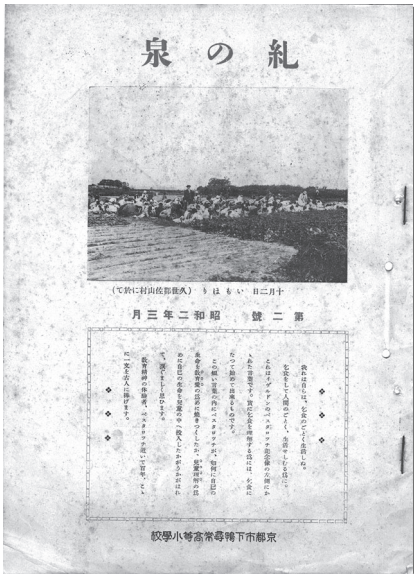


図1.　『糺の泉』第２号表紙

一・『糺の泉』に関する基本情報――創刊の経緯・編集方法・判型等形式について

改めて、『糺の泉』とは、下鴨校が作成・発行していた冊子である。当館に第二号から一二号、一七号から二〇号、二二号(二種類、そのうち一号は号数の記載ミスか)、二四号から三四号の、計二八冊が現存している。

創刊号が発見・所蔵されていない関係で、冊子刊行の経緯は不明である。また、編集に関しては、奥付に二号から一〇号までは澤井堯夫校長の名が、一一号と一二号には小川忠淳校長の名が、残りの全号には日向勝治校長の名が、それぞれ記載されている。さらに編集後記も第一七号からの一部の号には収録されている。しかし、この編集後記の箇所、及びその他の記事において、具体的な編集方法が紹介されることがなかったため、編集に関する詳細も明らかでない。強いて言えば、第一九号の編集後記のみ、「宮島生記」[一]と記名があり、この人物は当時の第三学年い組担任の宮島浩訓導のことと推測されるため[二]、校長でない教員が実際の編集を担当していたと推測される。

一　宮島生「編輯後記」『たゞすの泉』第一九号、一九三六年六月、一〇頁。

二　「昭和十一年度学級編制表」『たゞすの泉』第一九号、一九三六年六月、三頁。

発行所は一貫して下鴨校(第二号(下鴨尋常高等小学校発行)、第三四号(京都市下鴨国民学校)を除き、(京都市)下鴨尋常小学校発行)で、判型はB5サイズに近い。ページ数は全七ページから全二二ページと、号によって開きがある。

二.『糺の泉』の資料的特徴――記事内容の紹介と考察から

さて、こうした『糺の泉』の最大の特徴と言えるのが、「雑誌の形態を採っている点」である。第一七号の巻頭言にある、「家庭と学校との聯絡機関誌であった糺の泉が、二ケ年半の長きにわたつて中断されてゐたことは残念であつた」[三]という言葉は、このことを明瞭に象徴していると言えよう(図2)。

雑誌であるがゆえに、『糺の泉』には多彩なジャンルの記事が収録されている。ここで『糺の泉』の内容の全体的なイメージを掴むために、その多彩なジャンルを一つ一つ列挙してみると、まず教育論の関係として、総論及び教育方針を提示・考察した記事、学校・学級運営の具体的な考え・方法に関する記事、行政による教育施策を解説した記事、下鴨校児童に関する検査・調査報告などの記事が、さらには学校からのお知らせとして、教員の異動・消息に関する情報、学校での出来事やイベントの詳説及びそのイベントのスケジュールを案内・報告する記事、年度ごとの学級組織の案内、卒業生の進路、その他家庭への様々なお願いを伝える記事などが収録されている。

たゞすの泉　第十七號
夏休み號
昭和十年七月
巻頭言
家庭と學校との聯絡機関誌であつた糺の泉が、二ケ年半の長きにわたつて中断されてゐたことは残念であつた。
教育の事は、家庭と學校とに聯絡のある一貫の態度があり、それが子供へのよき環境となつて効果を挙げ得るのである。
こゝに復興せられた本誌上に、家庭の希望が伺はれ、學區の方々の意見が述べられ、學校側の親情・熱度を感じ、もつて子供の發展を期ひ、延いては下鴨教育の振興を期する、――これが再興せられた本誌の使命である。

図2.　『糺の泉』第17号表紙、巻頭言の部分

考察した記事、学校・学級運営の具体的な考え・方法に関する記事、行政による教育施策を解説した記事、下鴨校児童に関する検査・調査報告などの記事が、さらには学校からのお知らせとして、教員の異動・消息に関する情報、学校での出来事やイベントの詳説及びそのイベントのスケジュールを案内・報告する記事、年度ごとの学級組織の案内、卒業生の進路、その他家庭への様々なお願いを伝える記事などが収録されている。

こうした種類の記事だけでなく、教員が教育などについて記した雑感や感想、着任・離任・児童の卒業に際する教員からのメッセージやあいさつなども収められることがある。さらに、学校での教育活動の成果を伝える内容として、児童の作文や習字作品が掲載されることもあった。また、保護者や学区(地域)関係の記事として、寄付に関する情報、学区内各種団体の活動報告、教育活動や施設整備への具体的な協力の様子を伝える記事なども収録されている。

以上が『糺の泉』の内容のおおまかな全容である。この紹介からも、雑誌という形式を採るがゆえに『糺の泉』が有した、多様な内容を備えるという特徴の一端を感じ取ることができるのではないか。本章ではこれに加えて、この多彩な記事内容からとくに目につくものをピックアップして紹介し、それをもとに『糺の泉』の資料的な特徴と価値について、さらに一歩考察を前進させてみたい。

まず取り上げたいのは、保護者や学区に関する記事に分類できる、寄付に関する一連の記事のなかで、学校に残るモノ、つまり学校資料の出自が判明することがある点である。第三二号に掲載された寄付に関する記事には、「一、二宮金次郎像　一基／下鴨区画整理組合殿」[四]という一文がある。学校には戦前期から伝わる様々な資料が残されているが、昔になればなるほど、そうしたモノの出自やそのモノと学校との関係について、情報が残されていないことが多くなってしまう。しかしそれらのモノも、学校の歴史を物語る、大変貴重な資料と言える。この時、もし『糺の泉』のような資料が手元に存在したならば、これらのモノの来歴を知り得るかもしれない。いわば『糺の泉』のような資料には、学校を構成する各種のモ

三　「巻頭言」『たゞすの泉』第一七号、一九三五年七月、一頁。

四　「篤志寄附」第三二号、一九四〇年一二月、一一頁。

ノについて、その「モノ性」[五]を明らかにできるかもしれない、重要な価値が備わっているのである。

次に注目をしたいのは、『糺の泉』のなかに、その後数多くの研究者の検討対象になったような人物、例えば天野貞祐のような人物に関する情報や、その講演要旨まで収められている点である。『糺の泉』第三一号には、天野貞祐による講演「人生について」の講演要旨が、編集者の文責によって収録されている。これは当時京都帝国大学教授であった天野が、昭和一五(一九四〇)年五月二四日開催の下鴨母の会総会において行った講演会の記録である(図3(本論考末尾に掲載))[六]。

そもそもこの記事は、天野の講演を編集担当がまとめたものであるため、その点で取扱には注意を要するテクストと言える。ただ、それよりもここで強調しておきたいのが、おそらくこれまであまり知られていなかったであろうこのような記事が、『糺の泉』のような資料には、学校と個人の関係によっては、含まれている可能性がある事実そのものである。こうした資料の存在は、もしほとんど知られていなかった記事などがその資料に収録されていた場合、既存の研究史に新たな分析対象と視点、つまり研究史をより批判的に、かつ豊かにしていく可能性を、提供してくれることだろう。『糺の泉』の存在とその内実は、そうした可能性が学校資料のなかには潜在することを、明瞭に象徴していると言えるのである。

そして本章の最後に、『糺の泉』は教育史のいわゆる大きな物語が、より具体的なフィールドの次元ではどのように展開したのか、つまりミクロな視点から教育史研究をより一層充実させ得る貴重な材料となる点も指摘しておきたい。教育史の通説として、大正期から昭和はじめにかけて、師範学校附属小学校及び私立小学校が中心となり、児童の個性や自発性を重んじる教育思想・教育実践を追究した、いわゆる新教育運動が起こったと指摘されるが、ではその思想や実践は、公立の小学校という領域には、どのように需要・伝播・拡張していったのであろうか。そこで『糺の泉』に目を移してみると、昭和七(一九三二)年一二月に公刊された『糺の泉』第一二号には、当時の校長小川忠淳が自らの教育に関する考えを述べた「所感」という小文が掲載されており、そのなかで次のような主張が展開されている。

> 教育者が児童をして児童のもつ本然性を完全性にまで高めさせたいと云ふ念願は愛そのものである(ママ)　我々は児童をして真に人間本然の愛にまで目覚めさせたい　教育愛は取りも直さず慈愛だと信ずる　己を空しくして彼になつてみやうとする思ひ遣りである　一人〳〵の児童に自己を無くした立場に立つて直観することである　彼等は夫々異なつた天稟を持つて居るのだ　各自独特の彼等の萌芽を誤りなく知悉すと云ふことは教育の根底でなければならぬ　我々は彼等の眞性を培ふ為には眞に彼等の個性を知らなければならない　愛を以て彼等の個性を知らなければならない[七]。

そして『糺の泉』には、こうした考えの小川が校長である下鴨校が、徳育に関してどのような考えをしているのか、本質論から方法論まで考察する論考、「児童の徳育」という一文が収録されているのである(図4(本論考末尾に掲載))[八]。ここでこの論考の具体的な主張の内容を紹介及び検討することは避けるが、この文章

五　佐藤秀夫は、国定教科書と関連して、「この「モノ」性によって国定教科書は、「猛威」を振るうことができたのではないかということです」(佐藤秀夫、「「モノ」と「語り」をめぐって」(教育解放研究会編著『学校のモノ語り』(東方出版、二〇〇〇年)所収)、三〇頁)という言葉を発しているが、この「モノ性」として佐藤が取り上げているのは、国定教科書の紙質と印刷方式、つまり活字の小さからから知識量を増大しうる洋紙という特質と、大量生産ゆえに多くの子どもに行き渡るが出版社の寡占化を招く国産洋紙の機械印刷という生産過程であった。つまり「モノ性」とは、成分レベルの組成であったり、そのモノが生産・流通する過程であったりの、モノそのものの性質・特徴と考えることができる。

六　「下鴨母の会総会」『たゞすの泉』三一号、一九四〇年五月、二頁。またこの時期の天野貞祐の足跡については、蝦名賢造『天野貞祐伝』西田書店、一九八七年、三三九―三四〇頁を参照。

七　小川忠淳「所感」『糺の泉』第一二号、一九三二年一二月、二頁。

八　小川忠淳「児童の徳育」『糺の泉』第一一号、昭和七(一九三二)年一二月、三―

の全体に、公立小学校における新教育の思想の受容と捨象の痕跡を、見て取ることができるだろう。

もとより『糺の泉』には、下鴨校の特徴がよく反映された教育論及び教育実践に関する議論が、この例のほかにも多数収録されている[九]。これら学校個別の教育思想や教育実践の事例のなかには、先述の大きな物語をそのまま反映した議論もあれば、逆にその物語から逸脱する議論も存在するはずである。こうした逸脱する事例こそが、既存の教育史像を揺さぶり、再検討を迫るという、非常に重要な役割を果たすのであるが、そもそもその存在が把握されていない、さらには把握されていたとしても、検討するに十分な量の資料が確保されていないのであれば、この視点から教育史像を問い直し、より反証の余地が少ない認識へと至る道筋は、自ずと閉ざされてしまうことになるだろう。『糺の泉』の存在は、この雑誌そのものにこうした問い直しを可能にする潜在性が確かに備わっている点に加えて、こうした潜在性を共有する資料たちが、実は公立小学校の周辺に、まだまだ数多く気づかぬままに存在しているという可能性をも、私たちに示唆してはいないだろうか。

三．アクターネットワーク理論の視点からみた『糺の泉』の資料的価値

三―（一）アクターネットワーク理論とは何か

さて、前章後半部の一連の考察からも、『糺の泉』に内在するいくつかの資料的価値を析出できたと考えているが、実は『糺の泉』には、前章までの考察では捉えきれていない、さらに多様で意義深い価値が、まだまだ隠されているのではないか。こうした問題意識から、本章では現在様々な分野で検討が進んでいるアクターネットワーク理論の観点から、『糺の泉』の資料的価値に関する問題について、今一歩考察を深めてみたい。

アクターネットワーク理論とは、社会と自然という二分法を取払い、人間、及び人間以外の多様な存在が果たす役割を、フラットな観点から記述、そしてそれによって正当な評価を行うことを目指す立場・考え方のことを指し、M.カロンやB.ラトゥール、J.ローらによって一九八〇年代に提起、その後深化が図られてきた理論である[一〇]。この理論は、もともと一九七〇年代以降に活発となったサイエンススタディーズの文脈から派生してきたものであるが、なかでもこの理論は、その文脈で発表されてきた諸研究が立脚する、利害関係や人間関係などの社会的要素を固定的に想定し、それを科学のありようを説明する変数とする立場に対し、批判的な姿勢を採るところに特徴をもつ[一一]。ラトゥールの言葉に従えば、従来の社会科学の理論・方法には、「社会的な世界を照合可能になるように調節するのに非常に優れているがゆえに、数々の非社会的な存在からなる連関に注意を向けるにはピントが合わないのだ。社会のなかで自分の道を見つけながら進むための格好の旅支度をさせてくれるレパートリーが、危機の時代には身動きが取れなくさせる。したがって、すでに受け入れられた社会的構成子のレパートリーにこだわって、それに合わないものは省いてしまいたくなる」[一二]という傾向があっ

八頁。

九　例えば、第一九号の巻頭言「祈願の生活――小学校における宗教教育――」では、下鴨神社への参拝とも関係づけられながら、宗教教育に関する当時の日向校長の所見が提示されている（日向勝治「祈願の生活――小学校における宗教教育――」『だゞすの泉』第一九号、一九三六年六月、一頁）。

一〇　栗原亘「ANT成立の時代背景と人文学・社会科学における「人間以外」への関心の高まり」（栗原亘編著『アクターネットワーク理論入門「モノ」であふれる世界の記述法』（ナカニシヤ出版、二〇二二年）所収）、三頁。

一一　アクターネットワーク理論の出自や、他の理論からみた特徴などについては、栗原亘「ANT略史 その成立と展開及び批判に関する見取り図」（栗原亘編著、前書、所収）を参照のこと。

一二　ブリュノ・ラトゥール著、伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す アクターネットワーク入門』（原著は、Latour, B., 2005, Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory）法政大学出版局、二〇一九年、四六九頁。

た。それを乗り越えるために提唱されたのが、このアクターネットワーク理論という新しい考え方であった。

そのアクターネットワーク理論においては、「アクター」と「アクタン」という概念に重要な役割が与えられる[一三]。構造主義的な記号論者グレマスの物語論から援用された「アクタン」は、行為や作用をするあらゆるものと捉えられ、それは他のアクタンとの関係で決定されると把握される。つまり、例えば教員というアクタンは、児童・生徒や学校、関係者などとの関係がなければ、成立しないと考えるのである。こうして決まるアクタンが、行為の源として形象化したものが、アクターネットワーク理論で言うところの「アクター」と措定される。そして、こうした一連の発想は、次の考え方に帰結するだろう。

> アクターは他のアクターとの連関を通してそのエージェンシー（行為や作用を生み出す力）を身にまとう。アクターを取り巻く連関が変われば、そのアクターの実在性は変わってしまう。したがって、私たちが目を向け、たどるべきなのは、「連関」（assoc･iat･ion）なのである[一四]。

この観点から、何がしかの社会的要因に説明を還元してしまうのでなく、「アクター自身に従え」[一五]というスローガンのもとで、そのアクションの連鎖（ネットワーク）を追跡する方法を提唱、及び実際にその観点から研究を実践していくのが、アクターネットワーク理論である。

ここまでの記述では、アクターネットワーク理論の要点のうち、一部の議論を紹介したに過ぎない。しかし、この小文の趣旨は、あくまで『糺の泉』の資料的価値を分析する点にあるため、ここから本論考は、理論のなかでもとくに本分析との関係で注目しておきたいアクターネットワーク理論中の議論の検討、及びこの理論が備える意義の観点に、考察の方向性を定め、続けて検討を行っていくこととしたい。まず注目したいのが、アクターネットワーク理論が提示する、「モノ」の捉え方についてである。

「アクターとエージェンシーをめぐる論争から始めるという決意を貫くのであれば、差異を作り出すことで事態を変える物事はすべてアクターである――あるいは、まだ形象化されていなければ、アクタンである」[一六]と述べるラトゥールの立場からすれば、様々な「モノ」もまた、当然ながら「アクター」に加わることとなる。事実ラトゥールは次のように「モノ」を捉えていると指摘される。

> ラトゥールはモノ（th･ing）を、いわゆるオブジェクト的なモノ、つまり個的な物体としてのモノではなく、その周囲に集まり（assembly）が形成されていくような出来事を指す語として用いる。すなわち、ラトゥールは、th･ingに、モノゴト的な意味を持たせるのである。このことをふまえ、ラトゥールの議論の語彙を用いてさらに適切に表現するなら、つまりモノ（th･ing）という語は、その周囲に人間と非人間から成る異種混成的なネットワークが形成されていくような出来事を指す[一七]。

このようにアクターネットワーク理論は、世界に関する私たちの認識に、様々なゆさぶりと、それに伴う新しい視点を与える[一八]。そしてこの発想は、『糺の泉』

一三　ここで紹介するアクターネットワーク理論の基本的な考え方、及びさらなる詳細については、主として、伊藤嘉高「ANTの基本概念をたどる　記号論という「道具箱」を調査に持参する」（栗原亘編著、前掲書、『アクターネットワーク理論入門「モノ」であふれる世界の記述法』、所収）、四八―五九頁、を参照されたい。

一四　伊藤、前論文、五〇頁。

一五　ブリュノ・ラトゥール著、伊藤嘉高訳、前掲書、『社会的なものを組み直す　アクターネットワーク入門』、四三二頁。

一六　ラトゥール、前書、一三四頁。

一七　栗原亘「ANTと政治／近代「政治」を脱・人間中心的に組み直すための思考法」（栗原亘編著、前掲書、『アクターネットワーク理論入門「モノ」であふれる世界の記述法』、所収）、一四一頁。

一八　モノを含む非人間という要素を重視するアクターネットワーク理論は、まさ

もそのなかに含まれる学校資料、つまり教育史研究の文脈ではこれまで「教育・学校のモノ」と捉えられてきた対象に対しても、当然ながら適用されることになるだろう。アクターネットワーク理論の観点から学校のモノの歴史などについて検討した試みは、管見の限り、近年少しずつ発表され始めている状況、言い換えれば、これまで十分になされてこなかったというのが現状であると考えられる[一九]。本節で紹介したアクターネットワーク理論の発想法、さらにはここで触れたモノ論は、学校資料研究や学校のモノ研究に、興味深い示唆と新しい研究の可能性とを、与えることができるかもしれない。

続けてアクターネットワーク理論は、歴史に関する重要な視点、及びその結果導出される異なった歴史の描かれ方について、私たちに多くを示唆する可能性がある点にも注目しておきたい。アクターネットワーク理論は、個々のアクターの動きと、それらのアクターをめぐるネットワーク、つまり「つながり」を重視し、同時に様々な事象の説明を、より大きな社会的要素に還元することを戒める考え方であった。歴史を描く際にも、現状の資料的制約を反映してか、過去の動きの要因について、制度やかつての社会状況など、大きな文脈に依拠して説明する事例を、しばしば見出すことがある。もとより、制度や社会状況が人々の行動に多大な影響を及ぼすのは事実であり、その意味で制度等の研究、さらにはそれらと人々との関係を考察することは、非常に大切な取組であると捉えることができるが、ともするとその取組は、アクターネットワーク理論が指摘するように、個々のアクターやそのアクターが連関した場の現実を捨象してしまう危険性と隣り合わせである。複雑な諸要素が絡み合う現実において、個々のアクターはそれぞれを取り巻く状況等との兼ね合いで、制度や社会状況のもたらす様々な影響力と対峙し、ときにその力に流されてしまったり、ときにその力を糧にしたり、

にそうした要素を多分に含む「環境」を考える有力な方途となることから、地球環境問題やエコロジーというテーマとも深く関係してきた理論である点を、合わせて指摘しておきたい（栗原亘「異種混成的な世界におけるエコロジー　海洋プラスチック汚染というモノ（thing）を記述する」（栗原亘編著、前書、所収）、二二

またときにはその力に抵抗したりすると考えられる。アクターネットワーク理論の一連の議論は、こうした歴史の側面を注視し、そのアクターたちが示す、前段の「受容」・「利用」・「抵抗」などといった、いわゆる「主体性」を描写していく歴史の実践の重要性を、改めて可視化させる。そしてアクターネットワーク理論は、その実践のために必要な発想やツールに関しても、批判的に受容が検討可能な一つの有力な方法のセットを提案してくれるのである。

そのうえで最後に、仮にこの手法で学校や学区の歴史を描くことを試みる際には、学校や学区を構成する個々のアクターたちに関する資料、つまりそれぞれのアクターの意図や思想が表明されたテクストが含まれる資料や、各アクターのつながりを実際に追跡できたり、そのつながりを辿るヒントが示されたりする資料が、必要不可欠になってくる点に注目しておきたい。そしてまさにこのときに、貴重な情報源・思考の源の一角という、きわめて重要な役割を果たしてくれるのが、『糺の泉』が一例を象徴している、学校発行雑誌であると考えられるのである。

三―（二）　アクターの「主体性」及び学校をめぐる「つながり」とを可視化する『糺の泉』

さて、アクターネットワーク理論の視点から『糺の泉』を眺めてみると、まず当時学校に関係していた様々なアクターたちの声、いわばそれぞれの「主体性」が反映されていたり、その「主体性」を把握したりするための貴重な諸情報が、多数誌面に記録されていることに気がつく。

子どもの作文などの成果物が、そうした主体性をある程度示していることは言うまでもないが、折に触れて誌面を飾る教員たちの教育論や、教育をめぐる随想、さらに雑感などは、学校を構成するきわめて重要なアクター「教員」の「主体

三―二三八頁）。

一九　牧野智和「現代学校建築における主体化のモード　「ポスト規律訓練」的学校空間の組み立てとその系譜」『ソシオロゴス』第四三巻、二〇一九年九月、などを参照。

性」を考察する上で、非常に重要な情報と位置づけられることであろう(図5)。とくに戦前期、つまり「当時の公立小学校における学校経営が、管理者である学校長を中心とした権威主義的なものであったことは容易に想像されるが、それゆえに訓導たちの共同研究の成果もほとんどの場合学校長の名前で公表されている」二〇状況があるなかで、こうした個々の教員の思想に触れられる資料は、各人の主体性を分析する際に、きわめて重要な情報を提供してくれると言える。

また、この教員の主体性という観点から続けて言うと、『糺の泉』にしばしば収録された、座談会に代表される保護者の声が伝えられる記事にも、注目すべき諸点が見出せる(図6)。例えば、第一〇号に収録された家庭における子どものしつけに関する座談会では、「子供の長所をなるべく見出して褒めてやる様にて、叱る事はなるたけ避けたいと思ひます」二一という保護者の見解に対して、学校側からの「兎角欠点は見出しやすく、長所は見えないものです。教育しやうとする意志が急すぎるとよく叱りますが、叱る事のみが教育ではありません」二二という応答が記録されている。この部分には、家庭教育に関する学校の見解と関与、つまり主体性のありようの一端を見出すことができるだろう。しかし、これに加えてこの箇所には、保護者と学校が教育の問題を介して関係をもつ結節点、いわば「つながり」の実相をも見出すことが可能だろう。『糺の泉』には、この冊子が多様なコンテンツを内に含み得る「雑誌」という形態を採るからこそ、こうした学校をめぐる「つながり」の広がりの道筋とその実際例を、多数見出すことができるのである。

教育随想

若き悩み　井上三次

偶感　大塚長義

動く子供に　野村政美

知識人の弱さ　西村孝一

学校日誌

図5.『たゞすの泉』第18号、「教育随想」の一部

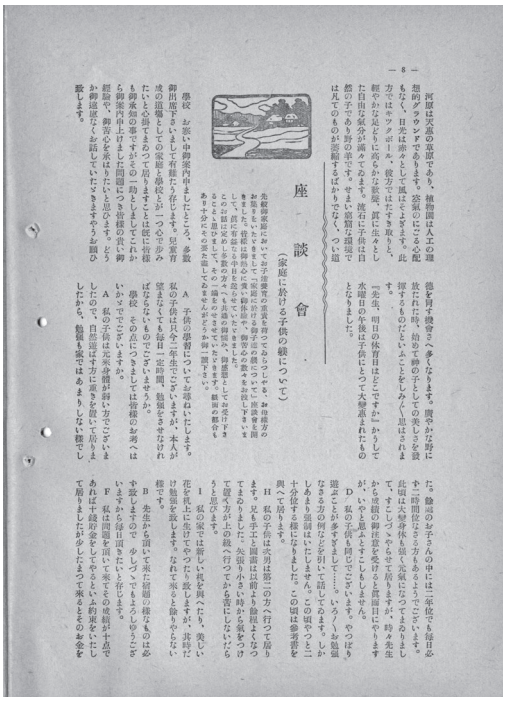

座談会
（家庭に於ける子供の躾について）

図6. 座談会「家庭に於ける子供の躾について」の一部

二〇　橋本美保「富士尋常小学校のカリキュラム改革にみる教師の協働――教師の成長を促す学校経営」(橋本美保・田中智志編著『大正新教育の実践――交響する自由へ』(東信堂、二〇二一年)所収)、三三七頁。

二一　「座談会(家庭に於ける子供の躾について)」『糺の泉』第一〇号、一九三一年六月、一〇頁。

二二　前論考、一〇頁。

様々な人の精神的・物質的つながりを示す典型的なテクストであろう[二三]。また、「学校日誌」という、学校行事及び活動のスケジュールを報告した記事に記録された、他校及び研究会への訪問・参加に関する記載は、学校間や京都市における教育関係者との「つながり」を示す例として、興味深い[二四]。そして、この箇所で何よりも特筆しておきたいのが、第二四号から断続的に報告されている、「下鴨学藝文庫」に関する記事である。この下鴨学藝文庫は、昭和一二(一九三七)年に竣工した校舎の増改築を記念して、次のような目的で設置されたものであった。

> 校舎改築記念に下鴨学藝文庫を設けました。しかし之は年来の希望であつたのであります。元来下鴨は宗教的芸術的な環境であると共に専門学校以上の教授が延百七十人もお住になる学者町であります。よつて学区民は直接間接の指導を蒙つてゐるわけであるがこのことをもつと刻銘にしたいといふのが今回の意図であります[二五]。

この記述のあと、実際に文庫に収められた図書の目録が紹介されていくのであるが、注目したいは以後の『糺の泉』のいくつかの号で、その後寄贈された図書に関する情報の詳細が報告されている点である。例えば第二九号では、天野貞祐自身による『学生に與ふる書』の寄贈が記録されている[二六]。こうしたつながりに関するきわめて微細な情報は、この空間を実際に管理する学校であるからこそ、把捉・紹介できる事実であると考えられ、例えば学校以外が発行する媒体では、なかなか知ることができない情報であると想定される。つまり『糺の泉』は、学校によって編集・発行された冊子であるがゆえに、その視点に立つからこそ可視化されるつながりの痕跡をも、多数伝達することになった資料であると言えるだろう。

二三　『糺の泉』第二四号、一九三七年一二月、「竣工記念号」を参照のこと。
二四　この例は枚挙に暇がないが、例えば「学校日誌」『糺の泉』第三一号、一九四〇年六月、八頁、などを参照のこと。
二五　「下鴨学藝文庫の設置」『糺の泉』第二四号、一九三七年一二月、一〇頁。
二六　「下鴨学藝文庫寄贈図書」『たゞすの泉』第二九号、昭和一五年二月、七頁。ちなみに、その後も天野は、学校に図書購入費一〇円を寄付したり(「篤志寄附」『たゞすの泉』第三一号、一九四〇年六月、三頁)、自著『道徳への意志』を文庫に寄贈したりしている(「寄贈図書」『たゞすの泉』第三三号、一九四〇年一二月、一一頁)。

このように下鴨校をめぐる幾重もの「つながり」、つまりそのアクターたちのネットワークのありようを、記事によって可視化する形で記録している媒体こそが、『糺の泉』にほかならないのであり、その意味でこうした学校発行雑誌は、アクターネットワークを追跡・記述する際の貴重なリソースを提供するという資料的価値をもつことがわかるのである。

三―(三)　学校関連メディア(逐次刊行物)の資料的価値とその可能性

本論考の最後に、学校に関する各種メディアとの関連の検討、及びその他の種類のメディアとの比較を行う形で、『糺の泉』の資料的価値、そして学校関連メディアの資料的な可能性について、さらに考察を深めておきたい。ちなみに本論考では、元来情報伝達の媒体と捉えられる「メディア」という言葉を、世間一般で広く浸透している「その情報発信源となった媒体の種類」の意味、例えば雑誌や新聞などを指す際に使用される意味で捉えている。

これまで学校が、例えば作成に関わるなど、直接に深い関係をもってきたメディアであったのが、今取り上げた雑誌や新聞、及び図書といった形式の、いわゆる文字メディアであった。学校歴史博物館が所蔵、もしくは調査で存在を把握できた範囲内という条件で、考察のために学校関連メディアの全体像を便宜的に示してみたのが、図7(本論考末尾に掲載)である。なお、今回は考察の主要な対象を『糺の泉』に設定しているため、「メディア」のうち逐次刊行物を考察及び図化の対象とし、以後本論考で使用する「メディア」という用語も、基本的にこうした意味で活用している。ちなみに、逐次刊行物としての学校発行メディアの特性について、図書と比較して考えてみると、前者には即時性、及び具体性、つまり抽象化される前の細かい情報も掲載されやすいという性質の部分に、資料的なメリットを認

められると考えられるだろう。下鴨校創立九〇周年に際して編集・刊行された記念誌『下鴨の教育』と比較してみると、この記念誌では、下鴨の地域性を踏まえた学校教育の方針について十分に検討する誌面上のスペースが、『糺の泉』には見られなかった規模で確保されている[二七]。しかし、その一方で、『糺の泉』に記載されていた、例えば各年の学級担任の情報、さらにはその教員たちの教育に対する考え方などは、当然ながら収録されていない。図書との比較からは、まずこうした具体的で微細な情報を知ることができるという資料的な価値を、逐次刊行物としての学校関連メディア、つまり『糺の泉』に見出すことができるだろう。

さて、図7で言うと、『糺の泉』は「学校発行メディア」、及びそのうちの「学校側が編集・発行の中心となるメディア」に位置づけられるだろう。この図からも明らかなように、『糺の泉』は「学校だより」の一種とも考えることができる。しかし、学校だよりは、一枚もので冊子というよりプリントと呼べる例も多い点、さらにはその名が象徴するように、学校の情報を関係者に伝える役割、つまり学校に関する情報からその内容が構成されることになりやすい傾向からみたときに、雑誌の形式を採り、かつ保護者や地域（学区）の声及び情報も届ける『糺の泉』には、若干異質な性格を認めることができるだろう。そもそも、この「学校発行メディア」のうち、「学校側が編集・発行の中心となるメディア」は、「児童・生徒・学生の側が編集と発行の中心となるメディア」と比較したときに、これまであまり研究の対象とされてこなかった動向がある。例えば、校友会誌に関しては、斉藤利彦らの研究グループが、旧制中学校で作成・発行されたものを中心に、所蔵等基礎情報の調査、及び多角的な内容の考察という、体系的な研究を実践している[二八]。もちろん、現在学校だよりは全国の公立小学校で発行されており、戦前期の中等教育機関、及び高等教育機関の数と比べたときに、当然のことながら前者は数が膨大となる点から、調査・研究には困難が伴うことは言うまでもない。しかし『糺の泉』の存在、及び天野貞祐らの議論や学校とのつながりの記録まで収められていたその雑誌としての特徴は、より対象を拡大した「学校発行メディア」研究の意義、及びそれらのメディアの内部に豊饒な世界が広がっている可能性を、改めて私たちに示唆してはいないだろうか。

また、学校関連メディアのなかには、地域・学区が発行するメディア、つまり学区誌や各校教育会誌なども存在している。学校歴史博物館が所蔵する本能学区の学区誌『本能』を例に、このメディアの特徴を確認しておこう（図8）。昭和六（一九三一）年七月に創刊した『本能』は、本能学区に存在した本能教育会・本能校友会、在郷軍人会本能分会、本能青年団、本能婦人会という五団体の機関誌である[二九]。このメディアの何よりの特徴は、学区・地域で活動する各種団体の活動の様

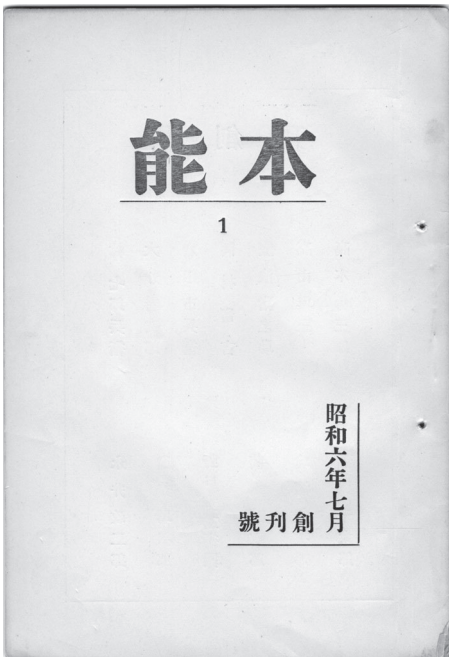


図8.　『本能』創刊号表紙

二七　富川良一・山口達夫編集代表『下鴨の教育』京都市立下鴨小学校、一九六四年、七―二六頁。

二八　斉藤利彦・市川雅美「旧制中学校における校友会雑誌の研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第四八巻、二〇〇九年三月。斉藤利彦編『学校文化の史的探究　中等諸学校の『校友会雑誌』を手がかりとして』東京大学出版会、二〇一五年、などを参照。

二九　『本能』第一号、一九三一年七月、裏表紙。

相、つまり学区の側に広がる教育活動に関するアクターのつながりをめぐる情報と、そうした活動の具体的内容やその活動の意図を説明した記事、つまり学区の教育に関する主体性を示すテクストが、多数収録されていることである（図9）。『糺の泉』でも、学区の諸団体に関する活動の様子をうかがい知ることができたが、学校の活動が誌面の中心を占める結果、各団体の活動に関する情報は、当然ながらそのぶん詳細を省かれる傾向があった。言い換えれば、『糺の泉』のような学校発行メディアと、こうした地域・学区発行メディアとを相互補完的に収集、検討することによって、学校に関係したアクターたちの「主体性」、及びそれらのアクターで構成される学校をめぐる「つながり」の全容に、接近していくことが可能となるだろう。

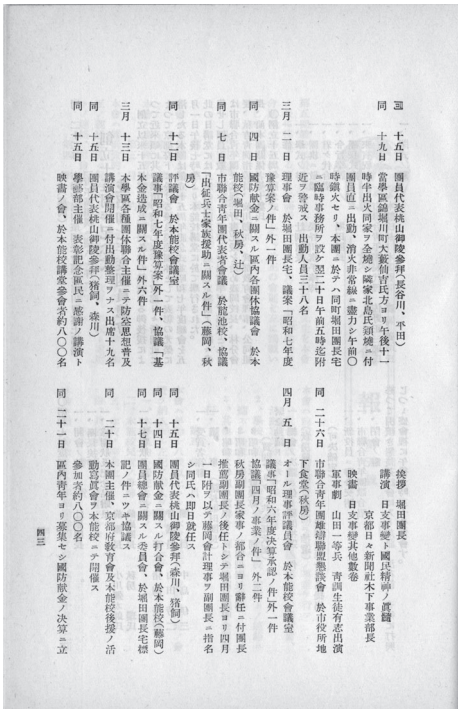


図9.『本能』第3号、昭和6(1931)年末から昭和7(1932)年上半期の本能青年団事業報告記事の一部

これと関連してこの箇所で指摘しておきたいのが、地域・学区発行メディアのなかにも、『糺の泉』に収められていたような、教員たちの教育に関する雑感や、学校の活動に関する諸情報、さらにはその背景にあった意図や思想が、収録されることもある点である。例えば、『本能』第六号には、「一言思ひついたことを述べさせて頂きます」[三〇]として、自身の教育に関する考えを三年男子担当教員三田忠雄が記した、「雑感」という論考が収録されている。また、校長四方宗太郎が昭和一二（一九三七）年の年始の挨拶を述べた文章のなかに、「本能精神」[三一]と題された次の一節が登場している。

先づ感激の結語を始めに述べます。何事に就けても静かにどつしりとその帰結を本能精神に融合統一され、協同一致の大道を確立されてゐる事であります。区内の事業は各位各団体の力に依り絶間（ママ）なく遂行されてゐますが、常に個々に潜む力と美とを感じて本能精神の麗はしき伝統と現在の御信念を偲ぶ時、あゝ成程々々と会得させられ感動致すのであります。／学区及学校の沿革に就ては、古く明治初年に於て既に熱誠漲る教育尊重の美あり、爾来七十年下京第二番組より下京第二区、下京二組、下京第二学区、中京本能学区と名称幾度か改称せられ、学校又空也町元本能寺南町へと移転され、屢次の増改築に邁進があり、此の精神は凝つて、校舎の大改築となり「学校は我等の延長なり」の熱意区内に溢れ、三十五万円の寄付金を拠出、五十万円に近き巨費を投じて現校舎を建設せらる。盍し市内最初の鉄筋コンクリート校舎にして、本市校舎に範を示し、一大改革を促しめられしは等しく衆人の熟知せる処で、如何に本能魂に徹せられてゐるかが推察できます[三二]。

この一文はあくまで校長としての儀礼的要素を含んだ挨拶であり、なおかつこの一文を見ても肝心の「本能精神」の実態が十分につかめないテクストだが、ここ

三〇　三田忠雄「雑感」『本能』第六号、一九三五年一月、一〇頁。
三一　四方宗太郎「年頭に当りまして」『本能』第八号、一九三七年一月、二頁。
三二　四方、前論考、二頁。

で重要なのはそうした形象化の当否や質ではなく、この学区の個性、つまり主体性の象徴とも言える「本能精神」なるものの言語化に、学校側のアクターである校長が参与していること、さらに言えばその象徴の形象化が、学区と学校というアクターたちのつながりとその往還関係のなかで、模索・実践されようとしている点である。

そしてこの議論は同時に、学区・地域の教育に関係する足跡、及びその軌跡に示された個性や主体性を明らかにしようとする際には、結果としてこの本能校の例のように、「学校側」のアクターの思想・動向を参照し、検討する作業が不可欠である事実を示しているだろう。本論考で行ったこれまでの一連の考察によって、こうした検討を実践しようとする際にも、『糺の泉』のような学校発行メディアがとりわけ重要な資料となり得る点を、すでに示すことができたのではないだろうか。もちろん、『糺の泉』のようなメディアを作成・発行していない学校も多数あると想定され、事実学校歴史博物館所蔵資料のなかでも、『糺の泉』と似た形式を備えると捉えられるのは、開智校(元京都市立開智小学校。現在の京都市立洛央小学校の前身の一つ)が明治二三(一八九〇)年一月に創刊した『開智雑誌』(二冊)と、中立校(元京都市立中立小学校。現在の京都市立新町小学校の前身の一つ)が昭和一二(一九三七)年一〇月に発行した『中立教育』第三号のみにとどまる(図10)。しかし、本冊子年報の部分で紹介した「郡中小学校」展の調査の過程において、これまで確認できていなかった学校発行メディアの存在を、新たに見出すことができた[三三]。つまり『糺の泉』などの学校発行メディアもまた、例えば本論考のような取組が増え、その存在が少しでも広く認識されることによって、新しい種類の、しかもこれまで発見されていなかった学校に関する資料が、新たに発掘されることがあるかもしれない。そうして発掘されたこれまで知られていないアクターたちの活動や主張、さらにはアクターたちの「つながり」に関する事実の数々が、多様な学校史の実相を明らかにしていくための、そしてアクターの「主体性」が多彩に拾い上げられた、多声的で、だからこそ生き生きとした歴史を描いていくための、またとない手がかりとなるのである。アクターネットワーク理論は、本論中「二」までで示したものにとどまらないような、学校関連メディアの資料的価値と可能性を、私たちに認識させてくれる。そして、そうした多声的な学校史・教育史を追究していく際に、その考察の下支えとなる資料の次元においてもまた、学校の周辺にまだまだ数多くの材料が眠っているという一つの可能性を示唆し、そんな学校関連メディアの豊かな潜在性と力を実際に示してくれるのが、他ならぬ『糺の泉』であったと言えるだろう。

三三　調査の過程で、御室尋常小学校(現在の京都市立御室小学校)が発行した『校報』が、京都府立京都学・歴彩館に所蔵されていることを確認した。そのほかの学校発行メディアや学区(地域)発行メディアについては、『年報』所収の「郡中小学校」展展示リストを参照されたい。

中立教育

健康教育

図10.『中立教育』第３号
なお、この冊子は新聞の形で編集された全４頁の形式を採用している。

—2—

下鴨小學校創立記念日祈願祭祝詞

掛麻久母畏伎賀茂御祖神社乃大前
爾恐美恐美母白左久四月乃八日乃
今日波志母畏伎也

明治天皇命乃大詔以知氏國民總氏
物學嬰奴人無加禮登事依志給比志
隨爾大神等乃敷坐須此乃鴨乃浮島
乃里爾始米氏下鴨小學校乃建設介
良衣志記念乃日爾志有禮波其賀學
校長日向勝治乎始米氏教師等相共
爾恐詣來氏大前爾齋竈波里清麻波
里氏御饌御酒種々乃物乎献奉里拜
美冐祝奉良久乎平介久安介久聞食
志相諸比給比氏此乃學校爾波八十
枉日乃枉事無久各母各母病志伎事
無久煩波志伎事無久遠皇祖乃大御
代與里御代御代承繼賀比傳閉來麻
世留惟神奈留大道以氏民草乎導伎
給比趣介給布登明治二十三年十月
三十日刀云布日爾教育乃方針乎明
米示志給比志尊伎大御言乎戴伎奉
里畏美奉里氏教留事乃脱留事無久
學布事乃誤神事無久彌勵美爾勵美
彌勉米爾勉米氏此乃學校與里波
行高久智深久奇久才有留者共多

人生について

京大教授　天野貞祐

汽車中の出來事であるが、子供連の婦人が廣い坐席を占め、他人を立たしてゐた。これは勿論親と子の人情にもよるが、自分の子供のみを考へる家族的利己主義の表れで、利己主義であることには間違ひがない。個人主義は他の人格、福利を尊重するが、利己主義は自己のみを考へ他人を考へない間違つた主義である。

元來汽車、電車、バス内は公とは何ぞやと云ふことを教へるに最もよい所である。即ち自己を抑へる事を學ばす所である。故にかゝる所で勝手を許すことは子供を愛することにはならない。日本古來の教育は躾を重んじて來たのである。今の教育はどうも躾がないやうである。西洋殊に、ドイツに於ては子供が我儘をすると、してはいけないと大人の誰でもが止めあつてゐる。我儘を許すことは日本の教育でもなく西洋の教育でもない。

最近ドイツからの歸朝者の感想をきくと、日本人は公共の觀念がないと云ふ。公共の觀念は子供の時から、たゝき込まねばならぬ。

自己を捨てゝ公の爲に奉仕する精神は大人になつてからでは遲い。元來人間、私達は相互に國民であつて國民をはなれて私といふものはない。國家が個人を通して生きてゐるのである。隨つて公の爲に盡す事によつて自分が國家に對する義務を果してゐるのである。

公とは誰もが從はなければならぬものであつて如何ともすべからざるものである。それに奉仕する事が重要なことになり、それに役立つことが大切になるのである。

建物は土台、大柱、小柱、瓦等により壓序正しく造られてゐる。その構成部分は部分として價値をもち全體に對して重要な役目を果してゐるのである。國もそれと同樣であつて、秩序正しく成立して一つの統一體を構成してゐる。隨つてそれ〴〵の位置に應じて國に役立つことが肝要である。凡ての部分は皆重要であり、凡ての人が人間として値打をもつと云ふ考をもつ事が必要である。

ドイツのゲーテが「自分を尊ぶと云ふことは、上の人を尊び、同列の人を尊び、下の者を誘導することを前提とするものであつて、かくして人間を本當に尊ぶことになる」と。又ドイツの哲學者カントが「尊敬は人間に特有なるものであつて、人間たる限り如何なる人をも尊敬しなければならぬ」と。

私は日本の立身出世主義の教育に不滿をもつてゐる。それを願ふは人情であるが、かくて教育するのは不可である。又その樣な考で學問をするのもいけない。入學試驗をパスすることによつて、自分が他人より上だと思ふことが間違ひである。人格として、かけがへのない人として尊敬して行かなくてはならない。

學校も「事柄自體」を重んじなければならない。算術、歴史、地理、理科等をどれ丈よく理解したが問題であつて、それによつて他人と比較するのが悪いのである。

電撃戰で世界人を驚嘆さしつゝあるドイツの强みは過去多年の「事柄自體」を重んずる教育の力に由來するのである。

ドイツの學問、其他の機構が勝れてゐるのは教育に其の源がある。爲めに教育者は非常に重きをなしてゐるのである。ドイツでは大學の講義等も一般民衆がきき得るやうになつてゐるし、又よくききに行くのである。隨つて一般的に教育のレベルが上り、發達してゐる。又試驗制度によつて試驗さへ合格すれば誰しも中、

（三頁四段につゞく）

下鴨母の會總會　五月廿四日午後一時から本校講堂にて本年度總會を開き、天野貞祐先生の「人生について」と題する講演あり、後、土山義貴先生御指導の兒童舞踊を鑑賞した。

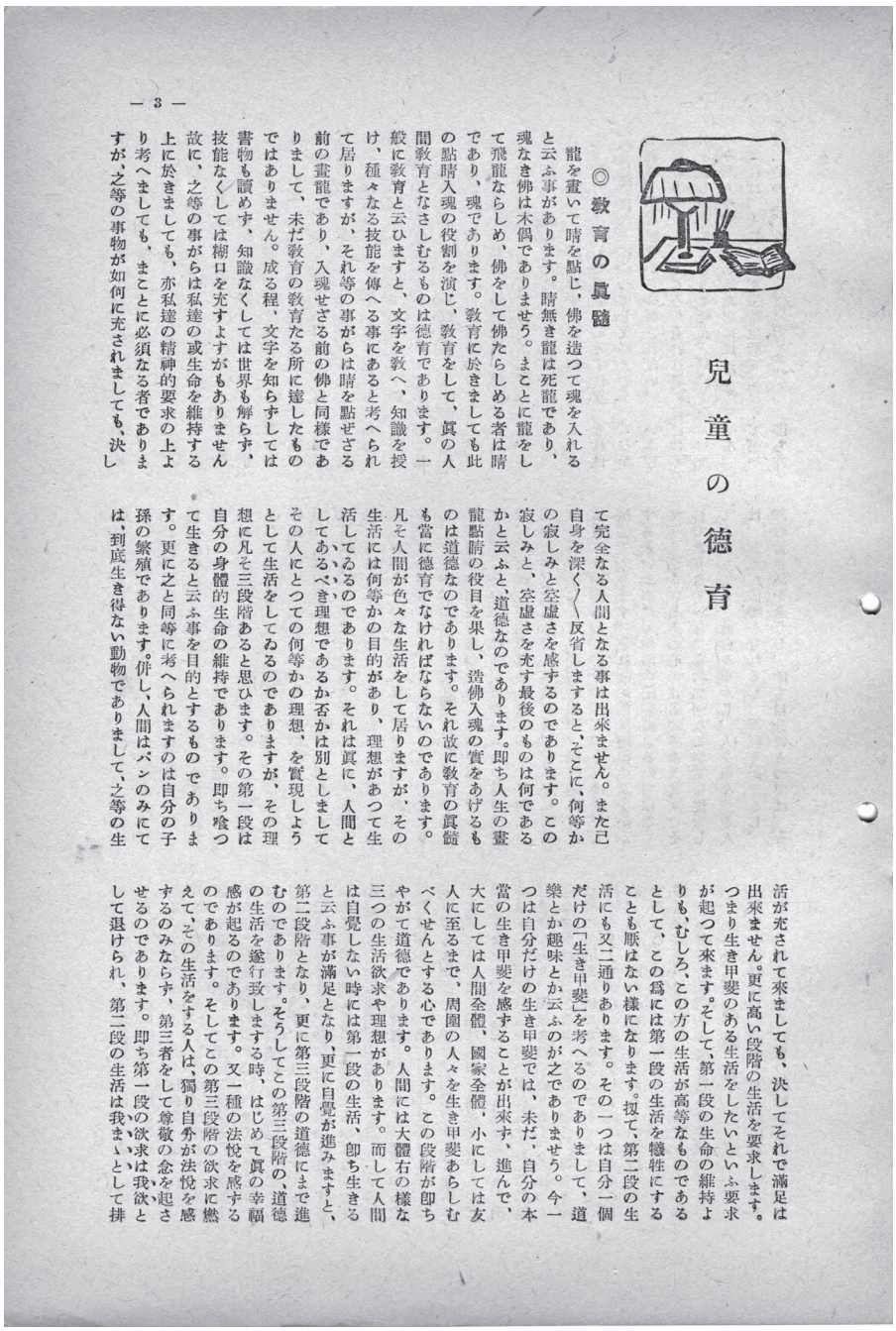
事務報告（抄）

一、映畫等の餘興があつた。

一、本會々則一部修正ノ件ニ就キ第六條（八）「特別會員一時金壹百圓以上ヲ醵出シタルモノトスートアルヲ昨年ノ議員會ヲ開ク新評議員ハ第八回總會ニ於テ指名ヲ會長ニ一任セラルヲ以テ會長ハ三村三平氏外七十九名ニ對シ當選通知書ヲ發送シ本日初メテ召集シ更ニ會長側會長ノ改選ヲ求メタル結果大佳、松永兩氏當選重任セリ

一、同七月十七日　第二下鴨校鹽澤健一郎府市代表健康優良兒トシテ選定セラ名ノ新理事會ヲ開催シ常務理事互選ノ

図３．天野貞祐による講演の記録、「人生について」の一部



— 3 —

児童の徳育

◎教育の眞髓

龍を畫いて睛を點じ、佛を造つて魂を入れると云ふ事があります。睛無き龍は死龍であり、魂なき佛は木偶でありませう。まことに龍をして飛龍ならしめ、佛をして佛たらしめる者は睛であり、魂であります。教育に於きましても此の點睛入魂の役割を演じ、教育をして、眞の人間教育となさしむるものは德育であります。一般に教育と云ひますと、文字を教へ、知識を授け、種々なる技能を傳へる事にあると考へられて居りますが、それ等の事がらは睛を點ぜざる前の畫龍であり、入魂せざる前の佛と同樣でありまして、未だ教育の教育たる所に達したものではありません。成る程、文字を知らずしては書物も讀めず、知識なくしては世界も解らず、技能なくしては糊口を充すよすがもありません故に、之等の事がらは私達の或生命を維持する上に於きましても、亦私達の精神的要求の上より考へましても、まことに必須なる者でありますが、之等の事物が如何に充されましても、決して完全なる人間となる事は出來ません。また己自身を深く〳〵反省しますと、そこに、何等かの寂しみと空虛さを感ずるのであります。この寂しみと、空虛さを充す最後のものは何であるかと云ふと、道德なのであります。即ち人生の畫龍點睛の役目を果し、造佛入魂の實をあげるものは道德なのであります。それ故に教育の眞髓も當に德育でなければならないのであります。凡そ人間が色々な生活をして居りますが、その生活には何等かの目的があり、理想があつて生活してゐるのであります。それは眞に、人間としてあるべき理想であるか否かは別としましてその人にとつての何等かの理想、を實現しようとして生活をしてゐるのでありますが、その理想に凡そ三段階あると思ひます。その第一段は自分の身體的生命の維持であります。即ち喰つて生きると云ふ事を目的とするものであります。更に之と同等に考へられますのは自分の子孫の繁殖であります。併し、人間はパンのみにては、到底生き得ない動物でありまして、之等の生活が充されて來ましても、決してそれで滿足は出來ません。更に高い段階の生活を要求します。つまり生き甲斐のある生活をしたいといふ要求が起つて來ます。そして、第一段の生命の維持よりも、むしろ、この方の生活が高等なものであるとして、この爲には第一段の生活を犧牲にすることも厭はない樣になります。扨て、第二段の生活にも又二通りあります。その一つは自分一個だけの「生き甲斐」を考へるのでありまして、道樂とか趣味とか云ふのが之でありませう。今一つは自分だけの生き甲斐では、未だ、自分の本當の生き甲斐を感ずることが出來ず、進んで、大にしては人間全體、國家全體、小にしては友人に至るまで、周圍の人々を生き甲斐あらしむべくせんとする心であります。この段階が即ちやがて道德であります。人間には大體右の樣な三つの生活欲求や理想があります。而して人間は自覺しない時には第一段の生活、即ち生きると云ふ事が滿足となり、更に自覺が進みますと、第二段階となり、更に第三段階の道德にまで進むのであります。そうしてこの第三段階の、道德の生活を遂行致しまする時、はじめて眞の幸福感が起るのであります。又一種の法悅を感ずるのであります。そしてこの第三段階の欲求に燃えて、その生活をする人は、獨り自分が法悅を感ずるのみならず、第三者をして尊敬の念を起させるのであります。即ち第一段の欲求は我欲として退けられ、第二段の生活は我まいとして排

図４.『糺の泉』第 11 号、「児童の徳育」の一部

1．学校発行メディア

学校側が編集・発行の中心となるメディア

学校案内、学校要覧、学校（学級）だより、校内誌など。

研究紀要・研究報告・校内研究誌など

学校主催イベント（運動会・記念行事・研究会など）の案内・リーフレット・プログラムなど

児童・生徒・学生の側が編集と発行の主体となるメディア

（校友会誌、生徒会誌、学校新聞、クラブ活動成果報告（文芸部の文集等）など）

2．学校運営関係者発行メディア

PTA が編集・発行の中心となるメディア（PTA 会報（だより・新聞・通信など）

3．かつての学校関係者が発行するメディア

同窓会が編集・発行の中心となるメディア

（同窓会誌、同窓会会報（だより）、同窓会が主体となるイベントの案内など）

4．学区（地域）発行メディア

学区の全体が発行の主体となるメディア

（学区会報、教育会誌（教育会雑誌・教育会報など））

学区内の各種団体が個別で編集と発行の主体となるメディア

（婦人会、青年団、在郷軍人会などの発行物）

図7　学校歴史博物館所蔵資料から見た主な学校関連メディア（逐次刊行物）の種類

【資料紹介】

「如雲社月並書画展観録」

森田　淑乃

はじめに

如雲社とは、幕末から明治時代にかけての京都において、主に絵画や書を持ち寄る月に一回の月並展観を行い活動していた画家を中心とした団体である。本稿で紹介する当館寄託の「如雲社月並書画展観録」とは、如雲社の中心人物の一人であった森寛斎（一八一四～一八九四）が編集を担い作成したと伝わる、如雲社の月並展観を記録した冊子である。

如雲社の月並展観についての先行研究では、五十嵐公一氏が「如雲社の出発点――京狩野家資料を手掛かりにして」において、京狩野家に残された資料に基づき、如雲社による最初の月並展観が開かれたのは慶應四（一八六八）年であった可能性を指摘している[一]。

また、「如雲社月並書画展観録」については、森光彦氏が「如雲社の展観録について――明治期京都の画家団体の活動」において、年月日の記載がある展観録のうち最も古い明治十五（一八八二）年三月十一日と記された資料をとりあげながら、如雲社の活動について述べている[二]。くわえて、美術記者であった村上文芽（一八七四～一九三〇）による日出新聞の連載「絵画振興史」や、毎日新聞京都支局の記者であった神崎憲一（一八八九～一九五四）による『京都に於ける日本画史』、雑誌に掲載された上村松園の記事など、如雲社や月並展観についての記述もまとめている。

本稿では、京都市学校歴史博物館へと寄託されている全二十九冊の「如雲社月並書画展観録」を活字化し、村上文芽が大正八（一九一九）年に日出新聞にて連載していた「絵画振興史」や、同じく文芽が「絵画振興史」をふまえて大正十四（一九二五）年に記したと考えられる『後素協会の三十年』とに記された如雲社についての記述との比較検討を行い、若干の考察を試みることによって資料紹介としたい。なお、「如雲社月並書画展観録」の活字化は森田、当館学芸補助をつとめていた田部未紗、同じく学芸補助をつとめている島田千晴で行った。

「如雲社月並書画展観録」について

当館に寄託されている「如雲社月並書画展観録」（以下、展観録）は全二十九冊である。本稿では、年月日の記載がある十七冊の冊子に、古いものから順に番号をつけた（表一）。また、年の記載はなく月日のみが記された残りの十二冊の冊子には、月並展観に出品していた人物の歿年をふまえて仮の番

一　五十嵐公一「如雲社の出発点――京狩野家資料を手掛かりにして」三一頁左列三一行―右列三五行、『藝術』三九、大阪芸術大学、平成二十八（二〇一六）年、二七―三四頁所収

二　森光彦「如雲社の展観録について――明治期京都の画家団体の活動」八〇頁十一―十二行、『須田記念　視覚の現場』二、醍醐書房、令和二（二〇二〇）年、七九―八二頁所収

号をつけた(表二)。

まず、展観録の本文に記された情報を確認していく。

展観録では、冒頭に月並展観が開催された年月日や開催された場所が記載されていることが多い。月並展観の開催日については、村上文芽が『後素協会の三十年』において「会名を如雲社と命じ月次の会日を十七日(後十一日に改む)と定め」と述べている[三]。如雲社の月並展観ははじめ十七日に開催と定められ、のちに十一日に開催へと変更されたのである。月並展観が十一日に開催されていたことは展観録に記された日付や、資料二・三・二十一の表紙にみられる「毎月十一日」という記述からも確かであると言えるだろう。しかし、資料二十二は三月十一日に開催された会の記録である資料二十三と出品作品などがほぼ同一であり、日付が三月十日と記されていることから、月並展観が十一日だけではなく、二日間続けて開催されたこともあったと推測される。

如雲社の月並展観が開催された場所については、文芽による「絵画振興史」や『後素協会の三十年』に、円山正阿弥楼や長楽寺の諸楼の名があげられている[四]。くわえて、「絵画振興史」では「殊に新年の発会は円山正阿弥楼に於て開き」と述べられている[五]。このことからも、円山正阿弥楼を会場として新年の会が開かれてたことがうかがえる。展観録を確認すると、明治二十(一八八七)年の一月十一日に開催された月並展観の記録である資料四、明治二十一(一八八八)年一月十一日の記録である資料八にも円山正阿弥を会場としたことが記されている。しかし、明治二十六(一八九三)年一月十一日の記録である資料十六と、明治二十七(一八九四)年一月十一日の記録である資料十七とには、会場が有楽館と萬花園、大仲院であったと記されている。つまり、如雲社の新年の展観は円山正阿弥だけでなく、他の会場でも開かれていた可能性がある。その他の開催年月日が分かる展観録を参照すると、新年の会以外では明治十五年には常楽寺(資料一～三)、明治二十年から二十五年にかけては妙心寺(資料五～七・資料九～十五)にて月並展観が開かれたこともあったようである。

展観録に開催の年月日や場所につづいて記されているのは、展観に出品された書画の記録である。如雲社の月並展観では、古筆や古書画と題し、物故者の作品が飾られていた。展観録には、そのような出品作品の記録が作者と作品名、出品者とともに記されている。確認すると、円山応挙(一七三三～一七九五)や呉春(松村月渓・一七五二～一八一一)、松村景文(一七七九～一八四三)、横山清暉(一七九二～一八六四)ら円山四条派を代表する画家たちや、土佐派の土佐光貞(一七三八～一八〇六)、狩野派の狩野探幽(一六〇二～一六七四)らの作品など、様々な画派の絵師らによる作品が飾られていたことが分かる。

如雲社の月並展観にて飾られた作品についての記述としては、村上文芽が「絵画振興史」において如雲社が新年に開いた月並展観の様子を記したものがあり、「前記の天開図、及び静邸蔵光貞筆日出を懸け鏡餅を供へ」ていたと述べている[六]。前記の天開図とは円山応挙「天開図」のことであり、静邸が出品した土佐光貞「日出」とともに飾られたようである。円山応挙「天開図」は、当館寄託の展観録のうち資料一・四・八・十六・十七に記載がみられる作品である。これらのことから、円山応挙「天開図」が如雲社の月並展観に繰り返し

三　村上文芽「後素協会の三十年」、大正十四(一九一九)年、二頁十一―十一行

四　村上文芽　大正十四年、二頁十一―十二行

五　村上文芽「絵画振興史」『日出新聞』大正八年七月三十一日(島田康寛『京都の日本画　近代の揺籃』京都新聞社、平成三年、一一九頁十三行)

六　村上文芽　大正八年七月三十一日(島田康寛　平成三年、一一九頁十三―十四行)

出品されていたことがうかがえる。とくに資料四・八・十六・十七は、一月に開催された会で展示されたことを示しており、「絵画振興史」の記述と一致する。展観録によると、出品者は国井氏であった。また、「絵画振興史」に「静邸蔵光貞筆日出」と記されていた作品は、展観録に記された土佐光貞「昇旭図」であると推測する。本作は、応挙「天開図」とともに飾られていたことが資料八・十六にて確認できる。

そのほか、月並展観では古筆として塩川文麟（一八〇八～一八七七）、長谷川玉峰（一八二二～一八七九）、土佐光文（一八一二～一八七九）など、如雲社の物故社員の作品も飾られていたことが、展観録から確認できる。一部の展観録、資料十九・二十七・二十九においては、亡くなった如雲社関係者の追福や遺墨が執り行われていたことも記されている。

また、展観録には今書画や新書画と題して、存命者による書画の出品記録が作品名と作者名によって記された。展観録の作成を担っていた寛斎が月並展観へと積極的に出品していたことが分かる。

展観録には各会をとりしきる当直、茶席、幹事なども記された。茶席を担当していた亀良則と思われる人物について、森寛斎との関係がうかがえる記述が「絵画振興史」にある。文芽が寛斎について「京都には堺町蛸薬師の菓子屋亀屋良則宅の浜辺に宅があつて、良則の宅へは終始遊びに来た」と記しているのである[七]。つまり、寛斎は亀良則宅を訪れていた。良則の店が蛸薬師にあったという記述は、月並展観録の記述とも一致する。これらのことから、如雲社の中心人物の一人であった寛斎が、茶席を担当していた亀良則と親しくしていたことが推測される。また、如雲社の幹事については、同じく「絵画振興史」に「出席者の次第に増加するに従ひ、一切の雑事は筆屋、絵具屋が進んで扱ひ」とある[八]。画家たちと関係が深い人物らが如雲社に関する雑事を担っていたのであろう。くわえて、森光彦氏は「如雲社の展観録について――明治期京都の画家団体の活動」において、展観録に記載されていた木村通仙堂が表具師であることを述べていた[九]。ゆえに、如雲社の月並展観が、画家と関係が深かった筆屋、絵具屋、表具師などの人々に支えられて開かれていたと言えるだろう。

また、展観録のうち資料四・八・十六・十七には如雲社の社員や幹事の名簿が掲載されている。明治二十年一月十一日の会の記録である資料四では、如雲社の社員として三十五名の名が記されている。その翌年の明治二十一年一月十一日の記録である資料八にも、同じく三十五名の社員の名がみられる。展観録から明治二十年から二十一年にかけて、五名の社員が入れ替わったことが分かる。そのうち、国井応文（一八三三～一八八七）は明治二十年三月二十九日に没したことから、国井応陽へと引き継がれたことが推測できる。また、のちに三井銀行の社長をつとめた三井高保は、高保自身の明治二十年からの欧米出張にともなって、長男の三井高縦へと社員を引き継いだと考えられる。

明治二十六年一月十一日の記録、資料十六では、社員の数は四十七名に増え、さらに副社員の名簿も記載されている。副社員として掲載されている人物は、社員の弟子にあたる人物が多いと推測される。当時は幸野楳嶺の門下であった川合玉堂の名も確認できる。翌年の明治二十七年一月十一日の記録である資料十七では、社員として四十五名の名が掲載されている。西村桃嶽は明治二十六年、清水東陽は明治二十七年一月二十七日にそれぞれ歿したことから、資料十七の社員の名簿からはその名が消えたのだろう。

七　村上文芽「絵画新興史」『日出新聞』大正八年七月四日（島田康寛　平成三年、二九頁十四行）

八　村上文芽　大正八年七月三十一日（島田康寛　平成三年、一一九頁十二―行）

九　森光彦　令和二年、八十一頁、上段一行―二行

つづいて、展観録の大きさや素材についてみていきたい。展観録は縦がおよそ十五cm、横がおよそ十cmの大きさの冊子である。表紙・裏表紙に用いられている紙は統一されていない（図一）。展観録に用いられた紙については、村上文芽「絵画振興史」に「用紙も多くは反古や余白を用いたので、一冊の中紙質は同じでないのを常とした」とある[一〇]。また、同じく文芽による『後素協会の三十年』にも、「用紙も全く書きつぶしの餘白を用いたので一冊の紙質は同じくはない」という記述がある[一一]。つまり、展観録は書き損じなどで不要となった反古紙や、他の用途で使った紙のあまりで作られたので、それぞれの冊子に用いられた紙も異なっていた。表紙・裏表紙においても、用いられている紙が同一ではないことから、同様に余り紙などが用いられた可能性を指摘する。

展観録の表紙に漢数字が記されている場合、展観が開催された月を示していると推測される場合が多い。しかし、資料九のように表紙に三とあり、二月に開催された会の記録である例も確認できる。また、表紙には「今書画展観録」「新古書画展観録」「月並展観書画録」「月並展観録」などと記されている。

当館寄託の展観録の来歴については、表紙に「長谷川」の丸印がみられる冊子が複数確認できることから、長谷川家に伝わったものであることが推測される。くわえて、資料十二の表紙には「長谷川齋玉純所特図書之□」の朱文方印があり、また資料十六の表紙には「長谷川玉純様」と墨書きがある。これら二点の資料については、長谷川玉純に配布された可能性が高いと言えるだろう。

展観録の作成者については、村上文芽「絵画振興史」に、「会の中心は寛斎で献身的に尽力をした毎月の展観目録の如き自ら之を編して、自家の木彫活字を用て唐紙に手刷して子冊子を為し、之を出品者に配付した」と述べられていた[一二]。つまり、寛斎が展観録を編集し、木彫活字を用いて唐紙に印刷していたのである。くわえて、「絵画振興史」には「目録中活字のないものは欠字として一々之に文字を書加へ」という記述もみられる[一三]。書き加えられた文字は、展観録にも確認できる。例えば、資料一の一頁目にみられる壬午の「午」、當直の「當」、幹事の「幹」などは文字が書き加えられている可能性が高い（図二）。

当館寄託の展観録は、このように寛斎が木彫活字で印刷し、文字を書き加えて制作したことが推測される冊子がほとんどである。しかし、寛斎ではなく、印刷会社が印刷を担ったと考えられる冊子も四冊確認している（図三）。そのうちの一冊、資料四の裏表紙には、「京都烏丸三條北　點林堂印刷」と記されている（図四）。そのほかの展観録が多くても十四頁ほどであるのに比べ、四冊はおよそ三十頁で、最も頁数の多い資料十六は三十五頁と頁数が多い。四冊とも、一月十一日に行われた月並展観の記録で、新年の会としてとくに大々的に開催されたことが展観録からうかがえる記録である。そのため、手刷ではなく、印刷会社に制作を依頼したことが考えられる。

最後に、如雲社の月並展観において、課題が出題されていた可能性を指摘したい。文芽による「美術振興史」には、「当時は兼画即ち課題の絵画を持寄りて批評を交換した」という記述があり[一四]、月並展観において絵画の課題が課されていたことを示している。当館に寄託されている展観録を確認してみ

一〇　村上文芽　大正八年七月三十一日（島田康寛　平成三年、一一九頁十八行）
一一　村上文芽　大正十四年、三頁、十―十一行
一二　村上文芽　大正八年七月三十一日（島田康寛　平成三年、一一九頁十六―十七行）
一三　村上文芽　大正八年七月三十一日（島田康寛　平成三年年、一一九頁十七―十八行）
一四　村上文芽　大正八年七月三十一日（島田康寛　平成三年、一一九頁十一行）

ると、資料八においては雪埋松図と題された作品が鈴木松年や山本春挙を含む十八名によって十九点も出品されていた。くわえて、雪埋松和歌も一点出品されている。また、資料十六においても、巖上龜之圖と巖上龜が主題と思われる書などの作品が、清水東陽らの合作を含む十一名と一組による十二点も出品されていた。このように、文芽が「美術振興史」に記した、如雲社の月並展観において課題の絵画が持寄られていたという記述をふまえ、当館寄託の展観録をみてみると、同一主題の作品が複数出品されていた会があったことを確認できた。ゆえに、如雲社の月並展観では、課題として出題された同一主題の絵画を何人かの画家たちが持ち寄ることもあったと言えるだろう。

おわりに

本稿では、当館に寄託された全二十九冊の「如雲社月並書画展観録」を活字化し、村上文芽による「絵画振興史」や『後素協会の三十年』にみられる如雲社についての記述と検討しながら、若干の考察を試みることによって資料紹介とした。そして、本資料群が如雲社の主な活動であったとされる月並書画展観について、開催年月日、会場にはじまり、古書画や今書画として出品されていた作品、月並展観を支えた人々についても伝える記録であり、如雲社の活動の一端を知ることができる貴重な資料であることを再確認した。より詳細な検討は別稿に委ねることとしたいが、本稿が今後の如雲社や如雲社の月並展観に関連する研究の深化につながれば幸いである。

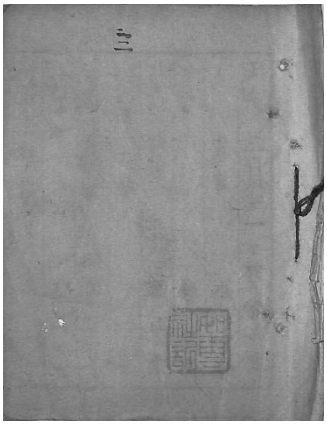
参考文献

五十嵐公一「如雲社の出発点――京狩野家資料を手掛かりにして」『藝術』三九、大阪芸術大学、平成二十八（二〇一六）年、二七ー三四頁所収
五十嵐公一「第三回京都博覧会での如雲社」『藝術文化研究』二十、大阪芸術大学大学院芸術研究科、平成二十八（二〇一六）年、一ー十四頁所収
神崎憲一『京都に於ける日本画史』京都精版印刷社、昭和四（一九二九）年
田島達也「京都日本画の誕生」『京都市立芸術大学創立130周年記念展京都日本画の誕生　巨匠たちの挑戦――』京都市立芸術大学、平成二十二（二〇一〇）年、十ー十九頁所収
村上文芽「絵画新興史」『日出新聞』大正八（一九一九）年（島田康寛『京都の日本画　近代の揺籃』京都新聞社、平成三（一九九一）年に掲載）
村上文芽『後素協会の三十年』、大正十四（一九二五）年
森光彦「如雲社の展観録について――明治期京都の画家団体の活動」、『須田記念　視覚の現場』二、醍醐書房、令和二（二〇二〇）年、七九ー八二頁所収

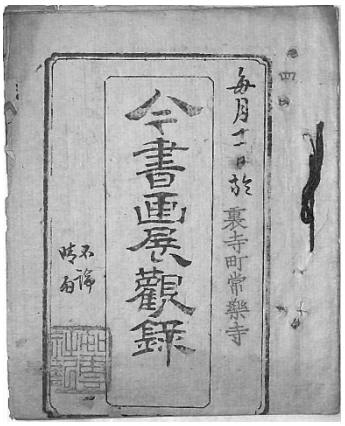
附記　本資料は松竹京子様からご寄託いただきました。末筆ながら御礼申し上げます。

（図一）「如雲社月並書画展観録」表紙

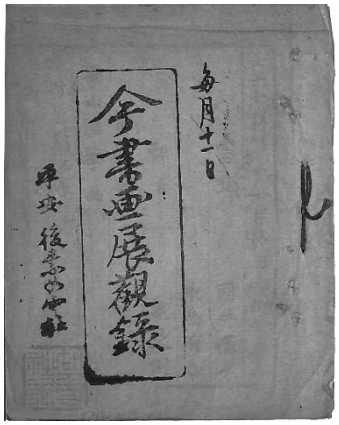
（資料一）



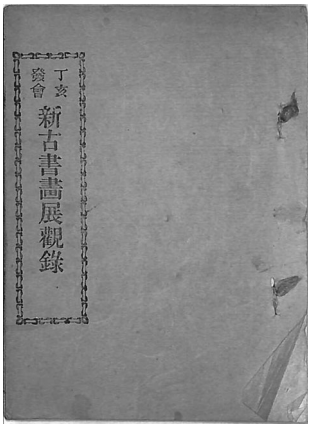
（資料二）



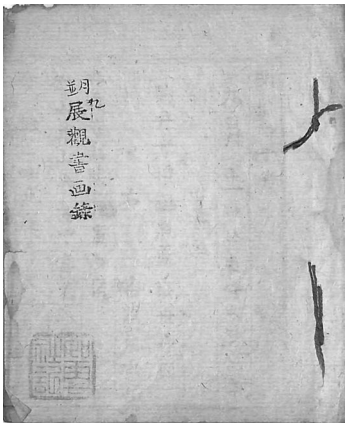
（資料三）



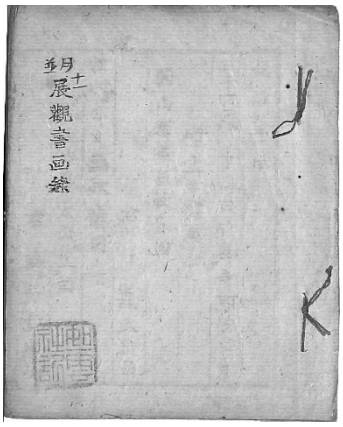
（資料四）



（資料五）

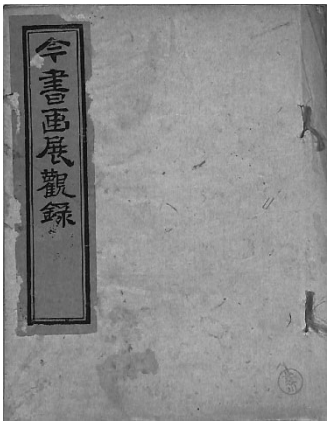


（資料六）



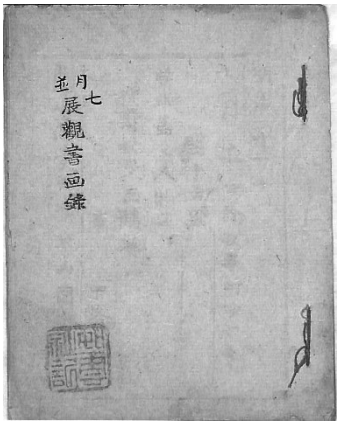
（資料七）

（資料八）

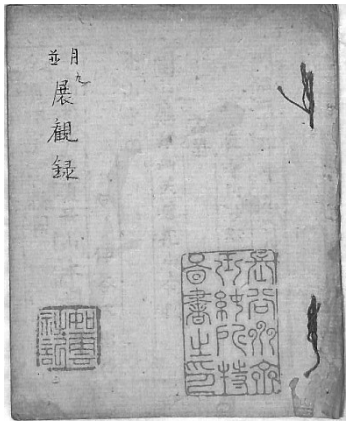


（資料九）

（資料十）

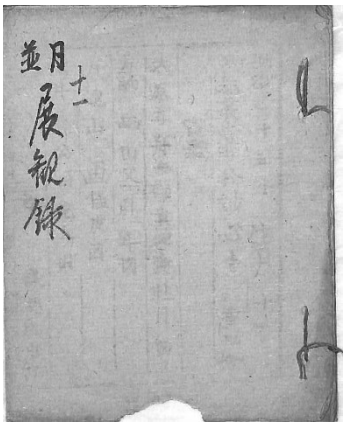


（資料十一）

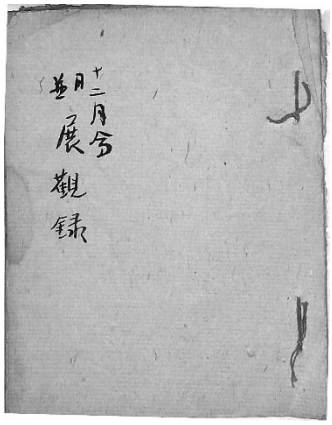


（資料十二）

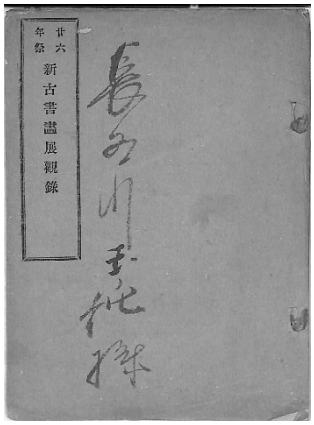
（資料十三）



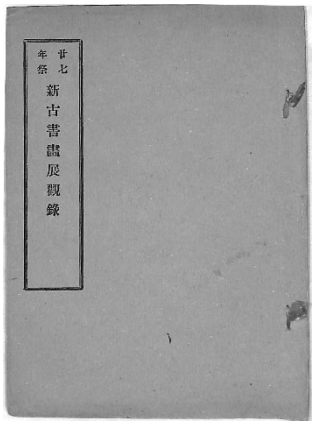
（資料十四）



（資料十五）

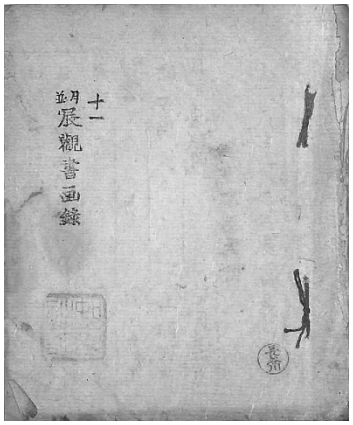


（資料十六）

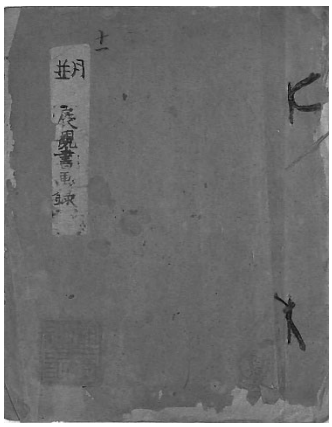


（資料十七）

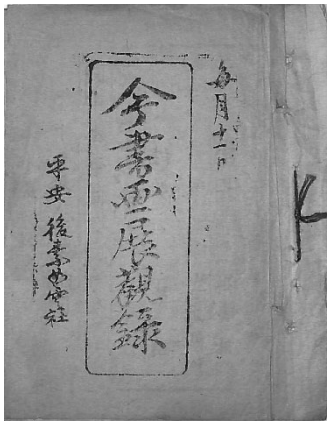
（資料十八）



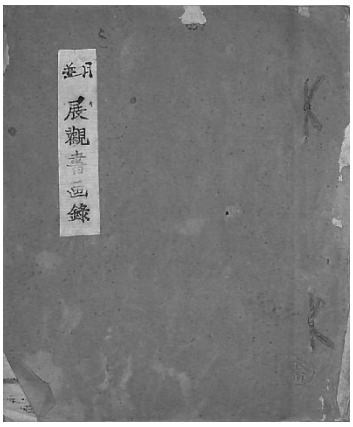
（資料十九）



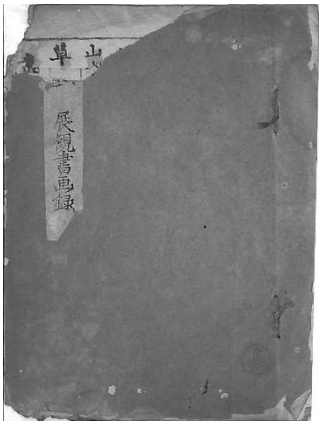
（資料二十）



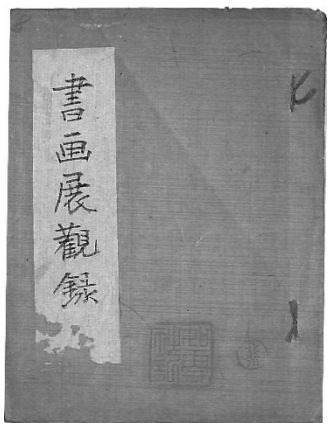
（資料二十一）



（資料二十二）

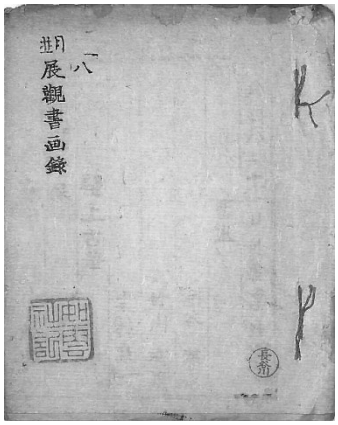


（資料二十三）

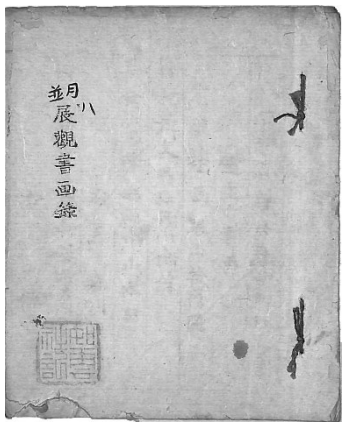


（資料二十四）

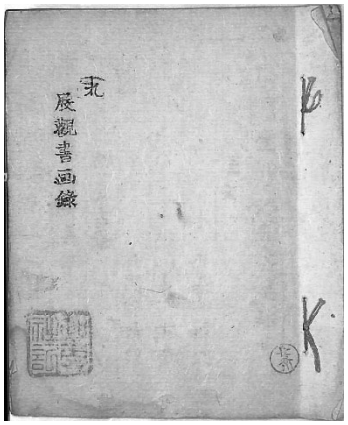
（資料二十五）



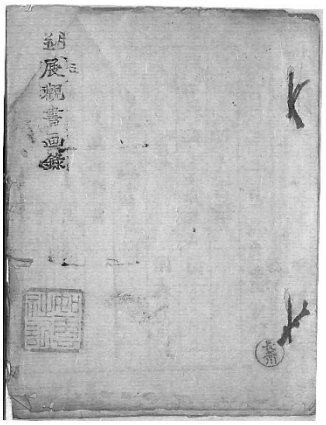
（資料二十六）



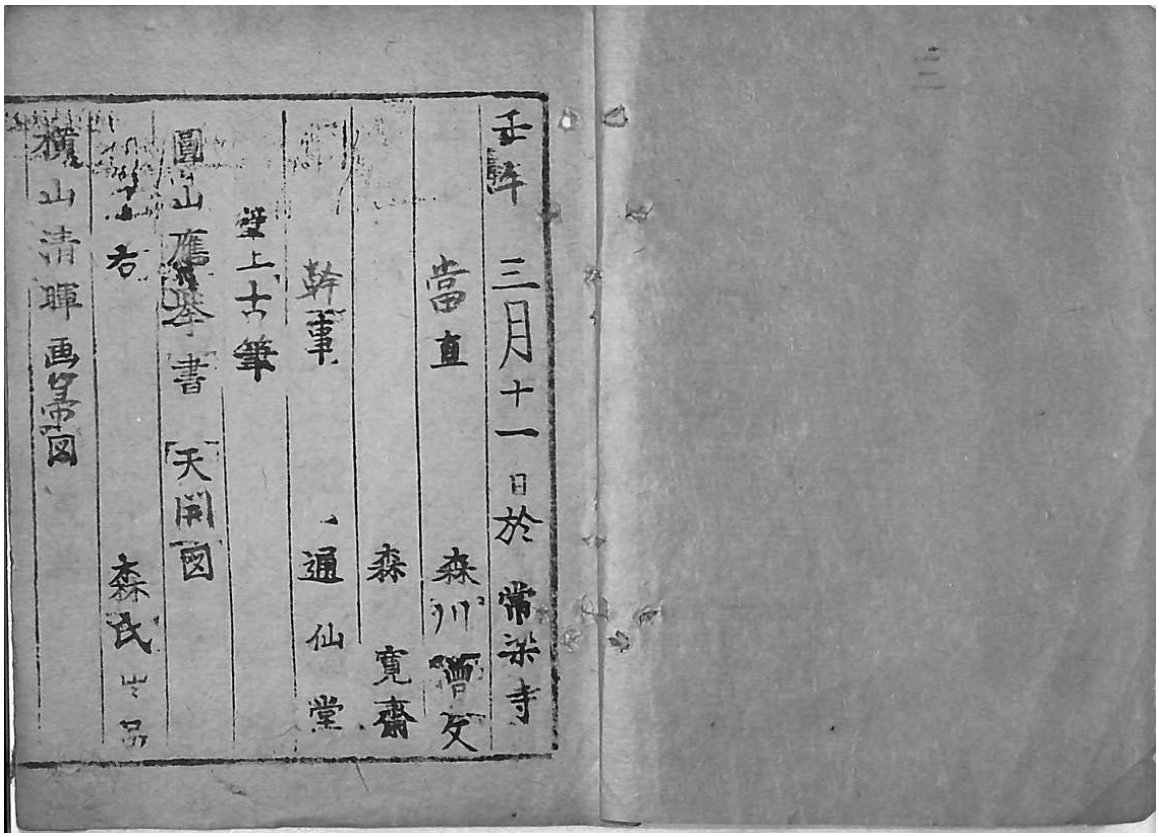
（資料二十七）



（資料二十八）

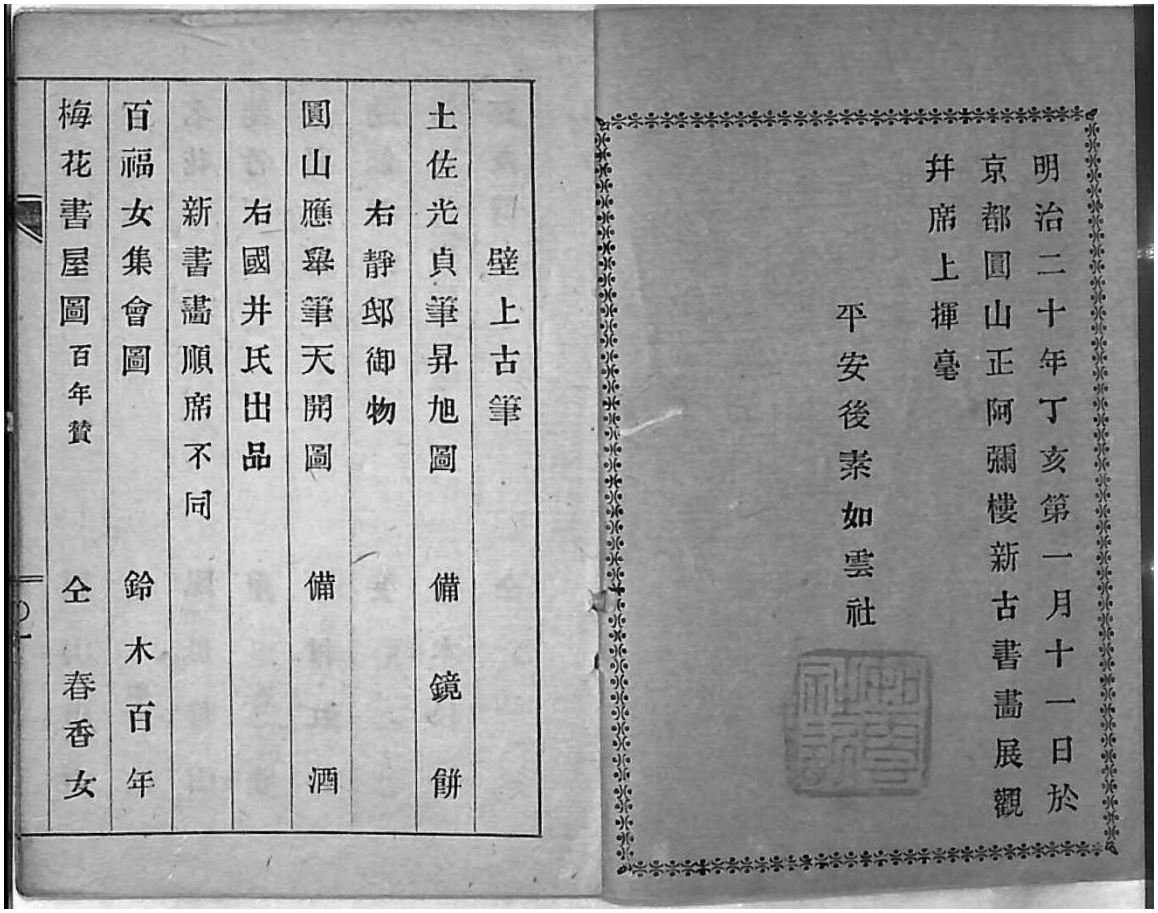


（資料二十九）



壬辰　三月十一日於　常泉寺
當直　森川曾文
森　寛齋
幹事　一通仙堂
壁上古筆
圓山應擧書　天開圖
右　森氏出品
横山清暉画常図

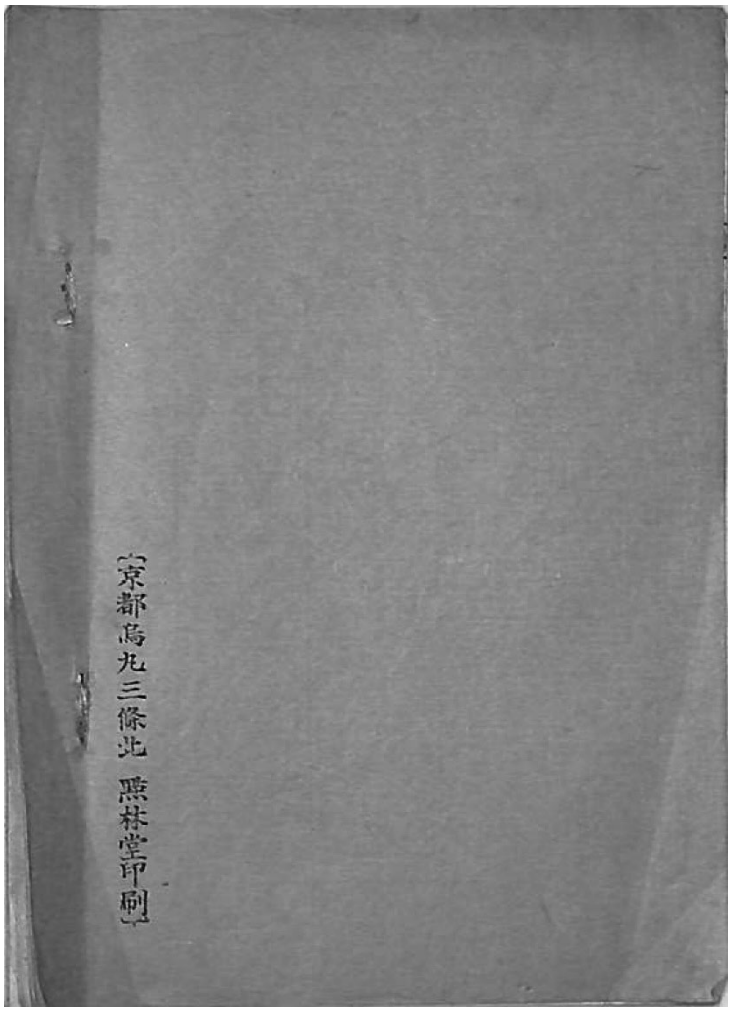
（図二）資料一　一頁目



明治二十年丁亥第一月十一日於
京都圓山正阿彌樓新古書畫展觀
并席上揮毫
平安後素如雲社

壁上古筆
土佐光貞筆昇旭圖　備鏡餅
右靜邸御物
圓山應擧筆天開圖　備酒
右國井氏出品
新書畫順席不同
百福女集會圖　鈴木百年
梅花書屋圖百年贊　全春香女

（図三）資料四　一頁目



（図四）資料四　裏表紙

（表一）「如雲社月並書画展観録」一覧【年月日の記載あり】

一	六頁	壬午三月十一日（壬午：明治十五年）
二	七頁	壬午四月十一
三	八頁	壬午十月十一日
四	三十頁	明治二十年丁亥第一月十一日
五	八頁	明治二十年九月十一日
六	七頁	明治二十年十一月十一日
七	六頁	明治二十年十二月十一日
八	三十一頁	明治二十一年一月十一日
九	十頁	明治二十一年二月十一日
十	八頁	明治二十一年六月十一年
十一	十頁	明治二十一年七月十一日
十二	十頁	明治二十三年九月十一日
十三	十頁	明治二十五年十月十一日
十四	十頁	明治二十五年十一月十一日
十五	十一頁	明治二十五年十二月十一日
十六	三十五頁	維時明治貳拾六年一月十一日
十七	二十九頁	維時明治廿七年一月十一日

（表二）「如雲社月並書画展観録」一覧【月日の記載あり・年の記載なし】

	月日	推測年	備考
十八　八頁	十□年六月十一日	明治十年代	
十九　十四頁	十一月十一日	明治十二年以降	土佐光文　居士追福（明治十二年十一月九日歿）
二十　十頁	十一月十一日	明治十三年以降 明治十七年以前	壁上古筆に長谷川玉峰（明治十二年十月歿） 今書画着順に木村泉石（明治十八年八月二十日歿）
二十一　七頁	年九月十一日	明治十七年以前	今書画着順に木村泉石（明治十八年八月二十日歿）
二十二　十頁	三月十日	明治十三年以降 明治十八年以前	壁上古筆に土佐光文（明治十二年十一月九日歿） 今書画着順に木村泉石（明治十八年八月二十日歿）
二十三　十頁	三月十一日	明治十三年以降 明治十八年以前	資料二十二とほぼ同じ内容
二十四　十頁	八月十一日	明治十八年以前	今書画着順に木村泉石（明治十八年八月二十日歿）
二十五　九頁	八月十一日	明治十八年以前	当直に木村泉石（明治十八年八月二十日歿）
二十六　十頁	八月十一日	明治十三年以降 明治十九年以前	壁上古書画に長谷川玉峰（明治十二年十月歿） 新書画着順記に国井応文（明治二十年三月二十九日歿）
二十七　十二頁	九月十一日	明治十八年 明治十九年	木村泉石遺墨（明治十八年八月二十日歿） 今書画着順に国井応文（明治二十年三月二十九日歿）
二十八　八頁	三月十一日	明治二十年以前	今書画着順に国井応文（明治二十年三月二十九日歿）
二十九　十二頁	二月十一日	明治十九年以降 明治二十四年以前	狩野永祥先生追福（明治十九年歿） 今書画着順に西谷淇水（明治二十四年十月二十一日歿）

（資料一）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

朱文方印「如雲社記」

三

【本文】

壬午　三月十一日於　常楽寺

當直　森川曽文

森　寛齋

幹事　通仙堂

壁上古筆

圓山應擧書　天開図

右　森氏出品

横山清暉画箒図

＊＊＊

塩川文麟画　衣汀芦花図

右　奥村氏蔵

今書画着順

大潮石図　杉原竹圃

顕書名録　天江　鐵臣　鳳陽

梅花　詩　西谷淇水

水墨山水図　鈴木松年

領百年翁書

＊＊＊

脩學院御庭図　長谷川玉純

山道夏景図　森川曽文

水中遊鯉図　中島有章

白蔵主図　仝

雪景山水　谷口蔦山

新竹雞図　山本桃楊

雁來紅　図　河合桃溪

蘆花五位鷺図　原　琴谷

＊＊＊

案山子図　西浦蘭谷

麦雲雀図　脇屋桃峰

鐘馗　遠藤光□

芦花　図　橋詰翠涯

觀世音図　山田松華

蓮　小禽図　今井文耕

青柳燕　図　福智文陽

水墨蘭亭曲水図　森　寛齋

＊＊＊

梅鹿図　仝

長国萩城図　仝

□雀図　木村泉石

老松　図　森　雄山

桃柳　図　長谷川保秀

神功皇后武内臣像　福中寛海

波上昇旭図　前川文嶺

＊＊＊

押小シ□　万成堂

寺男二条　奥村

幹支　トミ押　星田

蛸ヤクシ界　通仙堂

同　良則

（資料二）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

四

毎月十一日於　裏寺町常樂寺

今書画展觀錄

不論

晴□

朱文方印「如雲社記」

【本文】

壬午四月　十一　於　常楽寺

當直　九鬼南山

八木漱石

幹事　満　成堂

壁上古筆

般若心経　本寺□品

今書画着順

行書三行　西谷淇水

＊＊＊

□夜宴桃李園文　三井翠松

行書　□　雪香

山水□　谷口　山

牡丹□　伊勢　華

草書□□　林　雙橋

水中遊魚図　中島有章

蘆葉達广図　恭岳

行書　仝

＊＊＊

抱琴聴松図　安富篁山

西宮太神宮像　森川曽文

南極星図　早川耕文

中青楓　図　國井應文

左右競馬図　仝

本間孫四良図　福智文陽

芍藥花図　□川文譲

劉玄德青梅図　藤田文英

＊＊＊

多弓雛図　福中寛濤

桃花白木蓮図　遠藤速雄

春山水図　梅戸文□

□中觀世音図　森　寛齋

柳下杜若図　仝

瀑布山水図　仝

躑躅□　木村泉石

若松早図ワラヒ　森　雄山

＊＊＊

莱花戯蝶図　堀内雍王

松茸図　長谷川保秀

漁者　図　竹内　鳳

群禽図　宮城晴洲

浪華

雪中觀音図　狩野永祥

豊後日田

遊皇都□　原　一鷗

＊＊＊

加

西谷義顕　追善

右遺墨　西洋画

手向部

羅漢図　合作

右　名録

友章　恭岳　漱石　寛斉

淇水　雙橋題書

＊＊＊

茶席　亀　良則

机上焼香図　無名

右　壁上

押小シ□　万成堂

幹支　寺甲二条　奥　村

トミ押　陽星堂

蛸ヤクシ界　通仙堂

〃　良則

（資料三）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

毎月十一日

今書画展觀錄

平安後素如雲社

朱文方印「如雲社記」

【本文】

壬午十月十一日於　裏寺町常樂寺

當直　国井應文

中島有章

幹事　亀良則

壁上古筆

圓山應擧画

西宮太神宮像

秋景山水図

＊＊＊

秋草鵲鴿図

水墨栗猿図

小景飛瀑布山水図

右　伊谷氏出品

呉春画南極星図

右　奥村氏出品

今書画着順

草書三行　林　雙橋

＊＊＊

菊花図　并賛　山田□雲

春蘭図　□　仝　恭岳

草書三行　仝

寒江山水図　西谷淇水

雪中樓閣図　谷口　山

夘花子規図　竹内樓鳳

蓬莱山図　遠藤速雄

秋海棠小禽図　山本桃谷

＊＊＊　仝　枇楊

栗田祭図　原　琴谷

□小禽図　佐々木桃陰

墨竹図　双幅　田俊谷

月下吹笛図　本部有数

美人紅莱狩図　仝

草書一行　八木漱石

羅漢図　仝

思友人□　今井民逸

＊＊＊

手遊図　長谷川玉純

富貴天香図　森　寛齋

瀑布山水図　仝

松間樓閣　木村泉石

醉李白図　仝

苅田案山子図　森　雄山

□枝柿図　長谷川保秀

橐吾華図　西村　暁雲

＊＊＊

琴碁書画図　中島有章

紅楓小禽図　仝　恭岳

行書二行　仝

恵比須大黒天図　國井應文

牧童図　今井文耕

薔薇寿帯鳥図　福智文陽

菊華小禽図　小川文譲

松下遊童図　藤田文英

＊＊＊

伊勢松坂

白鷺図并書　堀西米仲

山口縣

秋景山水図并書　原田呉峯

水墨荷花図　仝

○茶席　□　亀　良則

壁上故岡嶋晴曠画　茸山図

奥村出品

＊＊＊

押小シ□　万成堂

幹叟　寺甲二条　奥　村

トミ押上　星　田

蛸クシ界　通仙堂

良則

（資料四）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

丁亥發會　新古書畫展觀錄

【見返し】

明治二十年丁亥第一月十一日於

京都圓山正阿彌樓新古書畫展觀

并席上揮毫

平安後素如雲社

朱文方印「如雲社記」

【本文】

壁上古筆

土佐光貞筆昇旭圖　備　鏡　餅

右靜邸御物

圓山應擧筆展開圖　備　酒

右國井氏出品

新書畫順席不同

百福女集會圖　鈴木百年

梅花書屋図 百年賛　仝　春香女

＊＊＊

草書四行　遠山盧山

仝　三行　仝　墨稼

名花十二客圖　風船母山

蘭竹圖　重　春塘

謝惠七菜詩　河村虹外

浦仙遺愛圖　仝

清正伐虎図　鈴木松年

三友圖　仝

＊＊＊

松竹梅圖　仝　万年

加賀篠原實盛血戰圖　仝　万仙

青綠山水圖　井上春林

百祥自來大字　遠藤茂平

春秀　仝　山東峻亭

大黑天圖　望月玉泉

大根圖　仝　玉溪

松竹梅圖　藤井玉洲

＊＊＊

赤鳥居圖　中島有章

飛狐圖　仝

墨梅圖　仝　泰岳

梅八丶鳥圖　原　在泉

雪中清水閣圖　森川曾文

梅月圖　西村耕文

梅圖　大江小魚

眞榊圖　星野眞直

＊＊＊

關羽像　前川文嶺

梅鶯圖　武藤祥雲

雪中枯木猿圖　仝

松竹梅圖　長谷川玉純

雨中梧桐圖　仝

四季花鳥圖　竹川友廣

壽星圖　藤田文英

孔雀長春花図　畑　仙齡

＊＊＊

松竹梅圖　柿木千壽

節季候圖　奥田秀年

松双鶴圖　藤井春溪

梅花牧童圖　仝　翠　雲

權兵衛種蒔圖　山田松華

梅林山水図　仝

大石氏興畫家僕圖　仝

瓶梅圖　仝

＊＊＊

右合作竹筍圖　齋藤松洲

池水浪靜圖　奥村雪堂

蓬萊山圖　山田松溪

寶船圖　川邊華擧

旭下蓬萊山圖　澄　月

萬歲圖　文　英

梅竹圖　阿部文年

梅鶯圖　内海煥堂

＊＊＊

老狸鼓腹圖　仝

芦鶴圖　柳　汀

追灘圖　秋田麟堂

椿雀圖　仝

寶船圖　馬淵艸友

雪中梅花圖　田畑華堂

椿雀圖　永井博雅

寶珠圖　仝

＊＊＊

若松福壽艸圖　田畑貴松

柳陰洗馬圖　別所靜堂

猪圖　山本輝山

寶珠圖　仝

紅梅圖　西村鶴齡

鐘馗圖　安田香園

雪中千家合作　河邊社中

玉合作　仝

＊＊＊

寛永太平踊圖　岡本春暉

松金鶏鳥圖　岩城清灌

吉祥天女圖　仝

釋尊圖　無障金剛宗匡

万歲圖　門　照濤

蜀柳鴛鴦圖　椹木豊文

郭子儀圖　淺田政一

梅下双鴛圖　三宅文暁

＊＊＊

竹双鶏圖　桃井月華

天保九如圖　横山曾立

春月嵐山圖　野村文擧

五律詩艸書　西谷淇水

艸書二行　西川靜渚

仝　藤瀬桃山
仝　堤　米春
仝　齋藤如雪
＊＊＊
仝　村瀬高石
仝　黒中汀洲
仝　廣瀬海山
仝　齋藤無適
仝　大倉淡泉
仝　八木仙掌女
仝　深見玉蕾
＊＊＊
仝　松岡花竹
仝　相塲閑雲
仝　谷口湖山
仝　富岡杏林
仝　櫻井東園
双鶏圖 書笠翁鶏賦　高谷簡堂
李商隠喜雪詩　橋本保宅
草書三行　藤原古溪
＊＊＊
仝　一行　久保田古山
仝　小林水風女
仝　組谷大學
仝　澤村弘民
仝　外村玉山女
仝　十合王山

仝　殿村江月女
洛西保津口雪景　森　寛齋
＊＊＊
墨梅圖　中路芦苗
梅鶴圖　西村桃嶽
鐘馗圖　小津花海
仝　西村暁雲
枇杷花圖
鐘馗圖　仝
松鶴圖　大隅松齋
艸書二行　矢野琴村
＊＊＊
鐘馗圖　山元春擧
仝　森　雄山
臥猪圖　仝
題右歌　八木漱石
題左歌　仝
松圖　山元春擧
梅鶏図　西村桃嶽
大津四ノ宮
＊＊＊
貴賤庶民快楽圖　清水東陽
伊勢山田
曾我兄弟夜討圖　磯邊百鱗
尾張名古屋
蹠梅蜜竹山水圖　芦原眉山
瀑布圖　奥野石蘭

裏白眞鶴圖　仝
密畫觀音像　鬼頭道恭
＊＊＊
仙山朝日圖　井村常山
四君子圖　檜　了介
歳寒三友圖　織田杏齋
秋林山水圖　深谷錦岳
伊勢物語圖　尾關東園
梅林山水圖　宮戸松齋
藤房卿正成對面圖　加藤高度
翁舞圖　小田切春江
＊＊＊
四君子圖　伊藤翠雲
神功皇后圖　柳田樵谷
蓬萊山圖　長谷川柳仙
盆踊圖　今泉梅溪
墨竹圖　河原木鶏
唐人物圖　太田仙草
蓬莱山圖　三輪青谷
盆栽圖　神保木石
＊＊＊
天女地藏採蓮圖　一東石如
并絹本一葉合作畫
山水圖　眉　山
若菜鶯圖　金　秋
海老櫛柿圖　石　蘭
〆縄圖　弘　道

春景山水圖　松　園
盆栽圖　木　石
老松圖　杏　齋
牡丹圖　翠　雲
眞鶴圖　道　恭
福壽艸圖　春　江
梅花圖　松　齋
題右歌　木原清香
已　上
古　筆
＊＊＊
大雅堂畫蓬萊山圖　雨森氏出品
土佐光成畫住吉神像　仝
謝蕪村横坡寒林山水圖　仝
圓山應擧畫猫蝶圖　仝
仝畫雪中山水圖　仝
雨森白水倣藍英雪景山水圖　仝
仝□英一蝶畫夷子大國天圖　仝
森徹山畫五行玉圖　森氏出品
＊＊＊
井上女書　仝
石田友汀畫水墨双鶏圖　林氏出品
應擧畫富士小昇旭圖　高谷氏出品
仝畫月前梅花　仝
柴田義董畫山伏圖　竜鱗堂出品
田中日華畫山兜菖蒲圖　仝
圓山應震蛭子神像　仝

白隱國師筆和歌　仝　本部有數　川邉華擧　上田大十堂
＊＊＊　星野眞直　佐々木鴻洲　黑田寛昇堂
應擧畫水中鮎圖　星野氏出品
呉月溪畫大根圖　仝　＊＊＊　原　在泉　前川文嶺　＊＊＊
長澤蘆雪畫花鳥圖　武藤氏出品　土佐光武　國井應文　幹事補助　鈴木龜吉
仝畫狗子圖　仝　山本桃谷　竹川友廣　瑞星堂　宮脇堂
鹽川文麟畫石蛇圖　仝　中島有章　柳瀬文敬　白鹿堂　良則
岸駒畫猛虎圖　仝　久保田米僊　田口梅嶺　凌雲堂　大坂　泉吉藏
狩野探幽齋画中壽老左右竹雀圖　平野氏出品　幸野楳嶺　八木漱石　龍章堂　名古屋　万祥堂
芦雪画花鳥圖　仝　田中幽峯　西村桃嶽　友楳堂　仝　青雲堂
＊＊＊　遠藤茂平　長谷川玉純　鱗光堂
松村景文畫日出富士山圖　仝　＊＊＊　野村文擧　山元春擧
應擧畫秋野伏猪　藤井氏出品　三井高保　大岩苔生
田中東洋畫漁夫圖　鱗光堂出品　鈴木玉船　箕田玉章
長谷川玉峰畫旭前梅花圖　仝　箕田玉蕭　山田松溪
岡本茂彦畫立雛圖　大隅氏出品　秦　寶英　伊東半竹
仝　畫舞樂圖　仝　鈴木万年　望月玉泉
原在仲畫壽老人圖　原　氏出品　森　寛齋
松村景文畫旭下遊龜圖　通仙堂出品
＊＊＊　＊＊＊　他府縣　幹事
小田海仙畫子房進履圖　黑田氏出品　伊勢　長谷川應章　奥村雲錦堂
東奥島懷遠畫美人圖　友梅堂出品　端舘紫川　藤村万成堂
天民士徹畫水墨山水圖　仝　磯部百鱗　木村通仙堂
大雅堂畫山水圖　仝　伊豫　松浦岸雪　松岡龍鱗堂
社　員　大塚壽昌堂
西谷淇水　森川曾文

【裏表紙】
〔京都烏丸三條北　黙林堂印刷〕

（資料五）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

□

月並展観書画録

朱文方印「如雲社記」

【本文】

明治二十年

九月十一日　於裏寺町妙心寺

古書画

駒井孝禮画魚蓝観世音図　右　蟠龍窟出品

珠義章画秋景嵐山図

横山華山画雲中壽老入図

森　徹山画水墨牛図

＊＊＊

岸　駒　画芦雀図　右　奥村氏出品

圓山應立画菊花図

前川五嶺画踊図　右　隣光堂出品

新書画着順記

山水図　鈴木春□女

並題古人詩　鈴木百年

＊＊＊

雲中稲荷明神図　鈴木松年

大瀑布図　望月玉泉

月下砧図　仝　玉溪

旭下真鶴図　森川曽文

仲国趣嵯峨野図　本部有数

草間撰虫図　原　在泉

本月日食図　前川文嶺

晩秋游鯉図　水谷玉水

＊＊＊

月前芦間鴨図　仝

魚篭映月図　仝

折枝菊花図　大江小魚

泉山還御図　長谷川玉純

西明寺雪中図　椹木豊文

月下秋草図　桃井月華

卒都婆小町図　三宅文暁

楓下孤狼図　西村耕文

＊＊＊

月下杉樹図　藤井曽岳

水墨菊花図　小幡文華

東方朔図　服部清文

童子散学校図　友田曽年

役小□出家図　門　照濤

松林山水図　今尾文儁

小關越□行図　横山曽立

芦雁図　山田松溪

＊＊＊

詠蟷螂発句　伴一潭

昔噺尉姥図　福智秀溪

□蓝觀音大士像　山本桃陽

柳下洗馬図　竹川友廣

李白瀑布詩長編　八木漱石

篆書　双幅　仝

菊童子図　岩井藍水

秋草図　森　雄山

＊＊＊

墨梅図　奥谷秋石

春景山水図　森　寛齋

大黒壽老ス□ウ図　仝

大津

竹林山水図　清水東陽

當　直

前川文嶺

八木應之

＊＊＊

鈴木玉舩

幹　吏

寺町　壽昌堂

茶　席

亀　艮則

壁　上

香川景樹歌永射□　右　奥村氏出品

（資料六）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

十一

月並展觀書画錄

朱文方印「如雲社記」

【本文】

明治二十年

十一月十一日於裏寺町妙心寺

壁上古書画

圓山應挙画牧童図　　右　森氏出品

松村景文画秋蘭図

伊川院法印画　太公望図　　右　隣光堂出品

＊＊＊

横山晴暉画李白図

蓮月尼詠□楓歌　　右　奥村氏出品

新書画着順記

夏節山水図　谷口靄山

老松牡丹孔雀図　内海吉堂

濱主鵙緑　図　森川曽文

春江漁夫図　鈴木松年

＊＊＊

秋山撫哥図　仝

秋景山水図　女史　鈴木春香

櫻花鶯図　原　在泉

老松山茶花図　田中松齋

舞子図　山田松溪

菊花水禽図　仝

雪中幽星図　齋藤松洲

木槿花図　大江小魚

＊＊＊

能狂言狸腹鼓図　本部有数

秋野孤図　前川文嶺

秋山撫父図　鈴木松栁

天知帝御製秋田図　西村耕文

實盛菊川図　桃井月華

張良偽狂図　浅田政二

二仙人　図　山本暉山

黄盧鳩図　揖木豊文

＊＊＊

菊花雀図　服部清文

芦雁図　友田曽年

羅漢像　横井文仙

詩意

漁者図　横山曽岳

花篭車図　長谷川玉純

薔薇花狗子図　大隅松齋

波上飛雀図　仝

＊＊＊

達广大師像　女史　倉治春江

紅白萩花図　山元春擧

折枝朝　図　未村清渓

詠立田川宇治川歌　八木漱石

仝　図　森　雄山

紅梅水禽図　仝

山茶花群鳥図　竹川友廣

雪中松雙鹿図　森　寛齋

＊＊＊

當直

在東京　野村文擧

箕田玉章

国井應陽

幹事

今出川チエ光イン　黒田寛昇堂

茶席

亀　良則

＊＊＊

（資料七）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

十二

月並展觀書画錄

朱文方印「如雲社記」

【本文】

明治二十年

十二月十一日於裏寺町妙心寺

壁上古書画

謝春星画樹上鳶図

右　平野氏出品

岡本豊彦画梅林図

田中納言画寶珠図

塩川文麟画梅岡本常彦画竹

＊＊＊

岡本亮彦画松図　合作

春七種図合作　蘆洲　芦鳳

文麟〇來章　晴暉　擧秀　日華

右　奥村氏出品

新書画着順記

雪溪素句図　鈴木松年

松雲仙境図　仝

青緑山水図　内海吉堂

＊＊＊

冬嶺山水図　女史　鈴木春香

美女子図　仝　上村松園

秋□夕月図　仝　倉治春江

詠落葉発句　伴　一潭

鐘馗追鬼図　田中幽峰

南極星図　長尾周峯

山茶花鴛鴦図　田伏秀溪

杷枇花　仝図　友田曽年

＊＊＊

羅□王図　長谷川玉純

□白鷺図　門　照濤

琴高仙人図　三木揮峰

明石浦秋月図　桃井月華

牡丹雀図　早瀬蘭谷

宇治名所　合作

玉純　三宅文暁　西村耕文

照涛　今尾文□

＊＊＊

雪中鷹狩図　本部有数

秋景箕面山瀑布図　山元春擧

同図　森　雄山

嵐山図　仝

詠右図歌　八木漱石

詠□　仝

仝　図　竹川友廣

折枝栗柿図　未村清渓

＊＊＊

仝白梅花図　徳力幽雪

枯木□鳥図　浅田政一

林和靖観歸鶴図　森　寛齋

大津

寒嶺山水図　清水東陽

當　直

山本桃谷

大岩苔生

（資料八）
＊＊＊は頁が変わることを示す。
□は判読できない文字を示す。
【表紙】
今書畫展觀錄
【見返し】
明治二十一年
今古書畫展觀錄
平安　後素如雲社
【本文】
明治二十一年一月十一日於圓山
正阿彌左阿彌両樓
發　會
新古書畫展觀幷揮毫
壁上古筆
土佐光貞筆昇旭圖　靜邸御物
右備鏡餅及本府博覧會賞牌
圓山應擧筆展開圖　國井氏藏
備神酒
＊＊＊
森徹山筆五行玉乃圖　森氏藏
新書畫席順不同
蓬島長春圖　谷口藹山
松林山水圖　森本成鄕
雨中山水圖　鈴木百年
梅溪棹丹圖百年讃　仝　春香女
歳旦七絶詩　遠山廬山

仝
雲上壽老人圖
＊＊＊
雪埋松圖
羅漢圖
折枝梅花圖
落花飛燕圖
雪中山水圖
歳旦七絶詩
海邊双鶴圖
梅花書屋圖
裏見瀧雪景圖
＊＊＊
寒月千鳥圖
茨螢圖
松鶴圖
蓬萊仙閣圖
旭日圖幷鶴歌
小朝拜圖
霞之歌
李斯感鼠圖
猫眠梅花下圖
＊＊＊
雪埋松圖
仝　圖
松竹梅圖
美婦人圖

仝　墨稼
鈴木松年
仝
仝
鈴木万年
仝
鈴木松仙
西谷淇水
望月玉泉
森川曾文
原　在泉
岸　竹堂
仝
本部有數
榊原長敏
仝
仝　文翠
仝　鎭子
畑　仙嶺
田畑鶴堂
田畑龜堂
齋藤松洲
田中松齋
上村松園女

柳陰漁夫圖
柳驚圖
柳陰漁夫圖
竹林山水圖
桃林山水圖
＊＊＊
鐘馗圖
住吉濱夜景圖
旭下松竹梅圖
和合長命一行書
梁上走鼠圖
山家寒景圖
夏日閑居圖
松鶴延齡圖
松風在琴圖
夷子大黑圖
＊＊＊
雪中芦厂圖
蛭子神圖
江上梅花圖
□濵曉景圖
松花伴鶴圖
梅花書屋圖
松花仙境圖
雪山旅行圖
＊＊＊
木蓮花緋鸚哥圖

岡本松山
田伏秀溪
天野松雲
矢野梅溪
仝
淺野鶴聲
齋内太年
村松鶴齋
山田松華
仝
仝
淺岡劍岳
瀧山松琴
宮地南峯
仝
佐野孤山
田中春山
仝
大谷靜處
兼田義路
仝
吉田梅外
尾崎片雲
谷口東院

蓬萊山圖
雪埋松圖
菜花狗子圖
雪埋松圖
松鹿圖
不老長春圖
儈雪舟活畫圖
能舞猩々圖
＊＊＊
隆盛月照辭世圖
張良取履圖
高砂圖
月下漁舟圖
双鶴圖
能舞翁圖
黄帝姫圖
濵主賜祿圖
雪埋松圖
＊＊＊
芦間双鴨圖
猿引發句
二行書
詠午砲歌
春思七絶双幅
蓬萊山圖
萬歳舞圖
寶珠圖

前川文嶺
仝
横井文仙
武藤祥雲
仝
内海吉堂
長谷川玉純
淺田政一
横山曾立
三宅文曉
棋木豐文
門　照濤
西村耕文
友田曾年
桃井月華
服部清文
藤井玉洲
仝　玉英
伴　一潭
遠藤茂平
仝
山東峻亭
蒲生鳩峯
河邊華擧
山本暉山

梅花圖　仝
＊＊＊
雪埋松圖　平塚玉鱗
槌稲圖　八木松雲
猛虎圖　秋田鱗堂
棧道雪曉圖　田中幽峯
雪埋松圖　長尾周峯
鎌田先生道統詩　木村玄理
雪埋松圖　山本桃陽
節分圖　中島有章
雪中松鷹圖　仝　泰岳
＊＊＊
雪中紅梅圖　浦野梅苑
壽老人圖　川崎文友
尉姥圖　仝
蓬萊山圖　安達文石
辨慶圖　德見友仙
菊雀圖　大江小魚
大旭圖　竹川友廣
羅浮梅仙女圖　國井應陽
雪埋松圖　福智秀溪
＊＊＊
官女圖　仝
新年詩隸書　岩本金城
月夜嵐山圖　三井高縱
高雄圖　仝
月輪殿下本廟圖　星野蟬水

雪埋松和歌　鈴木玉船　同　猪里潛思　＊＊＊
雪中和婦人圖　箕田玉蕭　同　市埜履福　月下羅浮梅仙女圖　森　寛齋
蓬萊山圖　仝　同　寺村靜好　鼠引松圖　仝
明孫一元詩　橋本秋蜩　同　十合王山　旭日圖　仝
＊＊＊　同　大津
三行書　堤　米春　同　左鞍堪靜　紅梅双鴛圖　清水東陽
同　山内保眞　同　田中敬山　名古屋
同　上野敬勝　同　松翠　眞鶴圖　奥村石蘭
同　相塲閑雲　＊＊＊　柳山水圖　常山
同　竹岡心齊　鶴之圖　森　愛象　水邊若松圖　宮戸松齋
同　西村退省　題右歌　八木漱石　＊＊＊
同　井上德暉　以手形作龜畫　梅花園歌　仝　雪中松鶯圖　木村金秋
同　廣岡和適　隸書二行　仝　折枝梅花圖　伏見雪竹
同　深見玉蕾　題左歌　仝　同縣在東京
雪埋松圖　山元春擧　旭前老松圖　佐々木　介堂
仝圖　仝　鮭圖　三輪青谷
仝　森　雄山　小濵
＊＊＊　根引松圖　安倍華仙
雪埋松圖　岩井藍水　古筆掛寶暦以來
仝　女史　倉治春江　圓山應擧畫墨梅之圖　三井氏藏
仝　神服遊仙　＊＊＊
仝　末村清蹊　仝三女子圖穆如齋誌　仝
仝　森川玉蒲　仝蓬萊山之圖　伊谷氏藏
仝　大隅松齋　仝式三番叟　三幅　仝
根引松圖　仝　仝中壽老愛鹿左右鶴龜圖　仝
墨梅圖　德力幽雪　仝若松鶯圖　仝
西村曉雲　仝寒月千鳥圖　仝

駒井源琦畫老松双鶴圖　仝
伊藤若冲畫牡丹白鷴圖　竹影堂藏
横山清暉畫□萊山圖　仝
＊＊＊
春七艸圖合作　吳春　景文　竹影堂藏
義董　清暉　來章　竹溪　豐彦
謝蕪村畫不二山圖　雨森氏藏
圓山應舉畫柳白鷺圖　仝
住吉弘定畫義家名古會關圖　仝
浮田一蕙齋畫春草鶉圖　仝
冷泉爲恭畫中公任卿圖　仝
雨森白水畫蘭亭曲水圖　仝
同謝女解圍圖　仝
＊＊＊
古筆双虎圖　平野氏藏
田中日華繪表具雪月花圖　仝
森徹山畫玉鼠圖　蒲生氏藏
岸駒畫旭圖　仝
豐岡治賢卿畫墨梅圖　仝
蒲生竹山畫玉槌鼠圖　仝
谷文晁畫梅月圖　井上氏藏
吳月溪畫壽老人圖　仝
松村景文畫松竹梅圖　石川氏藏
＊＊＊
横山清暉畫壽老人圖　石川氏藏
圓山主水畫水墨雪中山水圓　星野氏藏
田村舉秀畫幸艸圖　讀　松田直兄　仝

中村竹溪畫天保九如圖　眞名井氏藏
岡村酌中書如岡說　仝
河村文鳳畫關羽張飛圖　武藤氏藏
松村景文畫湖邊圖加茂季鷹歌
藤井氏藏
白井直賢畫鼠早蕨圖　森　氏藏
中島來章畫槌鼠圖　仝
＊＊＊
同旭下野馬圖　仝
松村景文畫玉鼠圖　森氏出品
三福神合作來章連山清暉　万成堂藏
岸連山畫范蠡棹五湖圖　仝
三福神合作　玉峯清暉百年　仝
讃右書　賴支峰　宮原易安　神山鳳陽
中島來章畫栗四十雀圖　仝
双鶴合作　狩野永岳　仝洞玉
鱗光堂藏
中島來章畫雪梅双鴛圖　仝
＊＊＊
柴田義董畫山伏圖　龍麟堂藏
木下應受畫松下游鯉圖　仝
中島來章畫卷二　佐々木氏藏
木村泉石畫海邊双鶴圖　木村氏藏
森一鳳畫海老圖　森氏藏
岡本豐彦畫夏景山水圖　大隅氏藏
内藤素文畫鼠年禮圖　末村氏藏
圓山應舉畫山水圖　通仙堂藏

松村景文畫十日蛭子圖　仝
＊＊＊
松川龍椿畫玉昆布圖　仝
摩島松南畫竹圖　仝
中林竹洞圖夏雨初晴圖　友梅堂藏
森徹山畫双龜圖　季鷹賛　仝
合作　岩靈芝　岸駒　景文　奥村氏藏
長谷川玉峯畫中八坂神社圖　仝
村瀬双石畫槌鼠圖　仝
渡邊南岳圖遊野良圖　胴脉賛　仝
蜀山人歌　仝
＊＊＊
社　員
西谷淇水　八木漱石
原　在泉　川邊華擧
前川文嶺　本部有數
山本桃谷　土佐光武
森川曾文　長谷川玉純
星野蟬水　佐々木鴻洲
中島有章　田口楳嶺
竹川友廣　鈴木玉船
＊＊＊
望月玉泉　柳瀬文敬
遠藤茂平　久保田米仙
大岩苔生　箕田玉蕭
田中幽峰　箕田玉章
山田松溪　伊東半竹

三井高縦　野村文擧
鈴木万年　山元春擧
國井應陽　西村桃嶽
伴　一澤　内海吉堂
＊＊＊
森　寛齋
幹　事
奥村雲錦堂　黑田寛昇堂
木村通仙堂　藤村萬成堂
大塚壽昌堂　長谷川友梅楳堂
西村白鹿堂　野口鱗光堂
星田瑞星堂　佐々木身延堂
上田大十堂　宮脇賣扇菴
松岡龍鱗堂　龜　良　則
＊＊＊
他府縣
社　員　幹　事
伊勢　長谷川應章　大坂　泉　吉　藏
仝　端舘紫川　名古屋萬　祥　堂
仝　磯部百鱗　仝　青　雲　堂
伊豫　松浦岸雪
近江　筧　有隣
後素如雲社
朱文方印「如雲社記」
＊＊＊

（資料九）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

三

月並展觀書画錄

朱文方印「如雲社記」

【本文】

明治二十一年

二月十一日於・裏寺町妙心寺

壁上古書画

渡辺南岳画桃花図

森義章画春景嵐山図　右藤井氏出品

岡本茂彦画折枝梅花玉葦図

仝青梅図

＊＊＊

田中日華画松竹梅図　右　奥村氏出品

謝春星画山水図　右　森　氏出品

圓山應擧画南極星図　右　森川氏出品

圓山應擧画山水図

同　若松群雀図

＊＊＊

右　芝田氏出品

應擧画四條河原納涼図　神戸　光村氏出品

岡本豊彦画□枝栗図

仝　檜樹　図　右　長谷川氏出品

應擧画秋草図

應瑞画芦雁図

＊＊＊

應愛画蓬來山図

應震画藤娘図　右　星野氏出品

前川五嶺画　大津繪涅槃像　友梅堂出品

嵐山図合作　呉春景文義董豊彦

仝　二見浦図　鱗光堂出品

＊＊＊

伊藤若中画布袋和尚図

中島來章画月下狸図　右　井上氏出品

應挙画雪中山水図　右　原氏出品

應挙画□猿図　右　西村白鹿堂出品

新書画着順記

＊＊＊

寿老人図図（ママ）　鈴木松年

大梅樹図　三井竹園

龍月　孤捕鴨図　今尾景年

多弓雛図　森川曽文

中秋梅月詩行書　遠山盧山

春景山水図　女史　鈴木春香

天満宮像　藤井春渓

梅花小禽図　鈴木□亭

＊＊＊

行書三行　林　双橋

詠梅月発句　伴　一潭

花下群魚図　三宅文暁

月前落花図　竹川友廣

寶盡群□図　河辺華擧

源氏浮舩図　長谷川玉純

梅林山水図　服部清文

前赤壁図　浅田政二

＊＊＊

樓閣山水図　椹木豊文

月下樓閣図　友田曽年

住吉　図　大江小魚

柳鶯鳥図　中島泰岳

桃花図　德力幽雪

仝　未村清溪

仝　山元春擧

墨竹　並歌　八木漱石

＊＊＊

仝　図　森　雄山

寒牡丹雀図　女史倉治春江

官公幼年□□図　榊原文翠

社頭梅花図　仝

題石図歌　岡　静子

風雪三顧図　森　寛斎

伊与大洲

題壽老人図詩　□□□萬澤珎翁

＊＊＊

當直

星野蝉水

長谷川玉純

河辺華擧

茶席

亀　良則

（資料十）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

六

月並展觀書画錄

朱文方印「如雲社記」

【本文】

明治二十一年

六月十一日於・裏寺町妙心寺

壁上古書画

呉景文画大神宮御祓図

曽我蕭白画漁夫図

右　河關氏出品

長澤芦雪画桃柳雙雞図

右　山元氏出品

＊＊＊

景文画蓬來山図

右　奥村氏出品

圓山應震画　狙公図

右　万成堂出品

新書画着順記

墨梅図　重　春塘

秋分花卉図　内海吉堂

青楓山水図　鈴木松年

＊＊＊

松竹梅山水図　谷口藹山

夏景山水図　女史　鈴木春香

水中遊鯉図　山本雪堂

年中行叟十二枚　神原文翠

鎧　図　仝

茄子図　仝

詠右画哥　仝　槇子

山水図　相良星峯

＊＊＊

松竹梅図　山本桃谷

養老孝子図　原　在泉

古代美女子図　山本軍山

鯉魚　図　仝

丹波道マンボーウ図　長谷川玉純

松樹兎図　浅田政一

寿老人図　椹木豊文

長春花白鷴図　三宅文暁

＊＊＊

柳□図　中島有章

月下杜□図　同　泰岳

石竹花雙鷄図　大平梅仙

擣衣図　齋藤松洲

ツルメス図　青木文行

芦汀游魚図　大江小魚

古知谷偶成□句　伴　一潭

花菖蒲図　竹川友廣

＊＊＊

猛虎図　山田松溪

戸無瀬滝図　仝

渡辺□図　友田曽年

秋草□鴿図　山元春擧

青梅雀図　神服遊仙

杜若燕図　未村清溪

水墨蒲萄図　森　雄山

折枝桃實図　森嶋春撫

＊＊＊

早苗蛍　図　倉治春江女

雪中嵐山図　森寛　斎

東方朔図　八木漱石

當直

山本桃谷

□藤玉堂

佐丶木鴻洲

茶席　良則

＊＊＊

幹事

宮脇賣扇菴

藤村萬成堂

追加

詠□夜月哥　榊原文翠

（資料十一）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

七

月並展觀書画錄

朱文方印「如雲社記」

【本文】

明治二十一年

七月十一日於裏寺町妙心寺

壁上古跡

唐□馬上人物図　法眼川叟画白鷹図

狩野松栄画鵰□図　右　友梅堂出品

右　中路氏出品

木下應□画蓬來山図　竹雲画霊芝図

田中日華丶福女図　國井應文画盆栽図

＊＊＊

日月野夜山水図　右　八木氏出品

森　徹山画富士山図

右　奥村氏出品

□　廣成丶能舞熊坂図

□福女圖

右　福智氏出品

呉□文画三保不二図

長澤芦雪画梅花雀図

＊＊＊

□□山人画月下梅図

新書画着順記

蓬萊山図　国分文友

＊＊＊

雨中坊友詩行書　遠山盧山

樹陰魚夫図　鈴木松年

柳堤山水図　女史　鈴木春香

雨中蓮図　中島有章

十二月□図　仝

詠右画哥　梅　華　園

詠竹夫人發句　伴　一潭

雨中角楸図　椹木豊文

＊＊＊

梅林山水図　山本雪堂

雪中竹雀図　服部清文

梅月羅ま人図　長谷川玉純

月下矢竹図　友田曽年

弁芝牛若九図　大平梅仙

夏景山水図　田畑雀堂

緑柳宿鳶図　奥村雪堂

近世風童子遊図　福智秀溪

＊＊＊

仝書生図　仝

女子乗車行図　仝　其田玉章

龍虎図　榊原文翠　森　公粛

奇画　歌　仝　茶　席

觀音大士像　久松文杉　幹　事

弁内史図　女史　青木文行　友梅堂

竹間孔雀図　山田松溪

白鵰図　仝　加

＊＊＊

山水図　仝　中島氏門人

山鉾図　奥村又四良

賛右図　八木應之　＊＊＊

松鶴歌　仝　加藤景喜追福

仝　画　森　雄山　遺墨　茶器図

青梅實図　中路芦笛

牽牛花図　德力幽雪

青梅戯雀図　山元春舉

＊＊＊

波涛飛鯛図　倉治春江女

柳下蕣子花図　未村清溪

折枝枇杷図　森嶋春樵

野孤図　竹川友廣

ツルメス図　中島有章

詠右　哥　八木漱石

蓬來仙宮図　森　寛齋

當　直

＊＊＊

田中幽峰

（資料十二）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

朱文方印「長谷川斎
玉純所特
図書之□」

九

月並展観録

朱文方印「如雲社記」

【本文】

明治二十三年九月十一日

於　裏寺町妙心寺

古筆

圓山應擧画芙蓉花小禽図　右　岩井氏出品

仝山水図　右　伊谷氏出品

中島來章画夏景山水図

仝月下宇治橋図

＊＊＊

應震画恵比ス神像玄々齋賛辞　右　中島氏出品

圓山仙嶺画猛虎図　右　森島氏出品

呉春　景文画松竹梅図　合作

日根對山丶蘭竹図

仝　松樹水仙花図

＊＊＊　右　岩井氏出品

岸　連山画旭崔図　右　宮脇氏出品

來章丶富嶽図　右　奥村氏出品

呉景文丶草中蛍火図　右　岩井氏出品

華山丶寶珠図　右　中井氏出品

＊＊＊

葭溪丶汝□図

新書画着順記

清水寺雪景図　森川曽文

幽居見月図　鈴木松年

山間満月図　仝　松仙

草書一行　遠山廬山

月下竿図　前川文嶺

＊＊＊

菊花鶉図　仝

月下□衣図　淺田崔□

枯蓮黄セキレイ図　澤渡乾齋

山水図　清水東陽

草書一行　三□雲眠

陶淵明図　岩井藍水

秋草落雁図　奥谷秋石

宇　櫻谷図　原　在泉

＊＊＊

東方朔図　山本雪堂

黄蜀癸四十雀図　合場文陵

柿鴉図　杉本柏嶺

湖枝花戯蝶図　女史　星野冷香

蓮花白鷺図　中島華鳳

大潮石菊花図　内海吉堂

秋景嵐山図　山田松溪

牽牛花図　榊原長敏

維摩居士像　女史　冨永文□

＊＊＊

大鷲追鶴図　大幅　三井南山

水墨藤華図　山元春擧

秋草図　仝

詠右図　歌　八木應之

薄　図　森島春樵

墨梅図　大藪竹影

白蔵主図　森　雄山

＊＊＊

糸瓜図　本多慶雲

芭蕉狗子図　森　寛齋

都南

寿老人愛亀図　服部麦翁

三　星　図　仝

隷書　仝

浪華

秋海棠四十雀図　堀内鴻□

＊＊＊

月下桂花図　仝

東京

群鷺図　三□青谷

當直

野見宿称図　河邉華擧

○　中島有章

○　岩井藍水

茶席　良則

＊＊＊

壁上

豊公按摩柴田図

（資料十三）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

辰十月

書画展観録

【本文】

明治二十五年十月十一日

京都裏寺町於妙心寺　書画會

古筆

長澤芦雪画水邊童子戯□図

森徹山画崔亀図　崔齋書

右　森島氏出品

長谷川玉峰画　元紀図

右　同家出品

＊＊＊

狩野深幽齋画寿老人図

松村氏出品

蓬來仙山図　無名　賛僧覚寶

右　中井氏出品

村山松根歌　短冊　三葉

近藤氏出品

無名　画巻

中井氏出品

＊＊＊

新書画録

十歳図　合作

吉堂　在泉　曽文　文嶺

友廣　玉泉　寛齋

米點山水図　谷口藹山

秋景田家図　鈴木松年

日車花雞図　今尾景年

田家秋露図　澤渡乾齋

＊＊＊

今美女史図　竹川友廣

羅漢像　真壁捿華

孟母車居図　川越又峰

海中周魚図　長谷川契華

秋山山水図　仝

蓬來山図　寶田満黄

觀音大士図　晴

秋草図　女史　星野文英

＊＊＊

題十二月図

福壽図　伊藤王鱗

杉間梅花図　杉本成純

浅瀬登鮎図　石田香年

□□青楓図　増田香文

若稲蛍図　大西王香

青柳白鷺図　久保井圭純

雁來紅図　西田王華

＊＊＊

芭蕉　図　上原玉樹

月下苅田図　長谷川□華

水上游馬図　禾□蘭溪

雨中梧桐図　髙田香渓

雪中老松図　長谷川玉粹

○

菊花詩行書　後藤德山

行書　杉浦□雨

＊＊＊

水月猿図　森　雄山

濤衣　図　仝

秋景音羽山図　仝

右詠二図　歌　八木應之

草書三行　千秋笙嵓

楪　図　疋田静湖

牽牛花図　岡本竹亭

松樹猿図　中岡南滄

＊＊＊

菊花図　大規清翠

羅漢像　窠本文洲

月夜竹図　戸川碧水

白菊花図　松井耕雪

童子游図　巖嶋虹石

藤花図　本多慶雲

松菊図　奥谷秋石

秋林暁図　森嶋春□

＊＊＊

布袋和尚図　近藤修凞

梅實図　村松龍潮

深山積雪図　山元春挙

月并詠案山子発句　伴　一潭

草書二行　遠山廬山

梅鶯図　森　寛齋

當直

竹川友廣

＊＊＊

長谷川玉純

都路華香

國井應陽

幹叟　星田瑞星堂

茶席　良則

壁上

南陽書　百福

○

（資料十四）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

十一

月並展観録

【本文】

明治二十五年十一月十一日

京都裏寺町於妙心寺　書画會

古筆

大原呑舟画楊貴妃愛牡丹図

岸駒　画田父引牛図

岸漣山　画猛虎図

酒井　公田花卉図

右　森島氏出品

＊＊＊

月□画　白蔵主図

右　徳力氏出品

八木喜峰画秋林□父図

長谷川玉峯画蓬來山図

岸岱丶春秋花鳥図　雙幅

横山華山丶　仝

春景嵐山図秋景高雄山図

樋口氏出品

＊＊＊

道明筆水墨白蓮白鷺図

村松氏出品

新書画録

行書二行　遠山廬山

秋景山水　重　春塘

舜旭稲穂図　前川文嶺

蓬來仙山図　森川曽文

蓬萊図　土佐光武

＊＊＊

花鳥図　内海吉堂

菊花戯蝶図　仝

小春・秋山・発句二　伴　一潭

詠芳野山歌　榊原文翠

如意□春色　仝

蚯蚓　仝

鷹追小鳥図　岡本竹亭

籔橘図　仝

＊＊＊

行書二行　遠山三橋

旭下松窪図　羽田文石

櫻花群鳥図　山田松溪

寒山群猿図　三宅呉暁

芳野山春景図　鶴松　翁

雪　竹　図　井上甘泉

梅菊　図　双幅　仝

瀑　布　図　仝

＊＊＊

春郊牧笛図　鈴木松仙

蓬萊山図　仝

観世音像　河村紅外

仝雲中図　仝

小原女図　長谷川玉純

橋弁慶図　仝　玉粹

柿　鳥図　西田王華

龍安寺寒林図　久保井圭純

＊＊＊

菊花図　長谷川□華

雪景清水寺圖　杉本成純

能舞翁図　上原王樹

旭下松　窪図　奥谷秋石

百合花図　本多慶雲

童子採栗図　巖嶋虹石

秋草菊花図　戸川碧水

秋草鶉図　前川孝嶺

＊＊＊

茶席　良則

壁上

羅漢　図　森本氏出品

幹事

西村白鹿堂

○

（資料十五）
＊＊＊は頁が変わることを示す。
□は判読できない文字を示す。
【表紙】
十二月会
月並展観録
【本文】
明治二十五年十二月十一日
京都裏寺町於妙心寺　書画會
古筆
圓山應擧画　水墨芭蕉図
呉春書萬歳并若松図
仝景文、寶舟図
右　西村白鹿堂出品
古画赤童子図
＊＊＊
原　氏出品
謝春星画溪山書屋図
森　氏出品
南渓、蓮花図
俊長、松樹図□書
村松氏出品
景文、雀図
小澤氏出品
＊＊＊
竹葉画稲鶉図
小田氏出品

新書画録

能舞道成寺図　森川曽文
旭下丹頂鶴図　長谷川玉純
寿老人図　鈴木松年
行書二行　遠山廬山
仝　三行書　仝　三橋
＊＊＊
都若王寺図　竹内棲鳳
山茶花　雀図　伊藤玉璘
三保冨士図　白神玉園
嵐山秋景図　廣濵玉濤
千代女図　杉本成純
大井川筏シ図　仝
牡丹　図　石田香年
牧　童図　上原王樹
加茂競馬図　仝
＊＊＊
早苗蛍図　女史　西田玉華
雪中田家図　仝
櫻花雀　図　長谷川　華
菊花図　仝
櫻花図　藤田好月
長春花雀図　大西王香
紅楓小禽図　髙田香溪
＊＊＊
宇治平等院図　久保井圭純
深山瀑布図　仝
游鹿図　仝
雪中南天狗子図　中岡南倉
雪中水仙黄島図　羽田文石
雪中山水図　前川考嶺
山水図　澤渡乾齋
勝尾寺秋景図　伊木西苑
＊＊＊
秋景箕面山図　孤　松
仝瀑布図　壽　仙
仝　図　泰　山
梅花福壽草図　奥谷秋石
梅花詩　行書　仝
古木白鷹図　本多慶雲
ガマ仙人図　厳嶋虹石
水墨芭蕉図　森下柳蹊
＊＊＊
雪中水禽図　村松濤山
鐘馗図　仝
行書二行　杉浦帯雨
秋景嵐山図　山元春挙
茶番鼠図　長谷川玉粹
□女　図　仝
鯉魚　図　仝
山吹玉川図　女史　増田香文
＊＊＊
枯蘆千鳥図　戸川碧水
枯木寒□図　谷口香嶠
火桶図　森　雄山
賛　右　歌　八木應之
寒月の亡年　発句二　伴　一潭
山水　図　今尾景年
中島有章筆岩上亀図
八木氏出品
＊＊＊
寿老人図　森　寛齋
當　直
原　在泉
中島有章
西谷觀蘭
河邉華挙
佐々木鴻洲
幹支惣中
＊＊＊
茶席　良則
壁　上
貞栁宗匠像富岡鐵齋画
八木氏出品

（資料十六）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

長谷川玉純様

廿六年祭　新古書畫展觀錄

【見返し】

新古書畫展觀錄

平安　後素如雲社

【本文】

維時明治貳拾六年一月十一日於

洛東花見小路有樂舘及萬花園發

會新古書畫展觀幷席上揮毫

發會展觀錄

壁上古筆

一土佐光貞筆旭日之圖　靜邸御物

備神酒幷賞牌

一圓山應舉筆天開之圖書　國井氏藏

備鏡餅

新書畫席順不同

＊＊＊

雪夜遊鹿之圖　岸　竹堂

能舞猩々之圖　森川曾文

高砂之圖　仝

蓬萊山水之圖　内海吉堂

老松鶴山水之圖　前川文嶺

水邊□之圖　扁額　仝

菜花雲雀之圖　鈴木松年

溪流翡翠之圖　仝

壽老人之圖　今尾景年

＊＊＊

松林群鹿之圖　仝

七律三行書　遠山三橋

雪花發句自畫讃　伴一　潭

水中游鯉之圖　竹川友廣

旭日眞鶴之圖　望月玉泉

散楓雙鹿之圖　仝

巖上龜之圖合作　清水東陽

寺谷東雲

疏水隧道篆額之歌　西谷觀瀾

唐山水之圖　長谷川玉純

＊＊＊

巖上龜之圖　國井應陽

仝　山田松華

柳陰洗馬之圖　森　春岳

鳳凰堂秋景之圖　久保井圭純

嚴嶋春景之圖　大江小魚

長春雀之圖　三宅吳曉

巖上龜之圖　杉本成純

良雄酒興之圖　齊内太年

雪中華項山之圖　田中松齋

＊＊＊

淺絳山水之圖　河村虹外

旭烏之圖　山田松溪

秋夜鹿之圖　仝

風雪三顧之圖　小林玉華

巖上龜之圖　長谷川契華

仝　歌　仝

都美人之圖　仝

華項山春景之圖　山本雪堂

清瀧川雪景之圖　仝

＊＊＊

俊成卿娘之圖　二村華香

梅林山水之圖　吉永清峰

白梅群雀之圖　河合玉堂

田植之圖　橋本菱華

月下夕顔之圖　望月玉溪

月夜山水之圖　仝

高雄秋景之圖　長谷川玉粹

羅漢之圖　案本文洲

寒江水禽之圖　仝

＊＊＊

雪中熊之圖　武藤春翠

瀑布之圖　案本芳樹

梅花小禽之圖　小西南江

巖上龜之圖　山脇鶴城

旭雙雞之圖　渡邊蘆江

若松之圖　大槻清翠女

梅之圖　仝

郭子儀之圖　西田玉華

巖上龜之圖　淺田鶴文

＊＊＊

若葉之圖　疋田靜湖

羊毫之圖　仝

竹双雞之圖　長井龍岳

一行書　案本竹翠女

蓬萊山之圖　田畑鶴堂

牡丹雀之圖　山本吳山

田家秋景之圖　湯淺盛一

巖上龜之圖　廣瀬秋琴

柳白鷺之圖　上野清江

＊＊＊

雙鶴之圖　平野碧潭

白梅之圖　山崎春芳

蓬萊山之圖　前川孝嶺

唐美人之圖　國井松香女

七五三飾之圖　岡本郁文

俵之圖　仝

月夜梟之圖　小川雪山

白梅雀之圖　神服遊儁

白鷺之圖　八木竹峰

＊＊＊

根引松之圖　佐藤錦翠

梅之圖　仝

梅花田舍之圖　奥村雪堂

老梅之圖　土屋錦岳

鏡餅之圖　仝

鯉登瀧之圖　木村觀月

楓猿之圖　仝
牧童之圖　仝
河柳鶯之圖　森下柳蹊
＊＊＊
旭雙雞之圖　西山翠嶂
雪中熊之圖　土田東垂
旭鶴之圖　村松濤山
雪柳鶯之圖　仝
墨梅之圖　仝
巖靈芝之圖　伊原竹泉
茶梅番鴨之圖　川越文峰
老松獨鶴之圖合作　澤渡乾齋
唐山水之圖　上野清江
＊＊＊　松田竹園
雪中松林之圖　山元春擧
秋景瀧之圖　仝
元章墨梅詩　奥谷秋石
墨梅之圖　仝
芭蕉之圖　岩井翠雲
柳鴨之圖　小川松雲
菊鴨之圖　仝
巖上龜之圖　本多美種
海邊松之圖　德力幽雪
＊＊＊
竹月之圖　松井耕雪
紅梅鶯之圖　山岸百溪

神樂猿之圖　谷口鴨涯
五絶三行書　千秋笙巖
七律五行書　仝
白老梅之圖　上原玉樹
□玉之圖　羽田文石
猿水月之圖　仝
旭前白梅之圖　吉村廣月
＊＊＊
井手玉川之圖　神谷紫山
東方朔之圖　中岡南滄
月下梟之圖　仝
雪中韓退之之圖　高村松香
帶霜白菊之圖　長谷川幸華
夫妻愛兒之圖　福永霞樵
淺絳唐山水之圖　仝
壽老人之圖　西村竹雲
白菊雀之圖　戸川碧水
＊＊＊
梅月之圖　柴田次山
玉之圖　西村曉雲
婦人見龜之圖　大木鶴亭
菊慈童之圖　井上鶴松
巖上龜之圖　森　雄山
旭日尉姥之圖合作　森　寛齋
鈴木松年
岸竹堂
梅窓美人之圖　中井梅園女

旭若松之圖　藤木信女
紅梅番鴨之圖　土田喜園女
＊＊＊
白菊雀之圖　前田玉英女
老松猛虎之圖　仝
俊成卿娘見梅花之圖　星野文英女
雪中人家之圖　森　雄山
右讃　八木漱石
巖上龜自畫讃　仝
左讃　仝
船檣之圖　森　雄山
＊＊＊
隷書二行　八木漱石
長春之圖　戸川碧水
三十石之圖　森　雄山
南天小鳥之圖　森嶋春樵
巖上龜之圖　德力幽雪
藤之圖　本多慶雲
雪中人家之圖　奥谷秋石
猿之圖　山元春擧
七絶三行書　杉浦帶雨
＊＊＊
芭蕉鴈來紅之圖　井上甘泉
松之圖　仝
竹之圖　仝
双鴨之圖　中嶋華鳳
雪中金閣寺之圖　仝

臥猪之圖　仝
長春群雀之圖　澤渡乾齊
海邊群鶴之圖　橋本菱華
天橋立眞景　森　直愛
＊＊＊
水呑虎之圖　河邊華擧
旭櫻鶯之圖　原　在泉
毘沙門天之像　谷口藹山
五律三行書　遠山盧山
梅東天江　讃風俗畫　森　寛齋
旭前墨梅之圖　仝
東　京
鐵馗降魔之圖　橋本雅邦
信實夢想之圖　三輪青谷
＊＊＊
八　幡
能舞猩々之圖　北垣公美
古　筆
尾藤二洲一行書
古賀精里二行書　三幅
柴野栗山二行書
右　靜邨御物
一圓山應擧畫稲雀之圖
一仝　雙雞之圖
＊＊＊
一仝　水中遊龜之圖　三幅
一全　鶴巣籠之

右　矢代氏藏

一超元書曲和陽春一行
一椿椿山畫杏花飛燕之圖
一松村景文畫白梅雀之圖
右　遠山氏藏

一菊池容齋畫本多忠勝一言坂才略之圖
右　小澤氏藏

＊＊＊

一池大雅畫淺絳山水之圖
一與謝蕪村畫芭蕉翁立像
一曾我蕭白畫水墨山水之圖
一圓山應舉畫中觀音左右寵短册　三幅
一原在中畫張良之像大典和尚賛
一中林竹洞畫梅花書屋之圖
一浦上春琴畫花鳥之圖
一雨森白水畫松石不老之圖
一仝　告歸省親之圖

＊＊＊

一仝　盧生夢邯鄲之圖
右　雨森氏藏

一小田海僊畫漁樂之圖
右　森　氏藏

一長澤蘆鳳畫十六應眞之圖
一三條西乗禪畫海波燕子之圖
右　井上氏藏

一盛武燁畫水墨山水之圖
一張瑞圖書草書三行

＊＊＊

右　村松氏藏

一僧月僊畫着色山水之圖
一横山清暉畫長刀鋒之圖
一中嶋來章畫寶船之圖
一長谷川玉峰畫立雛之圖
右　樋口氏藏

一横山華山畫高砂之圖
右　河邊氏藏

一松村景文畫旭龜之圖

＊＊＊

右　前川氏藏

一長谷川玉峰畫海老蛤之圖神山三野讃
右　長谷川氏藏

一原在中畫關羽之像
一森徴山畫　櫻駒鳥之圖
一楓橿鳥之圖　雙幅
一富田光影畫婦人之圖
右　木村氏藏

一貫名菘翁書一行
一松村景文畫紅旭双鶴之圖

＊＊＊

一法眼永眞畫蓬萊山之圖
右　宮脇氏藏

一中嶋來章畫雪梅鴛鴦之圖
一鈴木百年畫富士越龍之圖
右　鱗光堂氏藏

一貫名菘翁畫水墨山水之圖
右　黒田氏藏

一長澤蘆雪畫狗子之圖
一岸連山畫范蠡掉湖之圖

＊＊＊

右　萬成堂氏藏

一狩野常信畫寶船之圖
一谷文晁畫倣鳥羽僧正蛙兎角觝之圖
右　三輪氏藏

大　坂

一圓山應舉畫芭蕉之圖
右　田中氏藏

茶席壁上

＊＊＊

一圓山應舉畫白藏主之圖
右　清水氏藏

酒席壁上

一森徹山畫五行玉之圖
右　森　氏藏

社　員　（イロハ順）

井上甘泉　岩井藍水
今尾景年　原在泉
伴　一潭　長谷川玉純

＊＊＊

羽田月洲　西谷觀瀾
西村桃嶽　奥村雪堂

奥谷秋石　河邊華擧
筧　有隣　竹川友廣
竹内棲鳳　田中一華
谷口香橋　都路華香
中島有章　中嶋華鳳
武藤春翠　梅村景山
内海吉堂　國井應陽

＊＊＊

八木漱石　山本桃陽
山田松溪　山本雪堂
山元春擧　前川文嶺
窠本芳樹　福中寛齋
小林吳嶠　佐々木鴻洲
岸竹堂　菊池芳文
三宅吳曉　清水東陽
森　寛齋　望月玉泉
森川曾文　森　春岳

＊＊＊

森　雄山　鈴木瑞彦
鈴木萬年　德力幽雪
森嶋春樵

副社員

森　社中　岩井翠雲
村松濤山　戸川碧水
森川社中　澤渡乾齋
星野文英　岡本鶯文
前川社中　羽田文石

＊＊＊

中岡南滄　前川孝嶺
吉永晴峰
原　社中　坂本泰山
星加壽僊　高山孤松
伊與木西苑
菊地社中　松見竹窓
山田耕雲　田佃貴圃
間宮雲涯　宮川芳翠
高山翠溪

＊＊＊

鈴木瑞彦社中　藤林春溪
奥田瑞寛
長谷川社中　菊地文陽
長谷川玉粹　西田玉華
杉本成純　増田香文
上原玉樹　久保井圭純
川合玉堂　西村暁雲

＊＊＊

幹　事
今井龜良則　長谷友楳堂
西村白鹿堂　星田瑞星堂
奥村雲錦堂　中井眞相堂
上田青雲堂　野口鱗光堂
黒田寛昇堂　松岡龍鱗堂
藤村萬成堂　木村通仙堂
宮脇賣扇庵
撰任委員

＊＊＊

森川曾文　竹川友廣
國井應陽
撰任幹事
木村通仙堂　上田青雲堂
松岡龍鱗堂

（資料十七）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

廿七年祭　新古書畫展觀錄

【見返し】

新古書畫展觀錄

平安　後素如雲社

【本文】

維時明治廿七年一月十一日於洛

東花見小路有樂舘及大仲院發會

新古書畫展觀幷席上揮毫

發會展觀錄

壁上古筆

一土佐光孚筆旭日之圖　靜邸御物

備神酒幷賞牌

一圓山應擧筆天開之圖書　國井氏藏

備鏡餅

＊＊＊

新書畫席順不同

柳下双馬之圖　原　在　泉

紅梅狗子之圖　鈴木松年

松間圍碁之圖　同

旭日奔馬之圖　同

蓬萊山水之圖　森川曾文

白馬之圖　望月玉泉

天保九如之圖　前川文嶺

櫻花小禽之圖　竹川友廣

＊＊＊

松浦群鶴之圖　鈴木瑞彦

蕉陰鶴夢之圖　内海吉堂

梅花群雀之圖　森　春　岳

双鶴之圖　河邊華學

雲壑松濤之圖　谷口藹山

崧鶴加齡之圖　淺田鶴文

菊兒童之圖　橋本菱華

扇形合作　湯浅盛一

藤井春水

河村泰幸

澤渡乾齋

筧　魚　峰

＊＊＊

筧二鶯之圖　六人部暉峯

十二支之圖　武藤春翠

太神樂之圖　長谷川玉純

春景山水之圖　山本雪堂

梅花先春之圖　望月玉溪

辨財天守夜神　三神之圖　福中寛齊

鎮宅靈符神

梅二猿之圖　同

松二旭之圖　川越文峰

赤壁之圖　都路華香

＊＊＊

京名所十景　山田松溪

鞍馬山試合之圖　同

白馬之圖　同

月下雁之圖　澤渡乾齋

三番叟之圖　同

松林山水之圖　羽田文石

蓬萊山之圖　中岡南滄

梅溪歸牛之圖　前川孝嶺

雪中蓬萊山之圖　星野文英女

＊＊＊

鴛鴦之圖　中島華鳳

富岳之圖　同

發句一首　伴　一　潭

觀音之圖　井上甘泉

蛭子大黑之圖　山本暉山

發會祝歌　西谷觀瀾

馬之圖　星野蟬水

夏曉山水之圖　芳曉

隷書二行　遠山盧山

＊＊＊

土人形　七福神合作　松齊　虹外　棲鳳

松溪　春擧　雄山

甘泉

虎之圖　窠本芳樹

雙馬之圖　河合玉堂

菊花之圖　鈴木瑞雄

河邊小禽之圖　小林玉華

艸書一行　八木□石

鯉魚之圖　長谷川玉粹

蓬萊山之圖　高村松香

＊＊＊

雪蘆鴛鴦之圖　土田東垂

梅二□々鳥之圖　高山孤松

旭二鶯之圖　耕雲

梅花田家之圖　楳嶺

梅二旭之圖　星加壽仙

梅花先春之圖　中岡南滄

巖上龜之圖　阪本泰山

蘭二雞之圖　小林吳嶠

蘆雁之圖　紫香

＊＊＊

牡丹小禽之圖　渡邊蘆江

春景山水之圖　藤井清泉

牡丹之圖　土川久仙

曉雪之圖　西田玉華

梅二鴨之圖　田畑貴圃

柳下二牛之圖　西山翠嶂

近衛忠熙公歌　星野氏出品

旭前梅花之圖　鈴木松仙

白梅之圖　德田春曉

＊＊＊

行書二行　遠山三橋

行書三行　杉浦帶雨

紅梅之圖　山田松華

雙鶴之圖　同
梅花先春和歌　同
修學院秋景　上原玉樹
婦人放鳥之圖　二村華香
吉田里万歳之圖　同
蓬萊山之圖　山瀨春嶺
＊＊＊
風雪三之　圖　大江良起
兼好閑居之圖　山田翠谷
旭松二馬之圖　田中松齋
菊花小虫之圖　錄山
高砂之圖　奥田瑞寛
芦花雙鴨之圖　案本文洲
牡丹錦雞之圖　高田護擧
雪中八坂塔之圖　内山竹塘
秋山獵夫之圖　田畑鶴堂
＊＊＊
岩二竹之圖　同
婦人携梅之圖　長谷川契華
梅花先春和歌　同
壽老之圖　疋田靜湖
雪中下鴨社之圖　松田竹園
林和靖之圖　小川松雲
椿二　圖　富岡圓崖
一品當朝之圖　河村虹外
宇治川之圖　澤　春皐
＊＊＊

白梅二馬之圖　福永霞樵
旭前若松之圖　青山清溪
梅景山水之圖　同
松竹梅鶯之圖　芝田次山
旭若松之圖　増尾秋溪
夏景山水之圖　奥谷秋石
古　詩　同
保津落合之圖　山元春擧
松竹梅之圖　本多慶雲
＊＊＊
春天奔馬之圖　森島春樵
白梅之圖　合場文齊
旭二若松之圖　戸川碧水
墨梅之圖　巖島虹石
秋雨孤鹿之圖　森　雄　山
春駒若菜之圖　森　寛　齋
梅　同
馬之圖　同
林和靖之圖　同
＊＊＊
蓬萊山之圖　同
水墨山水之圖　同
昔噺之圖　同
玉之圖　同
梅二鶯之圖　國井應陽
伊　勢
於杉於玉之圖　磯部百鱗

若菜福壽艸之圖　横地玉華
古　筆
＊＊＊
一松村景文畫中瀑布櫻鳩楓四十雀之圖
一圓山應擧畫赤壁之圖
右　小山氏藏
一圓山應擧畫童子遊戯之圖
一池無名畫黄鶴樓之圖
一谷文晁畫夏秋山水双幅
一盛寅畫雪景山水之圖
一白水老之畫蘭亭曲水之圖
一盛寅畫諸葛戒子書
＊＊＊
右　雨森氏藏
一圓山仙嶺畫墨畫山水之圖
一吳春畫雨竹之圖
一岡本豊彦畫雪中竹之圖
右　内藤氏藏
一松村景文畫稻荷狐之圖
一中島來章畫藁馬之圖
一同　芭蕉之圖
一同　若菜之圖
＊＊＊
右　春芳堂氏藏
一渡邊小華畫蓮二鷺之圖
右　小野氏藏
一圓山應擧畫水墨山水之圖

右　奥田氏藏
一直兄畫富士之圖自畫讃
右　星野氏藏
一長谷川玉峰畫浪旭之圖
右　樋口氏藏
＊＊＊
一森徹山畫墨梅之圖
右　八木氏藏
一松村景文畫槌白鼠之圖
右　木村氏藏
一狩野常信畫馬之圖
一山口素絢畫蓬山之圖
一前川五嶺畫雪景山水之圖
右　西村氏藏
一秀信畫玉之圖
＊＊＊
一中島來章畫栗小禽之圖
右　藤村氏藏
一土佐光孚畫餐船之圖
右　宮脇氏藏
一鹽川文鱗畫松二旭之圖
右　長谷川氏藏
一田中日華畫梅林殘雪之圖
右　岩井氏藏
一熊野曼陀羅之圖二曲屏風筆者未詳
＊＊＊
右　岩田氏藏

一海北友松畫布袋之圖
一谷文晁畫墨畫山水之圖
一墨田稻皐畫海棠鯉魚之圖
右　德力氏藏
一圓山應舉畫馬之圖
一森徹山畫五行之国
一同　一鳳畫槌之圖
右　森　氏藏

＊＊＊

社員

井上甘泉　岩井藍水
今尾景年　原在泉
伴一潭　長谷川玉純
羽田月洲　西谷觀瀾
奥村雪堂　奥谷秋石
河邊華擧　竹川友廣
竹内棲鳳　谷口香嶠
田中一華　都路華香

＊＊＊

中島有章　中島華凰
武藤春翠　梅村景山
内海吉堂　國井應陽
八木口石　山本桃陽
山田松溪　山本雪堂
山元春擧　前川文嶺
案本芳樹　福中寛齋
小林吳嶠　佐々木鴻洲
岸　竹堂　菊地芳文

＊＊＊

三宅吳曉　森寛齋
望月玉泉　森川會文
森春岳　森雄山
鈴木瑞彦　德力幽雪
森島春樵　望月玉溪
巖島虹石

副社員

森社中　村松濤山
岩井翠雲　戸川碧水

＊＊＊

森川社中　澤渡乾齋
星野文英　淺田鶴文
川越文峰　眞壁捷華
前川社中　羽田文石
中岡南滄　前川孝嶺
菊地社中　松見竹窓
山田耕霊　田畑貴圃
間宮雲涯　宮川芳翠
高山翠溪

＊＊＊

鈴木瑞彦社中　奥田瑞寛
長谷川社中　長谷川玉粹
西田玉華　杉本成純
増田香文　上原玉樹
久保井圭純

岸社中　加藤英舟
竹内社中　土田東垂
橋本菱華　高村松香
神谷紫山　西山翠嶂

＊＊＊

竹紫香　藤井清泉
渡邊蘆江　六人部暉峰
森春岳社中　芝田次山
國井社中　増尾秋溪
幸野社中　梶間文祥
河合玉堂　川北霞峰
田畑松雨　木村鶴儁
西村曉雲　藤井春水

＊＊＊

青山清溪　高山富雄
東周橘
伊勢松坂　長谷川夘之助
近江八幡　北垣公美
撰任委員
竹川友廣　國井應陽
森川會文
撰任幹事
西村白鹿堂　上田青雲堂

＊＊＊

松岡龍鱗堂
幹事
長谷川友楳堂　西村白鹿堂
奥村雲錦堂　中井眞相堂
上田青雲堂　野口鱗光堂
松岡龍鱗堂　藤村萬成堂
木村通仙堂　宮脇賣扇庵

（資料十八）
＊＊＊は頁が変わることを示す。
□は判読できない文字を示す。
【表紙】
十□年六月
六
月並展覧書画録
朱文方印「如雲社記」
【本文】
六月十一日　於裏寺町妙心寺
壁上古筆
柴田義董画墨竹図
河關龍章画加藤公像
右　河關氏出品
塩川文麟　□　梅林山水図
右　西村氏出品
今書画　着順
＊＊＊
行書三行　遠山盧山
水墨蘭図　風船母山
七言詩　仝
草書　西谷淇水
羅漢像　鈴木松年
渡船図　仝
山水図　仝　松仙
人物図　山田松華
＊＊＊
山水図　仝
渓流登舟図　齋藤松洲
美人納涼図　跡見玉枝女
仝　養蚕図　仝　祥雲
篭中□物　玉　應粛
彼岸櫻燕図　仝
薔薇小禽図　平野□□女
花島図　伊藤玉峰
＊＊＊
山水中群鹿図　幸野梅嶺
遊鯉図　瀧永呉□
李白觀瀑布図　木村□□
漁人図　箕田□□
外国人像　森川□□
漁人　図　長谷川玉純
苦瓜鶏図　三宅文暁
小野小町図　桃井月花
＊＊＊
平井保昌図　淺田政一
漁者図　大西光琴
山間時鳥図　原　在泉
柘榴図　武藤祥雲
旭下□鶏　国井應文
□□図　仝
月下飛鯉図　中島有章
雨中柳翡翠図　仝　泰岳
＊＊＊
□火線香図　竹川友廣
住吉神社　八木漱石
梵□香図　藤田文英
瀑布山水図　森　寛齋
南極星図　真名井涛斉
李太白図　小津雪仙
養老孝子図　三輪青谷
水墨葡萄図　森　雄山
＊＊＊
水雞図　西村暁雲
布袋和尚図　森川玉簡
杜若飛燕図　女史　倉治春江
□間飛蛍図　仝　赤松葭州
牡丹図　仝
岩霊芝図　大隅松齋
當直
＊＊＊
柳瀬文敬
田中幽峰
幹叀
□□□　河関堂
□□□　□鹿堂
茶席□□□□□□艮則
壁上古筆
土佐光文画游女道中図

（資料十九）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

十一

月並展観書画録

朱文方印「如雲社記」

【本文】

十一月十一日　於裏寺町妙心寺

今書画着順

月下芦雁図　望月玉泉
稲　王図　上羽可豊
行書　遠山盧山
草書　西谷淇水
秋景山水図　鈴木松年
雪中山水図　仝
＊＊＊
南極老人戯游図　仝　松仙
漁父図　中野松堂
園劇場図　山田松花
綿木小禽図　仝
芦花水鳥図　山田松溪
菊花描図　仝
大黒天図　岸　鶴聲
紅楓山水図　岡田龍年
＊＊＊
師子図　武藤祥雲

芦雁図　森川曽文
山中老猿図　三宅文暁
蒲萄図　小幡文華
座居天狗図　桃井月花
南公図　横山曽立
水汀夏草図　深田直城
夏雨山水図　西村耕文
＊＊＊
夏景山水図　大岩苔生
印譜　伊東竹雲
秋景嵐山図　前川文嶺
櫻花小禽図　女史　跡見玉枝
秋海棠翡翠図　仝
桂花小禽図　浦野梅苑
芙蓉花小禽図　西池成義
柳馬図　遠藤速雄
＊＊＊
秋景山水図　山本桃陽
楓橋夜泊図　國井應文
江口ノ君図　仝
菊花図　吉田文孝
月下雁図　藤田文英
菊小禽図　佐々木鴻洲
秋野猪図　山田峰月
柿小禽図　喜田花友
＊＊＊
陶淵明図　八木漱石

蓬來仙山図　森　寛齋
春駒舞図　真名井濤齋
孝子王祥図　仝
達广大師像　仝
仝　森　雄山
孝子孟宗図　仝
芦花白鷺図　大隅松齋
＊＊＊
□根蘭図　中路芦笛
紅楓四十雀図　女史　倉治春江
大津
水墨孔雀図　清水東陽
楓樹小禽図　木村東雲
サヌキ
黒竹図　江良屋山
七絶詩草書　仝
＊＊＊
當直
蛭子大国天図　双幅　川邉華挙
蓮花　游鯉図　久保田米僊
風雪三顧図　仝
天女図　仝
秋草小鳥図　宮城晴洲
並
社祖　土佐光文　居士追福
＊＊＊
遺墨

神武帝図　右　中嶋氏出品
源義家
京極黄門公像
高砂図
楠公像
神功皇后図
＊＊＊
右　土佐氏出品
猿田彦□女神画
稲荷山　四　辻図
近江国竹生島図　右　上羽氏出品
維摩居士図　右　友梅堂仝
人麻呂図
＊＊＊
人□像　仝　宮城氏出品
墨梅鴨図
平兼守月下弾琵琶図
牽牛織女図
草紙洗小町図　壽昌堂出品
立雛図　仝　上田氏出品
＊＊＊
福女図

蓬來山図
蛭子神図　牡丹図　蜃気楼図
御田□図　仝　萬成堂出品
茶席　亀　艮則
幹事　壽昌堂
友梅堂

（資料二十）
＊＊＊は頁が変わることを示す。
□は判読できない文字を示す。
【表紙】
十一
月並展観書画録
「如雲社記」朱文方印
【本文】
十一月十一日於裏寺町妙心寺
壁上古筆
狩野洞春画馬上關羽図
秋月画牧童図　右　通仙堂出品
圓山應端画図雙雀應擧賛　右　益田□出品
長谷川玉峰□画帖　右　同家出品
＊＊＊
今書画着順
草　書　遠山廬山
仝　墨稼
仝　天　山
五言詩　淺井竹春
七言　仝
仝　仝
＊＊＊
渓間静屋図　谷口靄山
月下清林図　仝　春林
山水図　相良星峯
天保九如図　市川千山
秋江渡雁図　山中秋帆
草書　西谷淇水
仝　□飼淡州
仝　大田天江
＊＊＊
仝　喜田華友
仝　川崎東塘
仝　岩崎江海
小原女図　宮城晴洲
野竹　図　森川曽文
松下撫父図　横山曽立
楊柳鶯図　小幡文華
雪中南天燭図　三宅文暁
＊＊＊
嵐山秋雨図　桃井月華
陶淵明図　山田松年
枯樹遊猿図　仝
松雪雙鶴図　竹川有廣
山中茸図　鎌田梅年
白梅白鷹図　國井應文
□ライ師図　前川文嶺
大　書　八木漱石
＊＊＊
ウツホ　図　森川玉文
老松雙鶴図　田中幽峯
雪中山家図　庭阿弥竹翠
新竹白鶴図　山本桃谷
蘆花図　仝　桃陽
芝賣臣図　佐木枇陰
二仙人図　茨木翠嶽
黄金中福神図　中嶋有□
＊＊＊
松雪双鴨図　仝
關帝図　仝　華岳
弁才天女図　林　耕雲
黒　梅　図　森　寛齋
枇杷花図　西村桃嶽
落葉立鹿図　森　直愛
荘子夢蝶図　仝　雄山
仲国趣嵯峨野図　木村泉石
＊＊＊
黄初平図　西村暁雲
竹雀図　女史　倉治春江
合作七福神図
大黒天図　有　章
恵比ス神図　恭　岳
比沙門天　図　泉　石
辯才天　図　桃　嶽
寿老人図　雄　山
＊＊＊
福録壽図　暁　雲
布袋図　春　江女
當直
孫康影雪　図　長谷川玉純
岩上白菊図　佐々木□洲
○
茶席　亀　良則
＊＊＊
幹叟
寺町三条　万成堂
寺町二条　奥　村
蛸ヤクシ界　通仙堂
富小シ二条　瑞星堂
寺町丸太町　壽昌堂
蛸ヤクシ界　良　則
寺町万壽シ　竜麟堂

（資料二十一）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

毎月十一□

今書画展觀書画錄

平安　後素如雲社

【本文】

年九月十一日於裏寺町常樂寺

當直　榊原　桃崕

佐々木鴻洲

幹事　星　田

壁上古筆

圓山應擧画

中宗□左右栗柿図

山水夏夕図

＊＊＊

養老　図

折枝柘榴　図

水墨　芙蓉花図

山水図

右　伊谷氏出品

仝　柳下牧童図

右　奥村氏出品

今書画着順

＊＊＊

墨竹図　渚　方舟

三友図　仝

米法山水図　谷口蔼山

墨竹図　仝　溪山

草書二行　静屋居士

蘭　詩　西谷淇水

竹　詩　仝

秋景高雄山図　山本桃谷

＊＊＊

芦　花下遊亀図　仝　枇揚

關帝図　原　琴谷

霞汀　百鷺図　桃涯

觀世音図　河合桃溪

羅漢図　八木漱石

普門品書　仝

散蓮花図　國井應文

水墨黄蜀葵図　今井文耕

＊＊＊

柿小禽図　小川文瀼

荘子夢蝶図　藤田文英

菊花　詩　神山鳳陽

鬼念佛図　德目友儕

雁來　紅図　東　崕

竹石図　大西點堂

稲穂戯鳥図　中島有章

狙公図　並行書　仝　恭岳

＊＊＊

季夫人画竹図　森　寛齋

荷華図　木村泉石

鐘馗図　森　雄山

秋草鶉図　堀　癱五

菊花図　長谷川保秀

枝栗　図　□村暁雲

芙蓉華　待　今井良逸

樹間月図　長谷川玉純

＊＊＊

河柳水鳥　西村　文

浪華

雲龍　図　狩野永祥

夏景雨漁図　上田　中

豊後

梅花　僧　呉岳

○

茶　亀　良則

【裏表紙】

押小シ□　万成堂

寺甲二条　奥　村

幹叟　トミ押上　星　田

蛸ヤクシ界　通仙堂

仝　亀良則

（資料二十二）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

月並展觀書画錄

【本文】

三月十日　於裏寺町妙心寺

當　　本部有数

直　　田中幽峰

壁上古筆

長澤芦雪画　那智山瀑布図

中島來章画　草花図

岡本豆彦画　田家春景図

右　奥村氏出品

＊＊＊

圓山應震画　達摩大師図

右　松浦氏出品

横山清暉画　立雛図

右　田中氏出品

土佐光文画　源氏初子図

仝　八番山行幸図

來章画早苗図

田中日華画天狗面図

＊＊＊

長谷川玉峰　住吉景

右　萬成堂出品

今書画着順

行書三行　遠山廬山

草書二行　仝　墨家

山水　図　仝

草書二行　淺井竹春

老松壽仙人図　鈴木松年

＊＊＊

郭子義図　山田松溪

雪中山水図　山田松華

雨中嵐山図　仝

童子戯游図　仝

草書三行　西谷淇水

仝　喜田華友

仝　松井信一

月下彈琴図　跡見玉枝女

＊＊＊

渡邊□図　森川曽文

枯木下水鳥図　西村耕文

月下葭花図　三宅文暁

水辺冬花図　横山曽立

大塔宮危難図　桃井月華

桂花図　淺田政一

會仙得壽図　長谷川玉純

不二山鷹図　中嶋有章

＊＊＊

象図　仝　恭岳

芳野山春景図　原　在泉

墨梅図　西池成美

若松鶯図　遠藤速雄

花鳥図　浦　□苑

貴船山中瀑布図　星野蝉水

洛西保津川図　山本桃谷

雪中叡岳図　仝

＊＊＊

椿花小禽図　仝　桃陽

雨中芳野山図　藤田文英

櫻花鳩図　古畑清豊

雨中青楓時鳥図　吉田文孝

小嶋高德図　松尾文信

老松群雀図　并哥　八木漱石

普門品レイ書　仝

大国天図　仝

＊＊＊

蘭亭曲水図　森　寛齋

仙人図　木村泉石

折枝花図　森　雄山

墨梅図　西村桃嶽

水墨芭蕉図　西村暁雲

蓮華図　小津疊波

桃林山水図　大隈松齋

芍薬花図　女史　倉治春江

＊＊＊

瀑布下李伯図　田中幽峯

海邊遊鶴図　三木暉峯

牡丹花図　市村林峰

浪華

狩野永信

伊勢

長谷川應章

狸図

＊＊＊

茶席　亀　良則

幹叟

寺町二条　奥村

御影堂　長谷川

朱文方印「如雲社記」

（資料二十三）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

□　展観書画録

【本文】

三月十一日　於裏寺町妙心寺

當　　本部有数

直　　田中幽峰

壁上古筆

長澤芦雪画　那智山瀑布図

□島來章画　草花図

□□豊彦画　田家　春景図

右　　奥村氏出品

＊＊＊

□山應震画　達磨大師図

右　イヨ松浦氏出品

□山清暉画　立雛図

右　　田中出品

土佐光文画　源氏初子図

仝　八番山行幸図

來章画早苗図

田中日華画天狗面図

＊＊＊

長谷川玉峰　住吉景

右　　萬成堂出品

今書画着順

行書三行　遠山盧山　若松鶯図　遠藤速雄

草書二行　仝　墨家　花鳥図　浦野楳苑

山水　　図　仝　貴船山中瀑布図　星野蝉水

草書二行　淺井竹春　洛西保津川図　山本桃谷

老松壽仙人図　鈴木松年　雪中叡岳図　仝

＊＊＊　＊＊＊

郭子義図　山田松溪　椿花小禽図　仝　桃陽

雪中山水図　山田松華　雨中芳野山図　藤田文英

□中嵐山図　仝　櫻花鳩図　古畑清豊

□　戯游図　仝　雨中青楓時鳥図　吉田文孝

草書三行　西谷淇水　小嶋高德図　松尾文信

仝　喜田華友　老松群雀図　八木漱石（井哥）

仝　松井信一　普門品隷書　仝

月下彈琴図　跡見玉枝女　大国天図　仝

＊＊＊　＊＊＊

渡邊□図　森川曽文　蘭亭曲水図　森　寛齋

枯木下水鳥図　□村耕文　仙人図　木村泉石

月下葭花図　三宅文暁　折枝花図　森　雄山

水辺冬花図　横　山　立　墨梅図　西村桃嶽

大塔宮危難図　桃井月華　水墨芭蕉図　西村暁雲

桂花図　淺田政一　蓮華図　小津疊波

會仙得壽図　長谷川玉純　桃林山水図　大隈松齋

不二山鷹　中嶋有章　芍薬花図　女史　倉治春江

＊＊＊　＊＊＊

象図　仝　恭岳　瀑布下李伯図　田中幽峯

芳野山春景図　原　在泉　海邊遊鶴図　三木暉峯

墨梅図　西池成美　牡丹花　図　市村林峰

浪華　鍾馗図　狩野永信

伊勢　狸図　長谷川應章

＊＊＊

茶席　亀　良則

幹支　當直

寺町二条　奥村

御影堂　長谷川

朱文方印「如雲社記」

（資料二十四）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

朱文方印「如雲社記」

書画展觀録

【本文】

八月十一日於寺町聖光寺

壁上古筆

圓山應震画　芍薬狗子図　全四行　西堀　雪

田中訥言画四季山水図　林和□図　林　耕雲

横山清暉画月下山水図　天保九如図　仝

右

美部農氏出品

折枝秋草　竹川友廣

柳下洗馬図　仝

花鳥図　西村耕文

櫻花鳩図　桃井月華

中島來章筆早苗白鷺図

＊＊＊

＊＊＊

右

奥村氏出品

秋草図　三宅文暁

春林山水図　鎌田梅年

芦華登鮎図　梅戸春苑

海邊山水図　浦野楳苑

荷花図　関　德女

雲中鬼人図並哥　榊原長敏

七夕和歌　仝

伊勢女哥ノ意　本部有数

＊＊＊

森　徹山筆松下虎豹図　森氏品出

文学止人図　仝

巨霊仙人図　田中幽峯

雪中山水図　仝

今書画着順

蒲萄栗鼠図　國井應文

松林山水図　鈴木松年

東方朔図　吉田文孝

夏景山水図　谷口靄山

宇治川図　山本枇夭

雪中山水図　谷口春林

鐘　馗　図　佐々木桃陰

山　水　図　山中秋帆

古木寒鳥図　茨木翠岳

＊＊＊

＊＊＊

草書三行　西谷淇水

南極星図　長谷川玉純

布袋図賛梅花図　八木漱石

草書四行　仝

一行書　仝

夏景富士山　森　寛齋

白梅図　西村桃嶽

群鳥図　森　直愛

波上二仙ノ図　仝　雄山

＊＊＊

墨梅　図　仝

鯉魚昇瀧図　木村泉石

墨梅図　仝

菊童子図　西村暁雲

篭中栗柿図　仝

枝　栗　図　岩井藍水

墨竹　図　赤松葭洲女

芭蕉戯雀図　倉次春江女

＊＊＊

月下秋草図　女史　礒野清琴

牛祭　図　中島有章

牛若丸図　仝

牧童図　〃

西行法師像　〃

和山水図　〃

野馬図　〃

仲国嵯峨野図　〃

＊＊＊

六孫王祭図　〃

昔噺　図　〃

俄鬼　図　〃

里　躍　図　仝　恭岳

雨中白鷺図泉石画詠歌應之

秋草図雄山画　并賛　應之

箱根湯元

和歌短冊二葉　福往　正兄

＊＊＊

越後高田

山水図　小山松渓

○

當直

前川文嶺

中嶋有章

茶席

亀　良則

（資料二十五）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

八

月並展觀書画錄

朱文方印「如雲社記」

【本文】

八月　十一日　於裏寺町妙心寺

當直

西谷　淇水

竹川　有廣

木村　泉石

壁上古筆

古画關帝像

右　森　氏出品

＊＊＊

森徹山画狗子図

右　仝　雄山出品

今書画着順

草書二行　遠山盧山

春江魚楽図　山中秋帆

懸崖蘭梅図　仝

虎溪三笑図　林　耕雲

那智瀑布図　鈴木松年

＊＊＊

松月図合作　松仙　松花

右　松年　書

盆栽合作　松華　松仙　太年松峯松堂

菊花図　松　堂

七言二句　山田松花

瀑布　図　岡田龍年

荷花図　薮内梅雲

仝図　齋内太年

韓信訪辛奇樓図　森川曽文

＊＊＊

天保九如図　横山曽立

美人図　若林曽岳

幽州新歳図　長谷川玉純

水中游鮎図　西村耕文

劉阮天台山図　深田直城

雨中清水寺図　小幡文華

野見宿称図　三宅文暁

＊＊＊

東方朔図　桃井月花

雪中芦図　門　照憺

鼓子花小禽図　浅田政一

風雪三顧図　田中幽峰

行書　富田記堂

仝　河村重山

觀世音図　秦　寶英

散花図　仝

＊＊＊

芙蓉花戯雀図　國井應文

蓬來山図　藤田文英

牽牛華図　小林文恭

葡萄栗図　吉田文孝

仝　佐々木鴻洲

西行絶銀猫図　仝

東大谷図　野村文學

月下夕　図　中嶋有章

＊＊＊

橋弁慶図　仝　恭岳

牛若丸図　喜田華友

小島高德図　久保田米僊

白蓮白鷺図　山本桃陽

枯木雙鳥図　佐木桃陰

寒山拾得図　茨木翠嶽

醉李伯図　八木漱石

蓮白鷺自詠　仝

＊＊＊

墨画山水図　森　寛齋

瀑布　図　西村桃嶽

竹　雀図　森　雄山

萩蝶図　西村暁雲

女良花図　岩井蓝水

蒼翠春色図　並待　西谷淇水

一笑図　竹川友廣

伊勢

＊＊＊

萩水禽図　長谷川應章

○

七絶詩　淺井竹香

行書　仝

茶席　亀　良則

幹叟

蛸ヤクシツシ　河関　氏

六角堂マエ　赤松　氏

（資料二十六）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

八

月並展観書画録

「如雲社記」朱文方印

【本文】

八月十一日於裏寺町妙心寺

壁上古書画

圓山應擧画寒山拾得図　西瓜窪図　竹川友廣

松村景文画牡丹小禽図　夏景山水図　奉　金石

長谷川玉峰画雨中山水図　夏山瀑布図　前川文嶺

右　森川氏出品　莞菊図　長谷川玉純

横山晴暉画雪中瀑布図　高雄山秋景図　三宅文暁

右　友梅堂出品　二仙人図　横山曽岳

＊＊＊　近江八景図　山田松渓

菊地容齋擬石板法人物山水図　猛虎図　仝

右　竹川氏出品　蓮花図　山本暉山

新書画着順記　飲中八仙図　仝

鈴木百年画旭図春江女画若松　四條川原涼発句　半一潭

春江女画山水　百年　題詩　陶淵明飲酒詩隷書　八木漱石

夏景山水図　鈴木松年　秋草　図　国井應陽

梅林　山水　図　仝　平□盛幽霊図　福智秀溪

南風詩　行書　遠山廬山　二喬讀書図　西村桃嶽

＊＊＊　＊＊＊

詠鐘馗詩草書　西谷淇水　蓮華図　仝

寿老人愛鹿図　岩井籃水

馬司公図　大隅松齋

童子游図　山元春擧

墨梅　図　奥谷秋石

白漣　図　森　雄山

飛蛍　図　仝

氷　献　上図　森　寛齋

＊＊＊　＊＊＊

鬼□ヲトリ図　大津　清水東陽

并　木村泉石三回忌追福

手向　部

祭主　森社中

合作　草花鳥図　各名略　幹事

蓮花蟹図　佐々木鴻州　奥村又四良

獅子象図　森川曽文　茶席

寒山十得図　椹木豊文　亀　良則

＊＊＊　＊＊＊

菩提樹佛法島図　友田曽年　壁上

仝　図　藤井曽岳

合歓花小禽図　仝　梅花園詠本居翁歌

蓮華白鷺図　小幡文華

渡唐天神像　三宅文暁

観音大士図　今尾文儁

達广大師像　浅田政一

羅漢図　門　照濤

＊＊＊　＊＊＊

同　前図　桃井月華

寒山拾得図　椹木豊文

子英昇天図　西村耕文

観世音像　服部清文

親蠻上人□石図　長谷川玉純

荷花図　森川玉蒲

源氏□魚図　本部有数

夏草小禽図　仝

＊＊＊

當　直

（資料二十七）
＊＊＊は頁が変わることを示す。
□は判読できない文字を示す。
【表紙】
□
展観書画録
朱文方印「如雲社記」
【本文】
九月十一日　於裏寺町　西林寺
當直
山本桃谷
中島有章
庭阿弥竹翠
壁上古筆
圓山應擧画　伏義像
右　国井氏出品
＊＊＊
仝賢本カシ鳥図
右　山本氏出品
仝應震画　菊花図
右　万成堂
今書画着順
松竹雙清図　鈴木松年
不倒達磨図　仝　松仙
飴賣図　山田松渓
＊＊＊
月景嵐山図　仝

月夜老松図　土田喜仙
秋景山水図　中野松堂
瀑布下青楓図　岸　鶴亭
芭蕉雁來紅図　薮内梅雲
西王母図　岡田龍年
渓亭觀楓図　仝
大津繪集図　齋内太年
＊＊＊
月下豆図　前川文嶺
月下雁図　山本文聖
柿木□図　武藤松堂
楊柳觀音図　本部有数
月下虫図　仝
日蓮上人涅槃図　久保田米僊
源義家觀歸雁図　仝
月夜東山図　山田金仙
＊＊＊
行書一行　遠山盧山
行書　西谷愛石
仝　川北春湖
仝　大田天涯
〃　河村□山
〃　松居東嶽
川﨑東塘
三井髙生
蓬萊山図
＊＊＊
山水図　仝

満月図　仝
□衣図　國井應文
山水図　吉田文孝
月下渡江図　藤田文英
牽牛華図　竹川友廣
小禽図　仝
大真王夫人図　長谷川王純
＊＊＊
遊女　雲太夫図　森川曽文
雨中楊柳図　若林曽岳
南極星図　三宅文暁
雉　子図　桃井月花
旭下若松図　横山曽立
美人図　小幡文華
葉牡丹図　門　照濤
雨　景　図　西村耕文
＊＊＊
枯芦水月図　深田直城
都清閑寺図　遠藤速雄
旭前稲穂図　西池成義
櫻花図　浦野梅死
葡萄栗鼠図　山本桃□
梅花図　佐木桃陰
屋図　中島恭岳
観世音図　喜田花友
＊＊＊
海邊群雀図　女史　跡見玉枝

茄子図　仝
白衣大士像　八木漱石
水墨蓮花図　西村桃嶽
月下秋草図　仝
達广大師図　小津疊波
水墨芭蕉図　森　雄山
菊花　図　岩井藍水
＊＊＊
絢代守図　西村暁雲
柳　三日月図　大隈松齋
秋草満月図　森　寛齋
暗夜曳牛図　仝
水墨猛虎図　山本桃谷
枇杷鶺鴒図　庭河ミ竹翠
水中遊鯉図　中嶋有章
サヌキ
＊＊＊
疊山　清暉図　江良　屋山
月下山水図　仝
〇
木村泉石　遺墨
達广大師像
立雀図
手向画蓮之図　合作
名録
＊＊＊
淇水書應之歌以画　松齊

恭岳　文英　暁雲　雄山

桃嶽　寛齋

茶席

亀　艮則

幹夏

富小シ二条　瑞星堂

蛸ヤクシ界　通仙堂

（資料二十八）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

月並展觀書画錄

朱文方印「如雲社記」

【本文】

三月十一日　於裏寺町妙心寺

壁上古筆

趙子昂画　東坡居□図

右　雨森氏出品

圓山應擧画雲雀図

仝應□画澤□図

仝應震画津久間祭図

仝應瑞画芒図長澤芦洲画葛図＊

＊＊

右合作　光□卿賛

星野氏出品

呉月溪画桃源図

右　大隈氏出品

仝景文画瓢図

右　万成堂出品

岡本茂彦画寳舩図

仝弦召図

＊＊＊

奥村氏出品

今書画着順

七絶詩草書　遠山盧山

春景山水図　仝　墨稼

七言詩草書　仝

草書四行　西谷淇水

春秋山水図双幅　鈴木松年

雪中山水図　仝　松仙

＊＊＊

西行□歌仙図　草野龍雲

櫻花画并書千代句　山田金仙

涅盤像（ママ）　仝　松溪

月下梅花図　前川文嶺

大石良雄戯墨図　渡辺秋溪

牛若弁慶図　西村華涛

大□図　八木漱石

雪中華頂山図　森川曽文

＊＊＊

野菜賣女図　長谷川玉純

寒色図　若林曽岳

岸上海塢図　西村耕文

寒山夕陽図　深田直城

枇杷花図　小幡文華

槲鷄鳩図　三宅文暁

緑竹獨鶴図　桃井月花

太湖石芭蕉図　佐木鴻州

＊＊＊

檜樹木鬼図　跡見玉枝

月下糸櫻図　国井應文

青柳燕図　小林文恭

菜花雉子図　藤田文英

王羲之愛鵞図　森　寛齋

琴高仙人図　真名井涛斉

列子仙人図　森　雄山

桃花図　仝

＊＊＊

雨景山水図　三輪青谷

芦厂図　大陽松齋

四睡図　仝

篭中蛤図　岩井籃水

新栁鶯図　中路芦笛

旭下若松図　森川玉蒲

壽老人図　仝

四季花卉図　女史　倉治春江

＊＊＊

溪流山鳥図　山本桃陽

當直

立雛図　星野蝉水

瀑布下李白図　山本桃谷

小切繪四枚　仝

幹　寺町二条　奥村

叟　二條釜坐　大十堂

茶席　亀　良則

（資料二十九）

＊＊＊は頁が変わることを示す。

□は判読できない文字を示す。

【表紙】

二

月並展観書画録

朱文方印「如雲社記」

【本文】

二月十一日　於裏寺町妙心寺

壁上古筆

柴田義董画二仙人圍碁図

圓山應震画立鶴図

右　石川氏出品

林蘭稚画瀑布図

右　友梅堂出品

近澤霞彩画秋景遊鹿図

＊＊＊

岡島清曠画楪葉鶯図

右　奥村氏出品

狩野永俊画墨梅図

右　金﨑氏出品

狩野秀信画蓬來山図

狩野永真画海邊双雀図

右　佐々木氏仝

今書画着順

＊＊＊

四字一行書　遠山盧山

七言詩草書　西谷淇水

石間水仙花図　鈴木百年

墨梅図　合作　仝　松年

高砂図　仝　松仙

楠公像　山田松溪

羅漢像　仝

竹狗子　山田松華

＊＊＊

月下人物図　仝

静女舞図　本部有数

竹鷦鷯図　仝

溪間春蘭図　大岩苔生

羅陵王図　森川曽文

歳寒二雅図　三宅文暁

郭子儀図　桃井月花

仙人図　西村耕文

＊＊＊

播州犬寺故事図　長谷川玉純

月瀬図　小幡文華

波濤旭図　若林曽岳

洋犬図　深田直城

鯛槌図　横山曽立

寒夜詩　三野老山

梅林山水図　伊藤玉峰

雪中芦雁図　中川竹幹

＊＊＊

羅漢図　前川文嶺

出山佛図　佐木鴻州

梅花狗子図　浦野梅苑

梅林山水図　西池成義

琵琶落葉図　竹川友廣

呂洞□図　藤田文英

雙犬三雀図　吉田文孝

左　群猴図　森　寛齋

＊＊＊

中　瀑布図　仝

□　群鹿図　仝

梅鳥図　真名井涛斉

墨梅図　三輪青谷

梅花鵲図　森　雄山

梅華小禽図　森川玉蒲

渡唐天神図　仝

紅梅黄鳥図　中路芦笛

＊＊＊

伊勢

梅花図　長谷川玉章

南極星図　仝

大津

子之一日遊図　清水東陽

神戸

七言詩　神矢香□

並　社祖

＊＊＊

狩野永祥先生追福

遺墨

雲龍図　狩野氏出品

觀世音図　仝

東方朔図　仝

觀音大士図　森氏出品

鶴亀図　双幅　壽昌堂出品

林和靖図　仝

＊＊＊

三星図　仝

鮭魚図　仝

嵐山春景図　大岩氏出品

雲龍図　仝

檜樹木兎図　萬成堂　仝

茶席　主　亀良則

壁上〇永祥繪業平望富岳図

并賛海屋書僧大綱歌　八木氏出品

＊＊＊

當直　幹叟

寺町二条　奥村

二条寺町　万成堂

蛸ヤクシ界　通仙堂

富小シ二条　瑞星堂

寺町丸太町　壽昌堂

寺町万壽シ　竜麟堂

二条釜坐　大十堂

＊＊＊

寺町佛光寺　白鹿堂

御影堂　庭　阿弥
高辻冨小シ　友楳堂
蛸ヤクシ河原町　河關堂
六角鳥左　赤松堂
万壽シ高峯　隣光堂
浪花　白水堂
大津　元亀亭

執筆者紹介（敬称略・掲載順）

稲垣　恭子　　京都大学　理事・副学長

林　　潤平　　京都市学校歴史博物館　学芸員

森田　淑乃　　京都市学校歴史博物館　学芸員

京都市学校歴史博物館

研究紀要　第一〇号

令和五（二〇二三）年　六月　発行

編集・発行　京都市学校歴史博物館

京都市下京区御幸町通仏光寺下る

橘町四三七番地